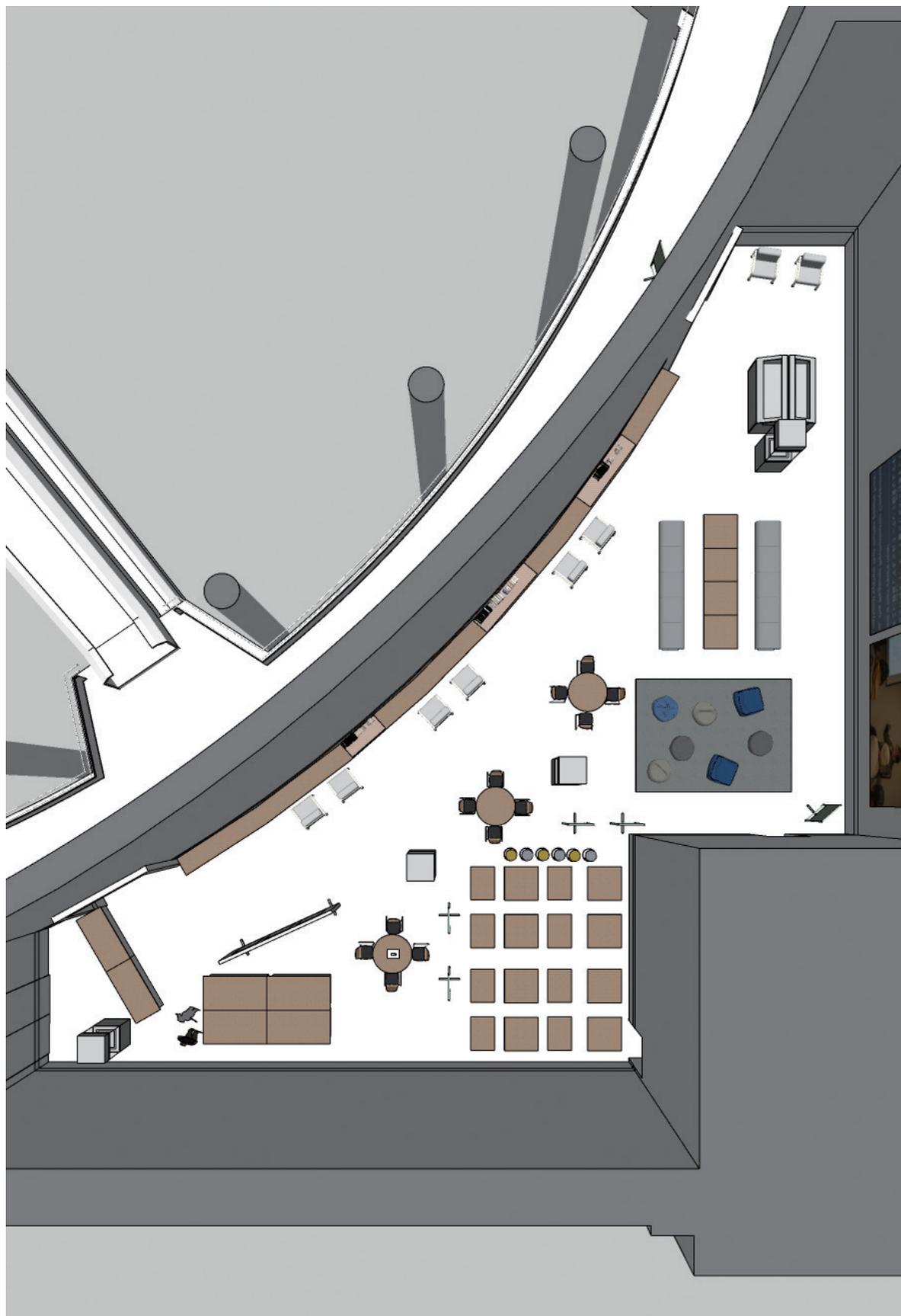


# 国際芸術祭「あいち2025」

## ラーニング

### ドキュメントブック



国際芸術祭「あいち2025」

ラーニング

ドキュメントブック

Aichi Triennale 2025

Learning

Documentation Book



ラーニング・ボランティア・ウィーク「FARM2025「あいち2025」の作品を通して世界を cultivate する!!」を実施するボランティアと参加者  
Photo: 三浦知也

「考える大テーブル」のそばにはラーニング・ボランティア・ウィークに向けた実験の痕跡が残る  
Photo: あい撮りカメラ部 竹内久生





開幕直後の《瀬戸の版築プロジェクト「凹」》  
Photo: 怡土鉄夫



会期終盤の《瀬戸の版築プロジェクト「凸」》  
Photo: 三浦知也

学校向け団体鑑賞プログラムで、愛知芸術文化センターに展示された  
大小島真木《明日の収穫》についてボランティアが対話型鑑賞ツアーを実施



瀬戸市のまちなか会場 旧瀬戸市立深川小学校に展示された  
アドリアン・ビシャル・ロハスの作品《地球の詩》について、  
コーディネーター（現代美術）の本多康紀が作品解説ツアーを実施  
Photo：岡松愛子





ラーニング専門研修「鑑賞をふかぼる」に参加したボランティアが実施する「週末の鑑賞をふかぼる」  
Photo: 稲田匡孝



ラーニング専門研修「あいま研」のボランティアが3回のテーマ読解を経て、ラーニングセンターへたちの壁面にテーマ/コンセプトを書く  
Photo: あい撮りカメラ部 竹内久生



ラーニング専門研修「インタビューの練習」の成果をまとめた映像「芸術祭をつくる人々へのインタビュー」の前で振り返りを行うボランティア



「考える大テーブル」で企画会議を行うラーニングチームメンバーとボランティア  
Photo: あい撮りカメラ部 竹内久生



瀬戸市立長根小学校を訪れたマユンキキ<sup>+</sup>(マユンキキ、hoshifune)によるアイヌ伝統歌・影絵ワークショップ



瀬戸市の保育園を訪れたソロモン・イノスによる壁画制作ワークショップ

## 巻頭言 芸術祭の土台としてのラーニング

本書は、国際芸術祭「あいち2025」におけるラーニングの実践を、活動の経緯や判断の背景とともに記録した一冊です。

今回のラーニングは、「誰もが安心して楽しめる芸術祭の環境づくり」という目標を掲げ、各プログラムを運営してきました。ただこの言葉は、各プログラムの特色を強く規定するものとしては用いられておらず、あくまでもラーニング全体の方針を柔らかく示す存在として据えられていました。しかも、キュレーターが先頭に立って意思決定を進めるのではなく、異なる専門性を持った5人のチームによる合議によってあらゆる方針を決めていったので、一人の人間から生み出されるような鮮やかなメッセージやビジョンも打ち出されていません。

一方、だからこそ、プログラム同士にはどこか有機的な関係が生まれ、結果的に国際芸術祭「あいち2025」のラーニング部門独自の空気感のようなものを感じてもらえるような取り組みになったという確信を私は持っています。

しかし、その目に見えず言葉にもしづらい空気感のようなものをドキュメンテーションやアーカイブで正確に伝達するのは非常に難しい。それぞれのプログラムは確かに粒立って豊かなものになった手応えはあります。が、ラーニング部門の活動全体を改めて見つけた時に、プログラムごとに整理する方法では、部門全体に通底していた関係性や空気感が捉えきれない懸念がありました。

そこで、プログラムごとの紹介は最小限として、各プログラムを横断するテーマをチームで考えるイベント(ラーニング・ラーニング【番外編】)を芸術祭会期の最終日、2025年11月30日に開催しました。

その時に話し合ったテーマが以下の4つです。

- ① 持っているものの力を引き出す
- ② 手を動かして考える
- ③ 安心して楽しめる環境を支える
- ④ 誰かの体験に参加する

これらのテーマを章立てに据え、私たちの活動をご紹介します。

本書には、芸術作品はほとんど登場しません(作品解説は公式カタログに詳しいです)。国際芸術祭「あいち2025」のラーニングは、現代美術とパフォーマンスアートとともに三本の柱と位置づけられていますが、実際に運営に携わってみて、どちらかという三本の柱というよりも、作品や公演という芸術祭の主役を支える土台のような位置づけの方が今は適切に感じています。

辻琢磨

国際芸術祭「あいち2025」  
キュレーター(ラーニング)

# 国際芸術祭「あいち2025」 ラーニングドキュメントブック

2	フォトアーカイブ
11	巻頭言

## 国際芸術祭「あいち2025」ラーニングのコンセプトとプログラム概要

14	コンセプト
15	チーム紹介
16	ボランティアプログラム「会場運営サポート／対話型鑑賞ツアー／ラーニング」 ボランティア活動区分「ラーニング」のテーマ
18	ラーニング・ラーニング／学校向けプログラム／アクセシビリティプログラム
19	拠点 ラーニングセンターへたち／ラーニングセンターせと／瀬戸リソースバンク／ 瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」

## 特集① 持っているものの力を引き出す

22	エッセイ 辻琢磨「そこにある力を引き出す」
24	論考 大岩雄典「workとworkshopのあいまに ——《瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」》について」
30	ラーニング専門研修「インタビューの練習」（担当：黒田菜月）
34	プログラム「へたちトーク」
36	コラム 黒田菜月「芸術祭を遠くに飛ばしたい」

## 特集② 手を動かして考える

38	対談 辻琢磨×村上慧「《瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」》を振り返る」
42	ラーニング専門研修「あいま研」（担当：浅野翔）
46	プログラム「ラーニング・ボランティア・ウィーク」
48	コラム 浅野翔「手を動かして考える」

## 特集③ 安心して楽しめる環境を支える

50	エッセイ 副田一穂「ぬかるみのラーニング」
52	座談会 森山純子×ラーニングチーム「安心して「学び」が動き出す場をつくる」
56	ツアープログラム「対話型鑑賞／作品解説」
59	ボランティアプログラム「会場運営サポート」
60	拠点整備「ラーニングセンターへたち／ラーニングセンターせと」
62	アクセシビリティプログラム「やさしい日本語チラシ」
63	コラム 野田智子「安心を支えるボランティアの人びと」

## 特集④ 誰かの体験に参加する

66	エッセイ 会田大也「対話の紡がれる地、あいち」
68	ボランティアプログラム「対話型鑑賞ツアー」
71	コラム 大場美葵「対話の場を、共に紡いでいく」
72	学校向けプログラム「学校向け団体鑑賞プログラム／アーティスト派遣事業」
74	ラーニング専門研修「「鑑賞」をふかぼる」（担当：村上慧）
80	炎を囲む三日三晩——「瀬戸」に触れる特別な時間 「星をつくるテーブル／詩を囲む夕べ／凸凹トーク」
82	プログラム「ラーニング・ラーニング」
84	コラム 村上慧「アートというテーブルに集まる」

## データベース

86	逆引き目次
88	タイムライン
92	ライブラリーのブックリスト

本書に掲載している写真は、各ページに記載のクレジットに基づきます。  
クレジット表記のない写真は、国際芸術祭「あいち2025」ラーニングチームまたは事務局が撮影しました。

## コンセプト

国際芸術祭「あいち2025」のラーニング・プログラムは、誰もが安心して楽しめる環境づくりを目指しました。あいちトリエンナーレ2010から15年にわたって芸術祭を支えてきた存在であるボランティアとともに、来場者も地域の方々も、それぞれの立場で積極的に参加できる仕組みづくりをミッションに掲げました。



Photo(上・下)：三浦知也

## チーム紹介

今回のラーニング・プログラムは、建築家、デザインリサーチャー、写真家、アートマネージャー、アーティストなどの多様な専門領域を持つメンバーを中心に企画・運営しました。「あいち2025」のテーマを踏まえて議論を重ね、多様な人々が暮らす社会において、私たちはどのような学びと向き合うことができるのか、という課題について考え続けました。

異なる立場で実践を重ねてきた私たちはそれぞれの専門知識と経験を活かし、しばしば自分の経験や立場を省みながら、誰もが安心して楽しめる芸術祭を実現するために尽力してきました。

## 運営体制

浅野翔・黒田菜月・辻琢磨・野田智子・村上慧（チームメンバー）、  
松村淳子（コミュニケーター）、小出一葉・小林玲衣奈（ファシリテーター）、  
蛭間友里恵（コーディネーター）、丸本貴之・藪谷恭江・安井友美（事務局スタッフ）

# ボランティアプログラム

「あいち2025」では、これまでも実施してきた展示作品の看視、受付、会場案内・誘導の補助などを行う「会場運営サポート」と、ボランティアが参加者同士の対話を通して作品の見方を来場者と深める「対話型鑑賞ツアー」を継続するとともに、「ラーニング」という活動を新設し、複数のテーマの下、集まったボランティアにラーニングチームのメンバーが伴走し、プログラムの企画立案から実施までを行いました。

活動区分

## 会場運営サポート

各会場において、展示作品の看視、受付や来場者への会場案内・誘導を行い、会場の運営をサポートしました。また、作品解説ツアーやパフォーミングアーツ公演の補助を担いました。

## 対話型鑑賞ツアー

研修を受けたボランティアがツアーのガイド役となり、「対話型鑑賞」※の手法を用いたツアーを行いました。各会場で定期的の実施した「対話型鑑賞ツアー」のほか、学校向け団体鑑賞プログラムや子どもを対象としたツアー、視聴覚に障がいのある方を対象としたツアーや日本語以外を母語とする方を対象としたツアーを実施しました。

※対話型鑑賞とは、解説員による一方的な作品解説とは異なり、ファシリテーターのナビゲーションにより鑑賞者同士の対話を軸に鑑賞を進めていく集団鑑賞の方法です。

監修：会田大也、大場美葵

## ラーニング

「あいち2025」で新設した活動区分「ラーニング」では、3つのテーマに分かれて専門研修を重ね、会期中も各テーマをもとにした活動を展開しながら「ラーニング・ボランティア・ウィーク」で自主企画の企画立案から実施までをラーニングチームとともに取り組みました。

ボランティア  
活動区分「ラーニング」のテーマ

### 「鑑賞」をふかぼる

「作品は解釈を待っている」と考えるラーニングチームのメンバー村上慧が発案した、みんなで展覧会を鑑賞し、鑑賞後に感想を話し合う活動です。アーティストの表現活動を受けとめ、その中身について人と話し合うことによって、お互いの考えを深め、展覧会をひとつの経験として持ち帰ることを目指しました。会期中はラーニングの拠点で、来場者向けに行う「鑑賞」をふかぼる」を運営しました。

Photo：三浦知也

### インタビューの練習

「ちょっと真面目な話をしてみたいけど、なんて声をかけたらいいだろう」。身近な人に対して、そんなふうに思ったことはありませんか？このテーマでは、他者とのコミュニケーションについて考えることを通して、芸術祭に関わる人々へのインタビューを行う実践的な活動に取り組みました。ラーニングチームのメンバーである黒田菜月がナビゲートしながら、インタビューを行うための準備として、自分の気持ちを言葉にしてみたり、質問の内容を考えるなどのワークを行い、コミュニケーションについて改めて考えました。また、会期中はボランティアが実施したインタビュー映像を、ラーニングセンターで上映しました。

### あいま研

ラーニングチームのメンバーの浅野翔がボランティア参加者とともに「あいち2025」のテーマにちなんだ「あいま」を探る活動に取り組みました。この活動では、ボランティア参加者一人ひとりが持つ経験や、置かれている立場、感じていることを丁寧に見つめ直しながら、現代社会のさまざまな課題や変化する価値観の「あいま」を一緒に探りました。芸術祭という非日常的な場や、地域の文化や歴史にふれながら、現在と未来を横断する問いをボランティア参加者とともに立ち上げました。会期中には、図解やメモ、対話の記録など、参加者による思考の軌跡を展示し、「あいま」を問い続ける場をひらきました。



## ラーニング・ラーニング

「ラーニング・ラーニング」とは、“ラーニングを学ぶ”ということコンセプトとし、参加者一人ひとりが、自分たちの立っている場所をともに学ぶ・知る・気づく・対話することを重視する参加型プロジェクトです。さまざまな専門家を招いたトークイベントに加えて、ディスカッションやワークショップなどのアクティビティを通じ、それぞれが芸術祭を通じた学びを、より身近に感じられるよう会期前の2025年1月から実施しました。

## 学校向けプログラム

児童・生徒が国際色豊かな現代アートに触れ、楽しんでもらう機会とするため、教育機関と連携し、学校向け団体鑑賞プログラム（対話型鑑賞ツアーや土を使ったアートプログラム等）や、芸術祭参加アーティストを県内の教育機関へ派遣し、ワークショップなどの交流活動を行うアーティスト派遣事業を実施しました。

### 学校向け団体鑑賞プログラム

- 対話型鑑賞ツアー
- 自由鑑賞
- 土のアートプログラム（愛知県陶磁美術館のみ）

### アーティスト派遣事業

- 派遣アーティスト
- マユンキキ<sup>+</sup>
- ソロモン・イノス
- ハイブ・アース

## アクセシビリティプログラム

視聴覚に障がいのある方や小さなお子さんを連れの方など、様々な人々を対象にして、キュレーターやボランティアなどによる、ツアーや鑑賞サポートを行いました。また、子どもや日本語以外の言語を母語とする方も読みやすいような「やさしい日本語チラシ」を県内の小学校や日本語教育機関等へ配布しました。

### ツアープログラム

- | 対話型鑑賞   | 作品解説   |
|---|--|
| — 対話型鑑賞ツアー（各会場で定期開催）  | — 作品解説ツアー  |
| — 子ども向け対話型鑑賞ツアー   | — 作品解説ツアー【小さな子ども連れ向け】                                    |
| — 聞こえない・聞こえづらい方のための対話型鑑賞ツアー【筆談編】<br>（協力：NPO法人愛知県難聴・中途失聴者協会） | — 作品解説ツアー【中高生向け】<br>（協力：NPO法人愛知県難聴・中途失聴者協会、あいち聴覚障害者センター） |
| — 見えない・見えづらい方のための対話型鑑賞ツアー<br>（協力：社会福祉法人名古屋ライトハウス 情報文化センター）  |  |
| — 日本語以外が母語の方のための対話型鑑賞ツアー                                    |  |

## 拠点

ラーニング・プログラムでは、来場者が芸術祭との関わりを多角的に増やせる場所として、愛知芸術文化センターと瀬戸市のまちなかに拠点を設けました。2つの拠点は、もともとその建物にあった家具等を活用しながら、来場者が休憩やおしゃべりなどにも気軽に利用できるような憩いの場として、また、レクチャーやワークショップなどのプログラムを実施する学びの場として環境づくりを行いました。さらに、芸術祭を支えるボランティアの活動拠点としての役割も担い、来場者とボランティアの交流を深めることができる場として運営しました。

### ラーニングセンターへたち

（愛知芸術文化センター8F展示室J）

「へたち」とは、建築等の文脈で、道路整備等により取り残された変わった形の土地を意味します。愛知芸術文化センターの巨大な吹き抜け空間に切り取られた「へたち」である展示室Jに、その特徴を活かしたラーニングセンターへたちを開設しました。

拠点運営スタッフ：

植村優子、加藤忍、鈴木はな、鈴木莉子、高井和乃

### 瀬戸リソースバンク

（瀬戸信用金庫アートギャラリー）

愛知県陶磁美術館と瀬戸のまちなか周辺は窯跡が点在するやきものの産地です。陶土が生む地形と植生、燃料利用による景観変化を、陶土・原料試料や植物標本で紹介。資源をリサーチする参加アーティストの資料も展示し、作品背景と「あいち2025」への理解を深めました。

### ラーニングセンターせと

（旧小川陶器店）

ラーニングセンターせとを開設した旧小川陶器店は、かつては老舗の国内向け陶磁器卸売・小売店でした。センター内の什器には、もともと小川陶器店で陶器が並んでいた特徴的な棚を活用しました。



Photo：城戸保

### 瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」

（愛知県陶磁美術館）

ガーナを拠点に環境に配慮した建築の融合に取り組むスタジオ、ハイブ・アースと協働して《瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」》を実施しました。ハイブ・アースは主に版築のテクニカルサポートを務め、ラーニングチームが設計と制作作業を担い、版築と土をテーマにした構築物を愛知県陶磁美術館内の2か所に設置しました。「つくるとこ！陶芸館」の中庭の「凸」は、同館の日常的な活動をバックヤードから眺めるためにつくられた版築のスタンド席です。「デザインあいち」前の「凹」は「凸」をかたち作る土を確保するために掘られた穴そのもので、「凸と凹」は表裏一体の関係にあります。また作品の一部には、瀬戸少年院の少年たちが手がけた版築ブロックを組み込みました。芸術祭の会期後、「凸」は解体され、「凹」に埋め戻されました。土を掘って、動かし、突き固め、元の場所に埋め戻すというこのプリミティブな一連の行為を通じて、人間の営みが環境に与える影響について改めて考えるプロジェクトとなりました。

### 《瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」》

招聘作家：ハイブ・アース  
プロジェクトディレクション：ラーニングチーム  
設計デザイン：辻琢磨、村上慧  
マネジメントサポート：坂田実緒子（2024年9月 -2025年3月）、松村淳子  
アーティスト担当：副田一穂  
プロジェクト協力：岩淵寛、澤井祐輝  
コンストラクションマネジメント：三谷裕樹、寺田春芽  
掘削工事：溝口達也、松田泰明、荒田耕作、山内誠万  
制作ワークショップ：秋江菜央、貝沼千尋、小島華野、近藤芽衣、神農わかば、豊田健太、土本恵大、中野遥翔、平田瑞稀、平野愛奈、細野未来、増子翔、宮川遥、森井文子、山口涼菜、渡辺柗人、渡邊凌央

# ラーニングセンター

## へたち



## 持っているものの力を引き出す

ラーニングの活動において私たちが目を向けてきたのは、国際芸術祭「あいち2025」における「すでにあるもの」の可能性です。会場の環境、集う人々、積み重なった経験。それらを単なる背景ではなく、新たな体験を生む起点に据えること。知識を一方向的に提示するのではなく、一人ひとりの実感から問いを立て、対話を通じて新しい世界の見方を探っていく。それが、私たちのラーニングの姿勢です。

本特集「持っているものの力を引き出す」では、この試行錯誤を多彩な視点から記録しています。ラーニング部門キュレーターの辻琢磨によるエッセイ「そこにある力を引き出す」では、すでにある芸術祭のリソースへの眼差しが描かれています。大岩雄典さんによる寄稿論考「workとworkshopのあいまに」では、《瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」》をきっかけに作家とラーニング、ひいては芸術祭におけるラーニング部門のあり方に対する問いを投げかけています。ラーニング専門研修「インタビューの練習」の記録では、ボランティア参加者が芸術祭に関わる人々へのインタビューを通じて、自分の気持ちを言葉にしてみたり、相手の声に耳を傾ける等のコミュニケーションそのものについて向き合うという活動と、その声を映像へと結実させた実践が綴られています。さらに、国際芸術祭「あいち2025」における裏側の仕事を深掘りするプログラム「へたちトーク」では、現場に宿る専門知の共有を通じて、芸術祭を体験する異なる視点を提供しています。

ラーニングチームメンバー黒田菜月によるコラム「芸術祭を遠くに飛ばしたい」は、ボランティアや参加者と共に生まれる熱量を手がかりに、芸術祭という期間と場所を超えて共有可能な経験へと拡張しようとする思いを語っています。

## 持っているものの力を引き出すためのリサーチ

持っているものの力を引き出す、というのは建築設計を本業とする私が設計の際によく考えていることです。こうしたスタンスは建築設計をフィールドとする者固有のアプローチだと認識していたのですが、いざ芸術祭の準備・企画・運営が始まると、暗黙の了解のようにチームメンバーも同じ空気感を共有してくれていて、結果的にこのドキュメントブックの見出しの一つになっていました。私自身の建築の仕事では、いわゆるリノベーションが多く、もともとの空間の良さをなるべく活かし、自分の設計で新たに手を加えるのは最小限に抑える意識を持っています。そのためには、もともとある空間のどの部分は使えて、どの部分は変えた方が良いのか、という判断が非常に重要で、その判断のためには既存空間のことをよく知らなければいけません。だから、事前のリサーチは入念に行います。

今回のラーニング事業は建築設計ではありませんが、2023年の秋に打診を受けてから、まず私が始めに行ったことはこのリサーチで、過去のキュレーター、アーキテクト、ボランティア経験者らに、ヒアリングを行うところから始めました。話を聞きながらラーニング部門のミッションとして、ボランティア組織のサポート、来場者向けの教育普及イベントの企画、学校連携、アクセシビリティ、拠点の運営が重要な位置づけであることがわかってきました。中でもボランティア組織は、2005年に開催された愛・地球博のボランティア組織が前身のあいちトリエンナーレに引き継がれ、1000人規模のネットワークがすでにあるとのことで、「1000」という数字に呆気にとられてしまったことをよく覚えています。

2024年の6月にはボランティア交流会を実施し、そこでもヒアリングを続けました。今回、ボランティアの活動区分を「あいち2022」の「会場運営、ガイドツアー、対話型鑑賞」の3つから「会場運営サポート、対話型鑑賞ツアー、ラーニング」の3つに更新していますが、これはこの交流会でいただいた意見を参考にしました。活動区分「ラーニング」は、もっと自分で企画してみたい、アーティストと関わってみたい、という声を拾うためにボランティア自身が自ら企画を考える活動区分として新設しました。

こうした事前リサーチを経て少しずつ企画体制を考えしてきました。今回、すべてを一新してラーニング部門を運用するイメージは当初から持っていませんでした。引き継げるものは引き継ぐことで芸術祭の歴史を継承しつつ、これまで関わってきた方々が引き続きスムーズに馴染める環境を用意したかったからです。前述のボランティア交流会ではボランティアによる「対話型鑑賞」についての意見・関心が目立ち、「あいちトリエンナーレ2019」から文化として積み上げられてきている感触を持ちました。そこで前回、前々回の芸術祭でラーニン

グのキュレーターを務め、対話型鑑賞を導入した会田大也さんとサポート役を担った大場美葵さんに「対話型鑑賞ツアー」の監修をお願いし、前回との連続性も意識しました。また、学校向けプログラムとして前回まで実施されていたアーティスト派遣事業、団体鑑賞プログラムはその大枠を変えずに主に事務局主導での運用とすることで、芸術祭が時間をかけて蓄積してきた実践を最大限に活かそうと考えました。

こうして私たちは、芸術祭の開幕まで約2年間を準備期間に充て活動しました。その中で前述したリサーチやヒアリングだけでなく、来場者向けのイベントも行いました。2024年10月に開催された「国際芸術祭「あいち」地域展開事業『底に触れる 現代美術in瀬戸』』（以下、地域展開事業）では、アートプログラムユニット・フジマツによって運営されたボランティア活動「ボランティアと深める」の拠点にもなった「交流センター」の環境整備をラーニングチームが担い、この拠点を本番年のラーニングセンターせととして利用することができました。同じく2024年11月に開催された SOCIAL TOWER MARKETでの芸術祭ブースでは村上慧による版築ワークショップ「星をつくるテーブル」を実施、これも本番年の「炎を囲む三日三晩——「瀬戸」に触れる特別な時間」で同じく展開され、「ここにグッときた。芸文のおもしろポイントを巡るツアー」では、愛知芸術文化センターを建築的な視点から紹介するツアーを企画し、ここで芸文という建物について改めてリサーチしたことが、後の「へたち」のアイデアにつながっています。また、2024年の1月から3月にかけては、公開型のレクチャー・ワークショップイベント「ラーニング・ラーニング」のVol.01～04を開催しましたが、ここでお招きしたゲストは芸術祭に関わるキュレーターやアドバイザーが主で、自分たちが自身が芸術祭を学ぶための企画でもありました。

こうしたイベントは、実際にプロジェクトを動かしていく中で、メンバーそれぞれが、どのような仕事に向いているか、どのような活動にモチベーションが向くか、というその後の役割分担のためのリサーチとしてもうまく機能してくれたと思います。

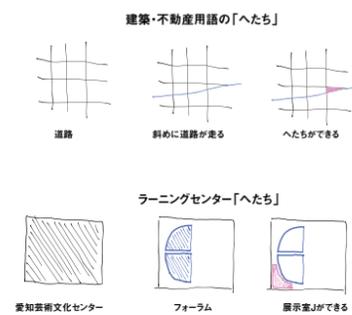
こうしたリサーチや準備を通して見えてきたのは、ラーニング部門にとって重要なのは、新しい仕組みをつくることよりも、すでにこの芸術祭の中にある人や経験、場の蓄積をどう読み直し、どう引き継ぐかという点でした。すでにそこにあるものを丁寧に読み込み、活かせる部分と手を加える部分を見極めること。その判断の積み重ねが、次に触れる具体的な場づくりや企画の前提になっていきます。

## そこにある力を活かした場づくり

今回、ラーニングでは2つのラーニングセンターを愛知芸術文化センターと瀬戸市のまちなかに整備しました（本書ではラー

ニングセンターの会場設計をクレジットとしては記載していませんが、運営上の判断としてキュレーターがその設計を行いました）。

まず、愛知県美術館の展示室の中で、8階と10階にあるメインの展示エリアから少し離れた無料エリアに位置し、大きな円弧を描く壁面が印象的なのがラーニングセンターへたちの敷地となった展示室Jです。その特徴的な立地と平面形から、いわゆる現代美術の展示室としては敬遠されてきたためにラーニング部門に割り当てられてきたという経緯があったことも事前ヒアリングによってわかりました。そもそも愛知芸術文化センターは90年代に巨額を注ぎ込んで建てられたいわばハコモノ。しかしその設計意図を読み込んでいくと、展示室Jは、愛知芸術文化センターのコンセプトの中心であるフォーラムという扇形の吹き抜け空間に面し、その平面形に切り取られた形をしており、この建築にとってのハイライトと言ってもよい空間であることがわかりました。



こうした建物の特徴を活かすべく、都市の中の残余空間を表す「へたち」をラーニングセンターの名前に冠しました。へたちってなに？と来場者から質問があった時に、自然と愛知芸術文化センターの説明にもなるような名前になったと思っています。愛知芸術文化センターという建築の力を引き出せるようなラーニングセンターを目指しました。

ラーニングセンターへたち・せとの両拠点の仕器は、それぞれ、その場にもともとあったものを利用しています。こうした仕器の計画では、使われていなかったものに、新しい役割や場所を与えることで違った価値を生み出し、もの自体の力を引き出すということを意識しました。新たに外からものを持ち込むのではなく、もともとそこにあったものを工夫して使えば、既存の空間の雰囲気を活かすことができるし、会期後の廃棄物も最小限に抑えることができます。へたちでは愛知県美術館の倉庫に眠っていた展示仕器群を引っ張り出し、せとでは陶器店時代に活躍していた陶器のための仕器をベンチに利用しました。こうした仕器は、長らくこの芸術祭を裏方として支え続けるインストーラー集団のミラクルファクトリーさんに施工していただきました。私自身も建築畑でもあ

り、代表の青木一将さんとはとてもスムーズに意思疎通を図ることができ、こうした場面でも、これまで芸術祭が積み上げてきた専門性に大きく助けられました。

こうして生まれたラーニングセンターへたちを、より親しみやすい場として展開していくためのきっかけとして、「へたちトーク」というプログラムを企画しました。このトークイベントは、芸術祭の中で活躍する人の仕事を紹介するという趣旨で立ち上げられました。教育普及のトークイベントと言うと、外部からゲストを招いて話を聞くというスタイルが一般的かもしれませんが、国際芸術祭「あいち」の中にも面白い仕事がたくさんあり、それ自体を知ってもらうことで来場者の芸術祭の見方が変わったり、芸術祭の運営に関わる人たち自身も、自分たちの仕事に改めて誇りを持ってもらえるかもしれない。もちろん人はものではありませんが、一人ひとりの持っている力を改めて引き出すことにつながったプロジェクトだと思います。

また、「あいち2025」参加アーティストのハイブ・アースと協働し、愛知県陶磁美術館を会場にした《瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」》では、愛知県陶磁美術館の敷地内にある土そのものを使用しました。愛知県陶磁美術館にとって、土は陶器に使うための材料ですが、今回は版築のための材料として利用しました。こうしたアプローチも、持っているものの力を引き出すことにつながります。版築という土を突き固める技法には、大量の土とそれを扱う道具や設備が必要になります。今回、愛知県陶磁美術館の中でも作陶体験を提供する「つくるとこ!陶芸館」の中庭を版築の舞台として使用させていただいたのですが、中庭は普段はバックヤードとして使われており、例えば蛇口があり、水を流すための側溝があり、土を保管しておくためのコンテナボックスやスコップといった道具も借りることができ、陶芸と版築で使い方は違いますが、「土」と「水」を非常に扱いやすい環境だったことに助けられました。愛知県陶磁美術館の力を再認識させてくれたプロジェクトです。

準備・企画・運営を通して一貫して意識していたのは、自分たちの時間や体力といったリソースの有限性です。限りがあるからこそ、自分たちが既に持っているものに目を向け、その価値を最大限に引き出すことが「誰もが安心して芸術祭を楽しめる環境」の土台につながっていくのではないかと考えました。自分たちはどういうものを使い、どういう場所で、どんな人たちと活動するのか。知らない世界を呼び込むことも学びにとってとても大切ですが、プロジェクトに参加するこれら一つ一つをまず自分たちが見つめ直していくことは、判断への信頼を育む土壌をつくってくれました。その信頼が、場や企画を通してボランティアや来場者に伝わるのが安心できる環境につながるのではないかと感じるという感触を、今あらためて持っています。

## 1

作品とは何か。または、作家であるとはどういうことか。国際芸術祭「あいち2025」のラーニング部門は、5人のチームで企画運営される。辻琢磨（建築家）、浅野翔（デザインリサーチャー）、黒田菜月（写真家）、野田智子（アートマネージャー）、村上慧（アーティスト）である。「作品」の実践者が過半数を超えるこのメンバーにとって、この問いが鋭く浮上したのが、ハイブ・アースとの協働だった。

ハイブ・アース（クワメ・ディヘル+ジョエル・アイソン）はガーナを拠点とするスタジオで、土を突き固めて壁や基礎を作る「版築」技法を主に用いてプロジェクトを行なってきた。芸術祭会場のひとつ愛知県陶磁美術館（瀬戸市）にある《瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」》のキャプションにはアーティスト名として「ハイブ・アース」が掲げられているが、実はその事情は込み入っている。

「凸と凹」は、美術館前庭の一区画の土を四角く掘り出した「凹」、その土を版築で固めて中庭に設置した「凸」から構成される。「凸と凹」の制作には、ラーニングチーム、特に辻と村上が実働部隊として深くコミットしている。芸術祭の準備の早い段階で、芸術監督であるフルール・アル・カシミからチームに、ハイブ・アースとの協働の企画が持ち込まれていた。村上と辻は、芸術祭会期の終盤に行われた座談会の中で、ハイブ・アースとの顔合わせを振り返ってこう話している<sup>1</sup>。

ハイブ・アースが、ほぼエンジニアというか、自分で形を作ったりコンセプトを決めたりする人たちじゃないっていうことがそこではっきりわかった。〔…〕で、ハイブ・アースが自ら作品をデザインするのかな、しないのかな、みたいな感じでミーティングがあって、「しない」って〔ハイブ・アースが〕言ったんですね。（村上）

うん。「俺はお前らのやりたいことを実現させてやる」って言われた。ただ、作家として前に出るのはハイブ・アースなので——普通にいけば、事務局も含めてラーニングチームの側が、作家のやりたいことを実現するよってポジションなので、両方が同じことを言ってるっていうか。（辻）

どっちもお互いに「君は何がやりたいんだ」と言い合ってる。（村上）

双方がサポート役に回るこの「奇妙なねじれ」（村上）が、作家性（オーサーフード）を吊りにする。つまり、「作家という個人であればなぜそれをやりたいのか」が説明できるし、それによって前に出ていく作品が生まれていくと思うんだけど、われわれはラーニングなんで、明確に作家ではなくて。私がやりたかったんですとは言えない」（辻）。

「ラーニングなんで、明確に作家ではない」。同じ座談会の中では、チームが取り組んできたラーニングの企画が「作品制作」とは異質であることが、何度か確認される。例えば、新設されたボランティア活動区分「ラーニング」の取り組みを辻は「作品じゃない」と特徴づける。ボランティアプログラムにおける「ラーニング」という構想は、芸術祭がボランティアスタッフをどう位置づけるかに関するアンサーである。ボランティア参加者は、まずチームメンバーが準備した研修プログラムを受けて、会期中は来場者に向けて自らプログラムを提供する。辻はこれを、「作品じゃないんだけど、〔チームが〕モチベーションを投入できるし、芸術祭から与えられるミッションもクリアできる」と語り、黒田も「やっぱ作品とかとは全然違う」と首肯する。

同じような立場で村上さんとかが〔ラーニング部門で〕お仕事をしているのを見ている、私とはまた違う力を投入していて、制作——あ、制作じゃないんだけど、活動をこの中で展開しているっていうのは、すごく安心感が〔ある〕。（黒田）

黒田のこの途中の言い直しは、裏を返せば、ラーニング部門の活動と作品制作が一見似ていることの証言であり、同時に、だからこそ二つがいかにして異なりうるのかをはっきりさせる必要の示唆である。したがって、作品の「成立」の概念が、この自己規定／ポジションを最も揺さぶってしまう。

当時の村上コメント：作品の「成立」を考えたときに、参加アーティストであるハイブ・アースがエンジニアとしてしか関わっていないモノを私たち芸術祭側の人間がデザインしてしまっているところに、この作品の「成立のしにくさ」があると思うんですが〔…〕<sup>2</sup>

ここで言う「しにくさ」は奇妙にねじれている。この「しにくさ」は、成立しにくいものが中々成立しないゆえの難儀ではない。成立しにくいのに成立してしまうことになっているから余計に「成立しにくい」のだ。もし、ただ土を捏ねて像を作ろうとするだけなら、作品が成立するかはまだわからない。何も現れないかもしれない。だがここでの問題は違う。作品は成立するはずだが、作家がいない。

ねじれているのは時間だ。成立がすでに前方へ投げられてしまっている——「プロジェクト（pro-ject）」の問題である。だからここで言う「しにくさ」は、単なる技量上の困難に回収されない。存在のしにくさである。作品が事業としてあることで、「私」が作家にならなければならないとしたら——文学ジャンルでいえば「喜劇」ではないか<sup>3</sup>。

あらゆる芸術祭の事業としての性格が、アテン・ドされた作品一つ一つをもまた事業とする。ラーニングチームがハイブ・アースとの協働を通じて接した「ねじれ」はこの点にある。

## 2

浅野は「ラーニング」を、関係・立場を多重なものとして再構成するためのカテゴリと捉えている。

従来のプログラムベースのラーニングという見方をすると「こんな企画をやってるよ」と言う形になるけれど、たぶん辻さんや我々が見ていたものは、「どうやってラーニングという関係を組み直すのか」みたいなことを中心に据えていたのかなと思う。すると、〔人を〕いわゆる「ボランティア」っていう枠に入れるんじゃなくて、ボランティアのような運営のようなところを作れないかな、アーティストのようなラーニングのメンバー〔のようなあり方〕として作れないかな、とか、僕なんかは地域の人でもあるし芸術祭を作る立場でもあるし、みたいな、複数の属性を総体として立ち上げようとしているから〔…〕（浅野）

すなわち「ラーニング」とはこのような実践の媒体である。だからこそハイブ・アースのケースでは、「アーティストだったり、ふだんアーティスト活動していたりとか、あと〔他にも各々〕本職がある中で、どうやってコミットするかというのが結構難解だった」（黒田）。この一言の中に、アイデンティティ（アーティストである）、プラクティス（ふだんの活動）、プロフェッション（本職）という微妙に異なる次元が出てくる。というか、それらが微妙に異なるという繊細な直観が、黒田の言い方には表れている。

作家にならないまま何かを制作すること、作家でありながら作品でないものを制作すること。〈作家—制作—作品〉という概念の連鎖を慎重に避け、そのあいだの次元の微妙なずれに引っかかるときに、「ラーニング」と名指されたもとで行われる活動が、媒体として賦活する<sup>4</sup>。ラーニング部門の仕事が座しているのは、制作ではなく、制作の条件の水準である——異なる制作の制作。ハイブ・アースとの協働のなかで、正面から作者であること・作品であること・制作であることをラーニングチームがすすれず避けようとする軋み（しにくさ）の中で、それらの概念は新しく作り変えられる。最終的に完成した「凸と凹」を村上は、「プロジェクトが作者みたいな状態になっている」と表現する。

何て言うのかな……特定の個人とか意志を持った人間が作者ではない作品があそこに生まれているっていう。それが、ものすごく純粋な物体として、芸術祭が生んだ最も純粋な物体として、何の意図もない、というか限りなく意図が少ない、超ピュア芸術祭アートみたいなものがそこに生まれている。（村上）

これに加えて浅野は、版築で制作したオブジェクトから予想外

に草の芽が生えてきて耳目を集めたことに触れて、「人間以外のものも作品を制作しているみたいな状況も生まれている」と言う。

作者であることは、プロジェクト、芸術祭、植物、もしかすると物体そのものや「そこ」といった「人間以外のもの」に再配分されている。このような事態を、私たちは詩の技法として知っている。擬人法である。ここで強調したいのは、人間のように「作品を生む」能力を人間でないものに授けることと同時に、「作品を生む」能力を人間の、特に作家の寡占から解除することである。

能力と立場のこのような連携解除（ピュア）と再配分（祭り）こそ、「ラーニングという関係を組み直す」と題された目標のもっと操作的な言い方である。それはラーニングの元々の意味である「学ぶ」に根ざしたものだだろう。そもそも「陶」の字に「能力を形成する」という意味があるではないか。

## 3

作品の制作はそもそも、どんな能力に根ざしていただろうか。それは確立した技量としてではなくて、能力の位置づけという水準を見るほうがいだろう。

例えば「レディメイド」は、芸術家がものを選別展示する能力のことというより、選別することが作者の能力になった事態のことである。美術批評家のポリス・グロイスは、レディメイドの登場以降、キュレーターと芸術家とを区別するのが難しくなったと述べる<sup>5</sup>。両方とも、選別したものを空間に展示するのだ。グロイスは、それでもなお可能な区別を一つ提案する。キュレーターは、公共空間の中に芸術作品を置く。対して芸術家は、作品の中身や形式を「主権的に」つまり意志によって決定する。ここに、展示空間（展覧会）と空間的な作品（インスタレーション）の違いもある。展覧会のキュレーションは、一見レディメイド（選別）とインスタレーション（空間の組織）という二つの制作技法のハイブリッドかのようであるが、それでも「作品」ではない。

ここから、ラーニング部門の企画・運営が「作品じゃない」「制作じゃない」ということを考えよう。もちろん、作品や制作と異なるというだけでラーニングとキュレーションとを同一視したのでは全くない。ラーニング部門の活動を、リレーショナル・アートや参加型パフォーマンスや演劇といった「作品」に、一見近づかせながらも区別できるようにする、何らかの違いがあるはずである。

グロイスの構図では、「作品」の置かれるオーダーは単純である。作品は、制作とキュレーションのあいだ、芸術家とキュレーターのあいだにある。芸術家が主権的に制作した作品を、キュレーターは公共の代表としてキュレーションするのだ。作品は二つ別々の職のあいだで取り次がれる。しかしもう一歩進んで、この二律性にヘーゲル流の批判を加えなければいけない。すなわちこうだ。「作品」こそが「制作」と「キュレーション」という二つ

をその関係ごと形成する。ものが作品として現れるとき、それに対して私たちが持っていた関わり方が、それを制作していた行為とそれをキュレーションしていた行為との二つに分割されて同時に見えてきているのである。作品の出現を、何が制作であり何が制作でないのかを左右する「複数の属性の総体」が改めて見出されるチャンスと捉えよう。運動の産物（プロダクト）として現れるときも、あるいは今回のように「プロジェクト」としてその成立だけがまず約束されるときも、作品はこの関係の総体を揺さぶり変化させることによって示しうる。

同様の批判を加えるべき二律性がもうひとつある。「灰と薔薇のあいまに」である。芸術祭の公式ウェブサイトによれば、灰は「終末論」の、薔薇は「楽観主義」の象徴である<sup>6</sup>。両者の「極端な二項対立の議論」ではなく「「あいま」にあるニュアンスに富んだ思考」で世界を解きほぐす、という主題が掲げられている。他方で、愛知芸術文化センターのミュージアムショップで売られたやきものやピンバッジはどれも「薔薇」を象っている。「極端な二項対立」の片方である楽観主義＝薔薇のほうだけがグッズになる理由は難しくない。薔薇はイメージだからだ。灰は薔薇の絵を描けるが、薔薇は灰の絵を描けない。しかし「灰」は見えないにすぎない。やきものの体や釉薬の中、ピンバッジの七宝の中に灰はある。すなわち「薔薇と灰」という概念のペアには、イメージ（イリュージョン）と、それによってしばしば不可視になる素材（メディアム）という、美術の伝統的な二律性が懸かっている。

つまり灰と薔薇との二律性を作り出しているほうのものが何かを考えなければいけない。答えはすでにある。「灰と薔薇のあいまに」の英題は「A Time Between Ashes and Roses」である。時間——こうして私たちはプロジェクトの概念の問題に立ち戻る。灰が薔薇の土壌になるにせよ、火が薔薇を灰と化すにせよ、いずれもそれはプロジェクトである。だからこそ、その「あいまに」において世界に面するには、とりわけ成立すべきプロジェクトの姿を容易にとる「作品」に際して、成立の瞬間だけではない時間にとどまって考える必要がある。「ラーニング」は進行形のアスペクトである。

## 4

プリミティブに力を加える「塑」にせよ、火の技術を加える「陶」にせよ、水を含められた土の物質的なふるまいが人の能力を結び合わせる。土がメディアムとして振る舞うあいだに、灰と薔薇のペアに託されたもの、すなわち終末と楽観、素材とイメージ、あるいはプロダクトとプロジェクトという概念が繰り返される。

愛知県陶磁美術館のキュレーションは、そのような土との関わりにおいて、労働、民族、神話的異形といった主題を想像させるものだった。例えば、大きな陶の彫刻をじゅうたんに置き、それを押して動かすパフォーマンスを行なった西條茜の作品では、鑑賞者はじゅうたんの長毛を足の裏で感じる。摺った痕跡の残るじゅうたんを歩めば、砂の上を貝が摺動したような痕跡を見せるエレナ・ダミアーニの彫刻を介して、または、ハイブ・アースの「凹」の接地場所であり、また館のコレクションの陶作品が常設された前庭（雨の後はぬかるんでいる）を歩く感触を通じて、私たちの足の裏は直に土の触感、メディアムの可塑性を感じ取る。

「あいち2025」の巡路は、まず愛知県美術館を観て、次に瀬戸市のまちなかおよび愛知県陶磁美術館へ向かう順序が主に想定されている<sup>7</sup>。この順序は、灰と薔薇という概念の対が担う水準を、

土と水／火という概念のペアが担う水準にまで差し戻すかのように見える。

灰で描かれた薔薇は表象だ。愛知県美術館の会場を一巡するとよくわかるように、美術館はしばしば、植物の代わりに植物の絵画を（大小島真木、浅野友理子、またブリヤギータ・ディアのヘリンボン柄）、動物の代わりに動物の映像を（ロバート・ザオ・レンフィ、杉本博司、ジョン・アコムフラ）、または鉱石を彫刻として見るための芸術にすることで（小川待子、ムルヤナの珊瑚、川辺ナホ、または是枝さくらの骨）、そこに置く。レディメイド（ファウンド）技法の活躍も明らかである<sup>8</sup>。美術館は、表象する諸能力（とその分業体制）にしたがってものごとを美術館化する。

というのは、表象が不在と存在とを両得する能力のカテゴリーであるからだ。美術館や芸術祭が公共と地続きに存在できるのは、それが公共の問題を、例えばとりわけ戦争や侵略や暴力を、作家の意志を折り紙としてつけて、そこにないままに描き出すことによってである。

このことは、特に美術館に関して表象する作品がキュレーションされるとき、または作品がキュレーションされるという見通し（プロジェクト）のために作家が美術館の表象をその足場にするとき、ナルシズムの形で極まって現れる。瀬戸市美術館の屋外に設置されたシェイハ・アル・マズローの作品説明を読んでみよう。

<span></span>	
作品が設置されたこの場所には、かつて噴水があり、利用者に憩いの場を提供していましたが、いつしか水は失われてしまいました。現在の状態は、数えきれないほどの偶然と必然の出来事が積み重なった結果ともいえます。アル・マズローは、この水の「不在」に着目し、本来は動的で常に変化し続けるはずの水を、大理石という固形化された静的な物質に置き換えて表現しました。 <sup>9</sup>	

たかだか自前の噴水が止まったことを「数えきれないほどの偶然と必然」と言い仰せるのが、ナルシズムでなくて何か。続く記述はさらに、何かしら二つのものがあれば存在と不在が両得できたと思ひ込む、美術館のナルシシクな自信がみなぎっている。

敷き詰められた大理石には、二つの波紋が刻まれています。それらは秩序立った構造をもちつつ、互いに干渉しながら水面を揺るがせ、時間の経過や出来事の痕跡を示しています。また、この二つの波紋は水面に投げ入れられた何らかの存在と、その「不在」も示唆しています。本作を通してアル・マズローは、偶然と必然、そして存在と不在といった相反する概念が交錯する瞬間を可視化しようと試みているのです。<sup>10</sup>

美術館が薔薇（描かれるイメージ）と灰（そのとき見えなくなっているもの）という二つを掲げるのは必然なのである。その両方を射程におさめる自信があり、現にそのようにしているからだ。

作品の概念に批判を加えなければいけないのはこのためである<sup>11</sup>。何よりも美術館においてこそ、そこにある（見える）ものとそこのない（見えない）ものとの二律性を、「作品」の概念が可能にしているのだから。このプロトコルが、ニューヨークに居を構える芸術家がイラクの爆撃をロココ調の色彩で描くことを可能

にさせる（パーシム・アル・シャーケル）<sup>12</sup>。可能にさせているのが「美術館」である、というのが本評の主張である。この機序を活用する限り、「作家」すらそのようにして初めて可能になる存在ではないか。

だが私たちは、戦争をイメージとして見る能力や立場より、戦争を見つづける能力（またはその無能力）と、別の場所にいつづける能力（またはその無能力）が、作品の出現をめぐって幾度でも割り振られることのほうを気にかけられるべきではないか。私たちは見えないものを「見えるようになった見えないもの」のままにして静観するのではなく、美術館が制作の所産とキュレーションの見通しの二律性によって、何を見えるようにしているのか、何を静観されるままにしてしまうのか、美術館そのものがけして戦場ではないことがいかに表象の無力（無能力）であるのか<sup>13</sup>を問い、そこからひるがえって想像力が、作品にも表象にも還元されなくてよい能力でなおもあることの希望を、批判をつうじて見つけなければいけない。

「ラーニング」部門の記録冊子に批評文が掲載される資格があるとすれば、それは、批判が能力・立場の解除と再配分を可能にすることを実演するという意味で「ラーニング」を行なうためではない。

## 5

「凸と凹」の実現に関して、プランニングの段階で複数の懸念が見つかった。特に「強度」「pH」の二つである。「強度」とは、版築に用いるのが土だけでは強度が足りないという問題だ。石灰などを混ぜて固めれば強度が増す。石灰の代わりに、粘土の製造過程で生まれる副産物の「キラ」を混ぜる試みが早い段階で挙がっている。「pH」とは、石灰を土に混ぜることでpHが変わり、その土を「凹」に埋め戻す場合、植生へ影響があるという懸念である。この二つの懸念を両方解決するため、例えば外殻だけ石灰を混ぜることでpH値の上昇を抑える「アンコガワ（餡子＋皮）」の案が提案される。

「凸と凹」の実現では、このような物質的な「成立のしにくさ」と、すでに述べた「喜劇的」な「成立のしにくさ」に同時に取り組む必要があった。当然、それら物質の問題が「作品」の概念に絡みつくことになる。

当時の辻コメント：「作品」を成立させるのであれば、凹に最終的には凸のすべてを埋め戻した方が適切だが、埋め戻すことに固執すると（pHを保つため）石灰を使えない可能性もあり強度に不安が残る。今回はラーニングの活動としても位置付けられるわけだから、「作品」を成立させるといいうよりも、プロセス自体を学びの「プロジェクト」として捉えることで、作品をつくる意味の厳密さにこだわりすぎなくても良いのではないだろうか。<sup>14</sup>

当時の村上コメント：〔…〕その〔作品の「成立のしにくさ」の〕打開策として、陶磁美術館という場所の文脈に、作品の成立を助けてもらうイメージというか、あるいは「ステージ」の上に愛知県陶磁美術館を載せるイメージといえбайのか……<sup>15</sup>

二人の発言から読み取れるのは、版築を「作品」として成立さ

せるゲームである。辻は土が戻されるというコンセプトUALな「意味の厳密さ」を<sup>16</sup>、村上は「場所の文脈」を作品の成立条件に挙げている。

「場所の文脈」について補足しよう。当初は「凸」を前庭に設置する予定だったが、他の作家やイベントの兼ね合いのため、中庭に変更になった。前庭に置きたいと意志する「作家」がいないう以上当然のことだ。この結果、土のない中庭に版築を置くことになってしまう。「ステージ（舞台）」がモチーフに提案されるのはこの「二度手間」の違和感のためである。中庭のある「陶芸館」はふだん美術館のバックヤードとして、作陶体験のワークショップのために使われていた。「バックヤードから、作陶体験をしている日常を見る」ことが「外在的な理由」として探し出された（辻）。これが「場所の文脈」である。「ステージの上に愛知県陶磁美術館を載せる」こと、つまりマズローの噴水の例のように、美術館のふだん見えていないところを「見る」または「見るべきものとする」ことは、ここでも「作品」の存在論的な資格として求められている。

また村上は、「凸」を土の出处である前庭ではなく中庭に置くことの違和感に対して、「完璧なアンサー」を発見している。

<span></span>	
中庭に舞台はなんか違う気がするみたいなことになって……で、これは完璧なアンサーだと思ってます。他に答えはなかったと思うんです。これは結果的な話だけど、辻さんが意図していなかった、漢字（凸と凹）と同じ形をしている。場所が2個に分かれることによって、凸から凹が生まれるということが決まった。その結果、実際そこにあるものは、これ（凸と凹の字）と同じ形をしています。だから、凸と凹が出来たっていう操作。（村上）	

村上の言う「完璧」さは、辻の言う「厳密」さと同種の感覚であろう。しかもこのとき、「辻さんが意図していなかった」からこそ、漢字との一致は「完璧」なのである。ハイブ・アースとラーニングチームとの協働の、現実的な意図の「不在」に対応する表象が見出され、不在と存在とを両得できるとき、それはなおさら逆説的に作品としての保証を得る。

作品の成立に「理由」「アンサー」が必要であることは、ラーニングが「答えがあるものを提供しているわけではない」（浅野）ことと対照的である。しかしキュレーション（プロジェクト）の念力は、この「答えのなさ」さえも、また「不在もまた表象できる」という美術館のプロジェクトに絡め取りかねない。

<span></span>	
何だったらフルール芸術監督が言っているものって、もう言葉にも出ている通りに「あいま」なので、そもそもとして答えというか明確なものがすごく分かりにくい。（浅野）	

答えのなさや答え、無目的と合目的性との止揚を存在として見出す伝統的な概念が「美」であった。石灰と強度のジレンマを解決する案として、「アンコガワ」を改良する形でハイブ・アースのクワメが提案したのは、「石灰を四隅と一番上の層のみに混ぜれば、石灰の量も減り、角の強度も保ちつつ、土のみの部分と石灰を混ぜた部分との色の違いが〔層状に〕出て美しく見えるのではないか」というアイディアである<sup>17</sup>。ものは、組織（text）に先回りする口実（pretext）であるときに美しい。

4節で掲げた目標に立ち返ろう。私たちは、見えないものと見えるもののあいだ、成立とプロジェクトのあいだで安住する「作品」ではなく、複数の属性・立場のあいだで能力を解除・再配分する実践のカテゴリとしての「ラーニング=学び」を、ハイブ・アースとラーニングチームとの協働の時間のうちに見出したい。その作業は同時に、「work」という語が作品・制作・仕事・労働と玉虫色に翻訳される一方で、「workshop」が「ワークショップ」という表音に糊塗されるという分裂を見直すことでもある<sup>18</sup>。冒頭に掲げた問い——作品とは何か、作者とは何か——という問いは、そのための準備であった。

作家であることは多くの労働を含む。アーティストのヒト・シュタイエルが言うように、作品の運搬保全より作家当人を呼ぶほうが安上がりだ<sup>19</sup>。作品が物理的な形を失い、それ自体が商品であるのをやめるほど、代わりに芸術家が商品になる、と美術批評家のマイケル・フリードは1969年に語っていた<sup>20</sup>。「そこにいること（presence）」は芸術家の立派な仕事（work）である。

では「そこにいないこと（absence）」——不在は？ たしかに美術館は、不在の薔薇や不在の戦争を表象するように、不在の作家を表象することもお手の物である<sup>21</sup>。「凸と凹」の場合はどうだろうか。

「制作プロセス」パネルの記述におけるハイブ・アースの影の薄さは興味深い。もちろんこれは、ハイブ・アースを懈怠だと糾弾するわけではない。作家の不在は、ここでは能力と労働の再配分を促している。

ハイブ・アース二人の最初の来日（2024年11月）から「制作直前」のクワメ二度目の来日（2025年8月）までの8ヶ月以上、場所や形状の策定こそオンラインで行われる一方、無数のテストピースの制作は現地の辻と村上がほとんど一手に担っている<sup>22</sup>。作家の不在によって、土を型に詰めてひたすらにタコ（突き固める道具）で叩きまくるという単純肉体労働にラーニングチームは駆り出される。招聘された作家と招聘した芸術祭のあいだ、「芸術家」と「エンジニア」のあいだでも、ものを「作品」として成立させる能力、実際の版築を制作する能力とが組み替えられる。さらに言えば、再び表象の危険をおかして、作家の本拠地であるガーナと招聘元である日本との国際的関係を埒上に上げることは、たとえば技能実習生の派遣と受け入れがそれに含まれる点、そして「あいち2025」が「国際芸術祭」と名乗っている点に鑑みて、むしろ無視できる選択肢ではないだろう。

これと等しく、もうひとつの「不在」にも着目したい。「凸」側の説明文に付された以下の記述である。

小さなブロックは、瀬戸少年院の少年たちが制作したものです。「あいち2025」の一環として、ハイブ・アースのクワメ・ディヘル氏とラーニングチームのワークショップを通じて生まれました。<sup>23</sup>

参加した3名が寄せた「観覧者に伝えたいこと」のうち一つから引く。

この作品は、多くの苦労と時間を使用して作りました。なんてありきたりな感想は書きません。確かに労力は使いましたが、少年院という辛い環境の中でも心から楽しいとい

う気持ちで作りました。外見はただの土のブロックかもしれませんが、その一つ一つのブロックの中には僕らの大切な想いや気持ちがたくさん詰め込まれています。どうかこの作品を“少年院生が作ったブロック”ではなく、“他国の文化に魅了された少年が、頑張って作ったブロック”という視点で見てください。<sup>24</sup>

「制作プロセス」パネルに掲載された写真や、それとともに上映展示されていた制作過程のビデオには、クワメ、辻、村上に加えて、ラーニングや美術館のスタッフ、さらに実作業にあたった学生スタッフが映り込んでいる。対して、少年たちが参加したワークショップの様子を映したものはない。本評は、ハイブ・アースの「不在」をただ不在のままに表象・静観される不在とは異なる働きをしたと捉えたように、少年たちのこの「不在」もまた、ただ表象・静観されるものではないように感じる、そのように感じる能力を発揮したいと思う。

上に引いた「観覧者に伝えたいこと」が伝えているのは、少年たちの「work」、少年たちの不可視性、および制作・仕事・労働といった概念がどのように人々に割り当てられるか、そうしたことの概念の連鎖を解きほぐすための言葉である。「見てください」という結語は「観覧者」たちの「見る」能力を宛先とする<sup>25</sup>。また別の一人の「伝えたいこと」を引こう。

少年院生も、美術的なこともやっています。僕たちが作った物を、心の深くから見てほしいし、乗ってほしいなと思います。ぜひ見てってください。僕は作品を作ったけど、乗る勇気がなかったので、たくさん乗ってほしいです。<sup>26</sup>

ラーニングするための能力、つまり複数の属性や立場のあいだで能力を解除・再配分するための能力を「勇氣」とも呼べるだろう。「来場者の皆様が座ったり、乗り降りしたり、草が生えたり、雨に打たれたりしていくなかで、作品が崩れていくこともプロジェクトの一部として想定」<sup>27</sup>されている「凸と凹」は、それに足を踏み入れる（踏み入れた）人々、足を懸ける（懸けた）人々に、「僕たちが作った物」と「作品」とのあいだに留まるための、少々の勇気を要求する。

- 「国際芸術祭「あいち2025」 ラーニングチームって何してるの?」、国際芸術祭「あいち」、ビデオ, YouTube, 2025年11月21日公開, <https://www.youtube.com/watch?v=KC0u77Q7nKc> この座談会では複数の話者が入り乱れて発言しているので、引用するさいは、個人ごとに発言をとりまとめ、必要に応じてフィラーや相槌を割愛し、また言い淀みによる反復や語の順序を整理した。以下、ラーニングチームの発言の引用のうち出典の記載のないものはすべてこのビデオから。以下すべてウェブ上の参照は2026年1月13日最終閲覧。
- 愛知県陶磁美術館の会場内に掲示されたパネル「瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」制作プロセス」2月25日。本評の執筆にあたりラーニングチームより元データを共有いただいた。以下同じ。
- これは、objecthood(対象のあり方) によって、subjecthood(自分のあり方) はそれに従うほかないという事態だ。
- 媒体=メEDIUMとは、異なる物をまとめて扱っているときの軋みのことである。この軋み、成立のさせにくさの中でしか、新しいものは作られない。
- Boris Groys, “The Politics of Installation” in Going Public, e-flux: NY, Brooklyn, 2010. 50–55. [邦訳:ボリス・グロイス「インスタレーションの政治学」星野太+石川達紘訳、『表象06』、月曜社、2018年、66–68頁)。
- 「開催概要 | 国際芸術祭「あいち2025」」<https://aichitriennale.jp/outline/>
- 各会場で配布されているパンフレットにある地図では、愛知県美術館の最寄りである栄駅(および名古屋駅) を起点としている。
- もちろん、芸術家の作品一つ一つはそれだけに還元されるわけではない。たとえばムルヤナには手芸、是枝にはリサーチ、レンフィにはフィクション、浅野には陶の主題がある。テーマを掲げたキュレーションはしばしば、選別と空間の構成であるために、作家と作家の「あいま」に公共に示すべき主題とそのために「見ること」を中心に組織された表象する諸能力を鼎脔にする。
- シェイハ・アル・マズロー《賽の一振りは決して偶然を排することはない》(2025) キャプション。同じ内容がウェブサイトに掲載されている。「シェイハ・アル・マズロー | 国際芸術祭「あいち2025」」<https://aichitriennale.jp/artist/shaikha-al-mazrou.html>
- 同上
- これが作品の観念論に対する批判であるならば、ハイデggerの「形態(ゲシュタルト)」越しにラクー＝ラバルトが西洋哲学全般に対して行なった批判の列に並ぶであろう。
- 「バーシム・アル・シャーケル | 国際芸術祭「あいち2025」」<https://aichitriennale.jp/artist/bassim-al-shaker.html>
- この点で触れておきたいのが、愛知県美術館10階のハラール・サルキシアンと、ハイブ・アースと並んで出色だった瀬戸市のまちなか会場のマイケル・ラコウィッツである。双方とも、米国主導のイラク戦争の最中にイスラム国(ISIS) によって破壊・略奪された文化財を

- 再現する作品である。サルキシアンは、シリア北部の博物館の今も行方不明の収蔵品を、3Dプリントを用いて「リトファン」の手法で再現する。ラコウィッツは、古代アッシリア帝国の首都カルフの宮殿にかつてあったレリーフパネルを、実物大で複製する。
- 「制作プロセス」6月4日。
- 「制作プロセス」2月25日。
- これはルーシー・リバードが「脱物質化(dematerialization)」と呼ぶ特徴にまさに合致するだろう。土はたしかに物質的だが、同量の土を同じ場所に埋め戻すことで、むしろ「脱」物質を体現する。
- 「制作プロセス」6月26日。強調引用者。
- 表意文字への翻訳と表音文字への翻訳とが日本語に混在することが概念にどのような影響を与えるかについて、次の論文からヒントを得た。You Nakai, “A Performance of “Aesthetics”—Conflicts and Commons in the Translation of a Nomenclature” in Philosophies 2025, 10–23.
- Hito Steyerl, “The Terror of Total Dasein: Economies of Presence in the Art Field” in Duty Free Art: Art in the Age of Planetary Civil War, London: Verso, 2017, 22(邦訳：ヒト・シュタイエル『デューティーフリー・アート：課されるものなき芸術 星を覆う内戦時代のアート』大森俊克訳、フィルムアート社、2022年、44–45頁)。
- Michael Fried, “On the Future of Art”, Guggenheim Museum Archives Reel-to-Reel collection, 1969. <https://www.guggenheim.org/audio/track/on-the-future-of-art-by-michael-fried-1969>
- たとえばアダム・シムジックがキュレーションを務めたドクメンタ14のノイエ・ギャラリーでは、ナチ政権によるユダヤ人からの美術品の略奪に携わったヒルデブラント・グルリットにまつわる人々を「表象」ないし指標する作品が多く展示されていた。ヒルデブラントの祖父ルイス・グルリットの風景画、姉コルネリアのドローイング・版画である。これに関連して、ドクメンタの創起者である画家・建築家のアーノルド・ボーデによる絵画と、ボーデを描いたゲルハルト・リヒターの肖像が展示された。国際芸術祭にありがちなこの「指標のスペクタクル」は本評の主題と密接に関係する。詳しくは次に書いた。大岩雄典「絵画あるいは芸術祭の不気味な兄弟たち——グリッド、指標性のスペクタクル、委託されたキュレーターシップ：第12回ベルリン・ビエンナーレとドクメンタ15について」『パンのパン04(下)』、パンのパン、2024年、65–93頁。
- 偶然にも、辻・村上とともに版築の心得があったという。
- 愛知県陶磁美術館の会場内に掲示された「瀬戸の版築プロジェクト「凸」について」より。
- 同上
- 瀬戸少年院からの参加者が完成した「凸と凹」を見ることが叶わなかったことを、本評の初稿提出時に編集の浅野翔氏より聞き及んだ。
- 同上
- 同上

# ラーニング専門研修「インタビューの練習」

黒田菜月 ラーニングチームメンバー

1 持っているものの力を引き出す



「ちょっと真面目な話をしてみたいけど、  
なんて声をかけたらいいんだろう。」

身近な人に対して、そんなふうには思ったことはありませんか？  
こんなキャッチフレーズを掲げて、「インタビューの練習」は  
7人のメンバーと一緒に始まりました。このテーマでは、芸術  
祭に関わる人々へのインタビューを起点にしつつ、自分の気  
持ちは言葉にしてみたり、相手の声に耳を傾ける等のコミュ

ニケーションそのものについて向き合うという活動を行いま  
した。そして、それぞれのインタビューは研修を担当した黒田  
菜月が撮影・編集をし、その映像は芸術祭の会期中にラー  
ニングセンターへたち・せとで上映しました。この研修を考え  
た背景には、この企画を完結させたいのではなく、研修に参加  
した人たちが自身のエネルギーを芸術祭や生活に持ち込んでほ  
しいという思いがありました。

Photo: 黒田菜月

- 第1回 アイスブレイク回 「お互いを知ろう」  
日時: 7月27日(日) 14:00-17:00 会場: アートラボあいち
- 第2回 準備の会 「インタビュー対象を検討する レクチャー・飯田志保子さん」  
日時: 8月3日(日) 14:00-17:00 会場: アートラボあいち
- 第3回 実践の会① 「インタビューの受け取り手について考える」  
日時: 8月17日(日) 14:00-17:00 会場: アートラボあいち
- 第4回 実践の会② 「実際にカメラを構えてやってみる」  
日時: 9月7日(日) 14:00-17:00 会場: アートラボあいち、ラーニングセンターへたち
- 第5回 実践の会③ 「公開イベントとしてやってみる」  
日時: 9月15日(月・祝) 14:00-17:00 会場: ラーニングセンターへたち

担当 黒田菜月(ラーニングチームメンバー)、小林玲衣奈(ファシリテーター)  
ボランティア ニシワキ、加藤有美、小嶋彩海、滝裕美子、富樫水奈子、吉田祐菜、渡辺ひかり(全7名)

## 活動

### 環境作りと共有

まずこの研修で力を入れたことは、プログラムの“枠組み”や、  
安心して考えたり発言することができる“環境”作りでした。  
研修の初回は、インドネシアのコレクティブ・ルアンルパが  
行う「ノンクロン」<sup>1</sup>を紹介し、実際にお茶やお菓子を食べなが  
らお喋り感覚でスタートしました。卓上にはスクイズボール<sup>2</sup>や、私(黒田)が持参したぬいぐるみなどを広げ、和やかな  
空間を演出しました。また、「偏見を持った発言をしないこと」  
や「過度な自己開示をしないこと」などを盛り込んだグランド  
ルール<sup>3</sup>の設定と共有も忘れずに行いました。それは「相手の  
秘密を聞き出すことが、必ずしも距離を縮めることには繋がら  
ない」ということを伝えたかったからです。10代から60代ま  
でが参加しているため、こうしたルールの大切さと、守ること  
の難しさについて、それでも全員でがんばってみよう、という  
ことを強調して伝えました。

- 1 インドネシアのコレクティブ、ドクメンタ15のキュレーターとしても活動。  
ノンクロンしよう: インドネシアのコレクティブ文化に見る、「分け合うこ  
と」の連鎖と循環 - WORKSIGHT
- 2 握ると変形し、手を離すとゆっくり元に戻る「ぶにぶに」「もちもち」とし  
た感触が特徴のストレス解消おもちゃで、ストレス緩和や集中力向上、握  
力トレーニングなどにも使われ、ボール型以外にも多様な形状があります。
- 3 会議や研修、チーム活動などを円滑に進め、目的を達成するために参加者全  
員で事前に合意する基本的な行動規範や約束事です。



### インタビューに至るまで

2回目の研修では、「あいち2025」学芸統括の飯田志保子さん  
を招いて「芸術祭を作っている人々」というテーマで芸術祭の  
関連部署やチーム編成について解説していただきました。芸術  
祭や芸術が得体の知れない存在ではなく、人によって作られて  
いる側面についても知って欲しいと思ったからです。その上  
で、実際に行うインタビューでは、「何を・いかに・なぜ」聞く  
のか、ということを考えてもらいました。こうして出来上がった  
インタビュー映像を見ると、それぞれの試行錯誤の中からオリ  
ジナルな表現が生まれていたことが伝わってきます。各々が  
異なるテーマで話を聞いているにもかかわらず、7人のインタ  
ビューはどれも繋がりがあのように感じられました。それは、  
研修の過程を共にし、互いに影響を与え合っていたひとつの証  
だと思っています。

### 研修を終えて

「一歩踏み出したい、成長したい」と集まったメンバーは初回  
からスムーズに話ができるわけでもなく、緊張していることが  
多かったです。しかしその緊張は一概に悪いものではなく、話  
しやすい環境作りにつながり、「緊張は相手へのリスペクト  
の現れ」と肯定できるようになった方もいました。こうした気  
づきを共有できる振り返りの時間もまた、この研修をより豊  
かなものにしていただきたいと思います。そして、自分の活動でも研修  
の雰囲気作りを活かすと報告してくれる方も出てきました。  
「楽しい」とか、「やり切った」という実感さえあれば、研修や  
芸術祭が終わったとしても、それぞれの環境の中で再び引き起  
こせることがあると思っています。



Photo(下): あい撮りカメラ部 minachom

## 映像の概要

他者とのコミュニケーションについて考える「インタビューの練習」では、芸術祭に関わる人々へのインタビューを行い、7本の映像が成果のひとつとして生まれました。インタビューの内容はあらかじめ決まっているものではなく、ボランティアメンバーが研修を通して自身の経験を振り返る中で生まれたテーマやトピックを題材としています。約20分間ワンカットという限られた条件の中で、自分と相手の緊張をほぐしながらインタ

ビューに臨む姿は、そこで語られた言葉以上に、それぞれの人柄や空気感を物語っているように見えます。インタビューを担当していないメンバーも、当日まで練習やゲストのアテンド、タイムキーパーなどを担い、場を支えました。そして、芸術祭開幕直前という大変過密なスケジュールにもかかわらず、依頼を快く受け入れ、それぞれの質問に真摯に応じてくださったゲストの皆さまに、改めて感謝申し上げます。



ハイブ・アースのクワメ・ディヘルさんにインタビューした渡辺ひかりさんは、作家を目指す大学1年生です。「制作を行うことへの動機や、触発されること」について真っ直ぐに問いかけました。



大学生の吉田祐菜さんは、自身の集団で活動することへの関心から、ラーニング・キュレーターの辻琢磨さんに「集団に所属することやリーダーの役割」について、ラーニングチームの実践を手がかりに話を聞きました。



国際芸術祭「あいち」組織委員会事務局の藪谷恭江さんにインタビューした小嶋彩海さんは、現在社会人3年目。仕事がこれからも長く続いていく実感を持ち始めた今、「人は仕事をどのように捉えているのか」を探りました。



インタビューの後半は、対話型鑑賞のボランティアを長年やられてきた方が中心となって行いました。滝裕美子さんは、芸術祭に関わって人生が明るくなったという感謝の気持ちを、芸術祭立ち上げに関わった拜戸雅彦さんに伝えました。

## 担当者によるコメント

シロイワヤギのぬいぐるみや、握り心地の良いスクイーズを手にしなが、呼ばれたい名前や参加のきっかけを話すところから研修が始まりました。そのやわらかい質感は自然と強張りをほぐし、触感が緊張を引き受けてくれるような安心感がありました。ほんの些細なことですが、そういった工夫で話しやすくなることを、身をもって実感しました。インタビューの実践では、参加者のみなさんが「自分が安心できるものを持ち込む」「質問をカードにまとめておく」など、相手を思い浮かべながら環境を整える姿が印象的でした。そして、状況を丁寧につくるからこそ聞ける言葉があるのだと学びました。

小林玲衣奈 ファシリテーター

毎回の研修の終わりに共有された感想はどれも個々の体験に深く結びついたもので、そこからも多くの発見がありました。さらに、研修での学びをボランティア活動に限らず、それぞれの身の回りで実践している様子を知り、研修が文字通り「練習」として機能していたのがうれしかったです。ラーニング・ボランティアとしての活動の実践は、来場者の方に向けたものもある一方で、学んだことを身の回りにひらいていくことも、同じくらい意味のあることなのかもしれません。



対話型鑑賞ツアーの研修を担う会田大也さんには、自身も対話型鑑賞ボランティア経験のある富樫水奈子さんが現代アートに触れたことで生まれた疑問を投げかけました。



アーティストの川辺ナホさんに制作背景を聞いたニシワキさんのインタビューでは、二人のスリリングな掛け合いにも注目してほしいです。



芸術祭を支える役職の一つ、アーキテクトの栗本真杏さんには、ボランティア初参加で、キービジュアルの薔薇に吸い寄せられてきたという(!)加藤有美さんがアーキテクトの魅力聞き出します。

- 【クレジット】  
 撮影・編集・演出 黒田菜月  
 コーディネーション、プロダクションアシスタント 小林玲衣奈  
 プロダクションアシスタント 小出一葉  
 協力 宮澤響 (COGWORKS)
- 映像時間 15:03  
 出演 藪谷恭江 (国際芸術祭「あいち」組織委員会事務局) 小嶋彩海 (ラーニングボランティア)
- 映像時間 17:34  
 出演 クワメ・ディヘル (ハイブ・アース) 渡辺ひかり (ラーニングボランティア)  
 通訳サポート 辻琢磨 (国際芸術祭「あいち2025」キュレーター (ラーニング)、建築家)
- 映像時間 18:16  
 出演 辻琢磨 (国際芸術祭「あいち2025」キュレーター (ラーニング)、建築家) 吉田祐菜 (ラーニングボランティア)
- 映像時間 17:56  
 出演 川辺ナホ (アーティスト) ニシワキ (ラーニングボランティア)
- 映像時間 19:46  
 出演 会田大也 (ミュージアム・エドゥケーター) 富樫水奈子 (ラーニングボランティア)
- 映像時間 20:39  
 出演 拜戸雅彦 (国際芸術祭「あいち2025」会長補佐、キュレーター) 滝裕美子 (ラーニングボランティア)
- 映像時間 17:34  
 出演 栗本真杏 (国際芸術祭「あいち2025」アーキテクト、建築家) 加藤有美 (ラーニングボランティア)
- 映像は国際芸術祭「あいち」のYoutubeアカウントからご覧になれます。





へたちトークは、外部からのゲストを招いて話をしてもらうのではなく、芸術祭関係者の内側の仕事を紹介する、という枠組みのトークイベントとして企画し、アーキテクトやテクニカルディレクター、対話型鑑賞、サイン（看板、案内図、標識など）デザインについて、といった一般的には知られていない芸術祭の裏側を深ぼっていく回がラインナップに並ぶことになりました。芸術祭をつくる、いわば裏方の職能を知ること、その視点から芸術祭をみてみたい、という新たな需要喚起にもつながったと感じています。例えば、サインデザインの回では実際に愛知芸術文化センター内をサインデザインの視点で巡りな

がら、デザインや設置意図についての細やかな配慮を共有したことで、参加者には「この視点で他の会場を見てみたらどう見えるか」という好奇心が芽生えたはず。今回実施できた5回だけでなく、芸術祭をつくる職能は本当にたくさんあり、その一端をご紹介できたのではないかと感じています。芸術祭の「コンテンツ」は外から持ってくるだけでなく、自分たち自身の内部にもあり、それを企画として立ち上げ、来場者に紹介することで、芸術祭に関わる一人ひとりが自らの仕事を再認識したり、誇りを持てる機会となることを目指しました。

(文・辻琢磨)

Photo: あい撮りカメラ部 竹内久生

### Vol.01 見えないアーキテクトの仕事

日時:10月17日(金) 18:00-19:30  
 ゲスト: 武藤隆[建築家/大同大学教授/あいちトリエンナーレ2010・2013アーキテクト、2016シニアアーキテクト]  
 登壇者: 栗本真志[栗本設計所代表/国際芸術祭「あいち2025」アーキテクト]、丸田知明[丸田知明建築設計事務所主宰/国際芸術祭「あいち2025」アーキテクト]、三谷裕樹[ナノメートルアーキテクチャー共同主宰/国際芸術祭「あいち2025」アーキテクト]、山岸綾[サイクル・アーキテクト代表/国際芸術祭「あいち2025」アーキテクト]  
 モデレーター: 辻琢磨[辻琢磨建築企画事務所主宰/国際芸術祭「あいち2025」キュレーター(ラーニング)]

あいちトリエンナーレ2010からアーキテクトとして芸術祭を支えてきた武藤隆さんをゲストに迎え、展示空間の設計や監理を担当する「アーキテクト」の視点から、国際芸術祭「あいち」の歴史を紐解いた。「あいち2025」のアーキテクト4名も登壇し、それぞれの仕事を紹介し、建築家の職能の可能性について議論を深めた。

参加者数:70名

### Vol.02 サインデザインから国際芸術祭「あいち2025」をみてみよう

日時:10月24日(金) 18:00-19:30  
 登壇者: 阿部航太[デザイナー/国際芸術祭「あいち2025」サインデザイン担当]、伊藤健太[デザイナー/国際芸術祭「あいち2025」サインデザイン担当]  
 聞き手: 辻琢磨[辻琢磨建築企画事務所主宰/国際芸術祭「あいち2025」キュレーター(ラーニング)]

「サイン(看板、案内図、標識など)」に着目し、「あいち2025」のサインデザインを手がけた阿部航太さんと伊藤健太さんが登壇し、実際に愛知芸術文化センターを参加者と巡りながら、サインの成り立ちについて解説。サインデザインに関する基礎的な知識を学びながら、参加者とサインについての気づきを共有するディスカッションも行った。

参加者数:35名

### Vol.04 あいちで育まれる対話型鑑賞の文化～あいちの地力～

日時:11月14日(金) 18:00-19:30  
 登壇者: 会田大也[ミュージアム・エデュケーター/国際芸術祭「あいち2025」対話型鑑賞ツアーボランティア 監修]  
 モデレーター: 恒川明美[国際芸術祭「あいち2025」コーディネーター(現代美術)]

対話型鑑賞ツアーの監修を務める会田大也をゲストに迎え、「あいち」で対話型鑑賞の文化が根付いた背景を探った。あいちトリエンナーレ2019から始まったボランティアによる対話型鑑賞ツアーが「あいち2022」「あいち2025」と継続されてきた経緯について、経験者のエピソードも交えながら紹介。活動が個人や地域社会に与える影響を深掘りした。

参加者数:60名

各回会場: ラーニングセンターへたち

### Vol.03 はじめまして、テクニカルディレクターです

日時:11月8日(土) 10:30-12:00  
 登壇者: 山田晋平[株式会社青空代表/国際芸術祭「あいち2025」テクニカルディレクター(現代美術)]、守山真利恵[チェルフィッチュ技術監督/国際芸術祭「あいち2025」テクニカルディレクター(パフォーマンスアート)]  
 聞き手: 浅野翔[デザインリサーチャー/国際芸術祭「あいち2025」ラーニングチームメンバー]

作品展示や舞台制作の現場でアーティストやスタッフとともに「作品を成立させる」テクニカルディレクターの仕事にスポットライトを当てた。現代美術担当の山田晋平さんとパフォーマンスアート担当の守山真利恵さんが登壇し、芸術祭における具体的な関わり方を紹介し、技術と創造のあいだにある実践について掘り下げた。

参加者数:15名

### Vol.05 「あいち2025」ラーニングを建築する

日時:11月21日(金) 18:00-19:30  
 登壇者: 辻琢磨[辻琢磨建築企画事務所主宰/国際芸術祭「あいち2025」キュレーター(ラーニング)]  
 聞き手: 服部浩之[キュレーター/東京藝術大学准教授、国際芸術センター青森館長]  
 モデレーター: 蛭間友里恵[国際芸術祭「あいち2025」コーディネーター(ラーニング)]

「あいち2025」キュレーター(ラーニング)であり建築家の辻琢磨が登壇し、ラーニング・プログラムが建築的な視点からどのように仕組み、学びとしての場づくりが行われてきたかを紹介。建築を学び、あいちトリエンナーレ2016でキュレーターを務めた服部浩之さんを聞き手に迎え、「あいち2025」ラーニングの具体的な実践を通してラーニングの可能性を掘り下げた。

参加者数:30名

ラーニングチームの一員として企画や方針を考える際、チームのコンセプトや方針に立ち戻ることが多かった中で、私の自身の意思を強く反映しているプログラムとなっているのがラーニング専門研修「インタビューの練習」と、「ラーニング・ラーニング」の枠組み作りである。例えば専門研修では、他のテーマが10名以上の定員を設ける中、定員5名（結果的には7名）と少数に設定するなど、チームに要望を汲んでもらった。そうした背景には、「互いに影響を与え合えるようなチーム」を作りたいという考えがあったからだ。限られた時間の中で、いかに夢中になれるか。そして芸術祭が終わってからもその人の中で輝き続けられるものになるようにと、本気で計画していたからだ。

ラーニング・ラーニングでは、芸術祭会期前から継続的に開催していくことや、一方通行になりやすいレクチャーやトーク形式ではなく、互いに理解を深められるようなワークを各回ごとに設定した。3時間という長丁場ではあったものの、参加者もゲストも真剣にプログラムに取り組んでくれた。

振り返ってみると、私は「芸術祭」をゴールに考えておらず、これまでもこれからも続いていく時間の流れに加わるような、華やかな期間として位置付けていたと思う。

専門研修の内容は既に書いてあるのでここでは割愛するが、ボランティアメンバーたちは「互いに影響を与える」という点はもちろん、彼ら自身によって研修をより豊かで可能性に満ちたものにしてくれた。例えば、自宅に帰ってからも研修の出来事を考え続けて、そこで考えたことを伝えてくれる人がいたり、自らの活動に研修の実践を行ったことを報告してくれる人がいた。彼らはこの研修のコンセプトの深い理解者となって言葉を紡いでくれた。

インタビューの撮影時は、2台のカメラで撮影と演出を行なったのは私一人だったため、メンバーには、タイムキーパーやゲストのアテンド、当日のインタビュアーのサポート、来場者対応などを任せていた。今日のような状況かを把握しながら役割を全うしていたメンバーたちの姿に、安心して背中を任せることができた。

ある時、ふと、ゲストもインタビュアーも、サポート担当のメンバーも、皆が等価の一つの制作にのめり込んでいるように感じる瞬間があった。「良いエネルギーが渦巻いているな」と、密かにうっとりしていた。研修後にメンバーの一人が「なんだかすごく楽しかった。」と、興奮気味に伝えてくれた。彼女はその日、インタビューを行なってはおらず、タイムキーパーとして全体を見守っていたにすぎない。その場にいなかった人からすれば、インタビュー撮影という普段出来ないことができて興奮していると思うかもしれない。その気持ちも分かる。でも、そこには確かにある種の“美しさ”が生まれていて、それを感じ取ったという実感がある。

「何か美しいものがここにある」そういうふう感じたのは、瀬戸市の少年院で行なわれたハイブ・アースの版築ワークショップの時にもあった。私は当日のサポート要員として入り、限りなく参加者に近い立場だった。開かれた空間ではない中で行なったワークショップではあったが、少年たちはもちろん、芸術祭メンバーや、取材に来たテレビのアナウンサー、職員の方々も一心不乱に土をたたき、みんな等しく汗をかき、とても楽しそうだった。ここでの出来事は誰もが見れるわけではないが、それでも、私はここに芸術祭が持ち込まれたことに意味があったと思う。それは、ワークショップを行なった部屋の外に突拍子もなく生えていた、立派な木の存在にも似ている気がする。尋ねてみると、木にはグレープフルーツが実るそうで、少年たちが給食で出た実の種を植えたものだそう。そんなものの存在は、そこで生活をする人たちにしか意味のないことでもあるが、グレープフルーツの黄色い実を見て、何か思い出したり、日差しが当たった姿に心を癒すかもしれない。そんな木の役割には、想像以上の可能性を感じる。

「芸術祭は一過性のものだと思いますか？私はそんなふうには思わないんです。」とボランティアの方に問いかけられたことがある。もし私が芸術祭の現代美術やパフォーマンスアートに関わっていたら、芸術祭期間に展示や公演を開くという意味で、そこがゴールだという気持ちになっていたかもしれない。しかし、ラーニングチームで過ごすことで、私はボランティアの方々の視点を共有させてもらうことが出来たと思う。ボランティアの方々にとって芸術祭は、3年に1度やってくると同時に、そこに向かうまでの時間と、経験した後の時間が存在している。それは、開幕式の芸術監督のフルの心打たれるスピーチの後、世界各国から集まったアーティストたちが「また会えたね」とでも言うかのように、舞台上でハグをしたり互いに握手をして再会を喜び合う姿にも繋がっている気がする。

私はアーティストとしてラーニングメンバーとなり、今回の芸術祭に携わってみて、ぼんやりとイメージが思い浮かんでいた。それは「できるだけ遠くに飛ばす」というものだ。私は、できるだけ遠く、離れた場所に向かって、芸術祭のエッセンスを投げてみたいと思う。花火みたいな一瞬の出来事でも良いし、その中に種が入っていて、時間をかけて実のなる木に成長するようなことも含めて。そこに芸術祭を経験した人々が通りがかったら、それを持ち帰ったり、分け合えたりするような、そういう光景を生み出せるような気がする。

# 2

## 手を動かして考える

ラーニングの現場では、頭で考えるだけでなく、実際に手を動かしながら思考を深めるプロセスを大切にしてきました。小さな試作を繰り返し、失敗さえも共有しながら、再び形にしていく——。この地道な積み重ねが、企画の骨格を形作り、チームの信頼関係を育てていきました。

本特集「手を動かして考える」では、そうした実践の記録をまとめています。アーティストのハイブ・アースとともに《瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」》に取り組んだ、辻琢磨と村上慧による振り返りをはじめ、ラーニング専門研修「あいま研」でのディスカッションや、テーマをラーニングセンターの壁面に書き出していったプロセスの記録。さらには、ボランティア自らが問いを持ち寄り、自主企画を立ち上げた「ラーニング・ボランティア・ウィーク」の実践までを収録しています。また、ラーニングチームメンバーの浅野翔によるコラムでは、手を動かすという行為を通じて見えてくる「人間とモノが対等なパートナーとして創造に携わること」の意義を語っています。

## 埋め戻しを終えて

村上 プロジェクトは無事終わりましたが、辻さんは率直にどうでしたか。

辻 最後の埋め戻しがすごく印象的だったな。長い時間試行錯誤して、スタディとかテストピースもつくって、最終的にあの形に落ち着いたっていうプロセスもあったし、1年半ぐらい、いろんなフェーズがありつつ息の長いプロジェクトだったから、最後、土に戻ったときはすごく不思議な感じがしました。

村上 埋め戻すのは予定どおりではありましたが。

辻 そう、予定どおりで、想定どおりのことが実際に起こって、特に問題もなく非常に綺麗に収まったんだけど、いろいろやってきた残像もありつつ、ふたつの敷地が最後に普段の状態に戻ったというのは、今まであんまり感じたことがない感覚だった。建築は基本的につくるだけで、元に戻すことはあんまりないから。スタディと、「版築合宿」と、会期中と、そして埋め戻している、大きく分けると4つのフェーズがあるんですけど、それぞれに発見がありました。

村上 僕も、土が埋め戻されたところに、まわりとはちょっと色が違う土で四角いフィールドができた状態を見て、「これは何が起きたんだろう」って考えましたね。終わってみてやっと振り返れたっていうか、「完！」っていう感じがしました。

辻 「完！」なんだけど、ゼロに近い状態まで戻ったのがすごく変な感じっていうか。すっごくいろいろやったんだけど、なんにもやってなかったかのような状態に戻ったってことだよな。戻すんだったら、何のために頑張ったのかっていう……建築的



な視点で言えば残って機能があって使われてなんぼみたいなところがあるから。

## 土を移動させて固めて戻しただけ

村上 ラーニングセンターへたちの撤収でも最後は真っ白な部屋に戻ったじゃないですか。あの感じて、展示会をやるたびに毎回体験するんですけど、空間が元通りになって、小さな壁の穴までパテ埋めして、自分が施した痕跡を徹底的に消すんですよ、ホワイトキューブで展示した後って。ホワイトキューブで展示すると、毎回清々しさと虚しさで気持ち良さが同居した不思議な感じを覚えるんですけど、それと似てるかもしれない。でも辻さんが埋め戻しの時に感じた「何だったんだろう」っていうのは、ホワイトキューブが元に戻るのとはちょっと違うのかなあというか。「へたち」の時は似たような感じは起こらなかったですか。

辻 違う種類の感じでしたね。「へたち」の時は、ここにローテーブルあったとか、ここにインタビューのソファあったとか、1個ずつの情景みたいなのが思い出されて、浸ってみたい感覚で。

それとはちょっと違うんですよね。「凸と凹」はホワイトキューブじゃないところが元に戻ったんで。原状復帰義務としては同じなんですけど、ホワイトキューブはその次の展示を待つじゃないですか。もともとが展示のための空間だから。でも「凸と凹」の場所は中庭と芝生広場で、次に展示をする予定は別にない。ホワイトキューブは、戻して当然っていう感じ。

村上 戻して当然の種類がちよっと違うってことなのかな。土を移動させて固めて戻しただけじゃないですか。もっと単純化すると、穴を掘って、穴と土の塊を出現させて、その塊を穴に埋め戻したみたいな話ですよ。かなり異様な現場ですよ。作品を外から持ってくるわけじゃないから。炎天下の中で、そのままだと崩れてしまう「土」を、何人もで何度も叩いて、ある一定期間形を留められるだけの力を加えて、会期中は形が保たれるようにして。会期が終わったらわざわざコンボで崩して元のところに埋め戻した。血と汗と涙の結晶を……血は出てないけど。何が起きたんだろう……

辻 土がマテリアルの象徴みたいな部分はあると思うんですけどね。運ぶ姿もだいぶドラマチックじゃない。やっぱり「へたち」で動かした家具とかとは違う。2トントラックに積んで、ガーって荷台が跳ね上がって、タッタタッタと土が落ちて……

## 最初から最後まで「何なんだこれは」

村上 今「何だったんだろう」って話をしているけど、その答えとしては「芸術祭だった」ということになりますよね。あれは芸術祭が成り立たせたプロジェクトですよ。

辻 そうだね。

村上 自分が作者として関わっていたら終わってからの心境もちょっと違ったと思います。でも今回はラーニングチームとして、アーティストのハイブ・アースと協働せよっていう使命を与えられていたことで、最初から最後まで「何なんだこれは」って感じるものがずっとあった気がします。それは悪い意味でもなくて、最初はよく分からないものに巻き込まれちゃったなあっていう違和感もあったんですけど、終わってみたら良いプロジェクトだったと思っています。その最初のプロセスのことを話しておきましょうか。

## 「私たちは設計はやらない。」

辻 最初、フル芸術監督から「ハイブ・アースと版築で何かやってね」って依頼があって、彼らが、版築という技術のプロフェッショナルだということははっきりしてただけど、じゃあどんなものを作るのかっていう設計作業もやるのかどうかは曖昧なままで、いざオンラインで打ち合わせしたら、クワメは「私たちは設計はやらない。君たちのやりたいことを実現する」って言ってたよね。それで事態が急変して、ラーニングのほうで設計までやらないといけないうか、ということになった。

村上 巻き込まれましたよね。顔合わせ、クワメたちが来日して、2024年の11月。クワメとサカって人が来て。

辻 彼らのキャラクターにかなり救われたっていうか、別に設計はしないんだけど、底抜けに明るい人柄がプロジェクトのエンジンにはなったんじゃないかな。一緒に土いじったり、採土場を見学させてもらったり。

村上 最初のオンラインミーティングで、ラーニングとしてはハイブ・アースに「何がやりたいか」を聞きかかったのだけど、向こうも同じことを聞いてきた。クワメが「Everything is possible」、って言うてくれて、でも僕たちとしては、やりたいことは特になんか……そこから辻さんと僕でそれを考えることになり、プロジェクトが賑がり始めた。

## 佐藤館長の問い

辻 決定的だったのは、ハイブ・アースのふたりも交えての愛知県陶磁美術館でのミーティングで、佐藤一信館長から「このプロジェクトは何を目指しているの」って問われた時かな。芸術祭にとつての、このプロジェクトの位置づけをクリティカルに問われて、その時に無理やりひねり出したのが、その時は舞台をつくるっていう案だったから、その床が朽ちて自然に選んでいくことが重要、というコンセプトだった。なるべく自然なものをつくらうっていう。

村上 それまでも環境負荷を抑えるっていうか、自然に朽ちていくようなものにしようっていうのは、ぼんやりとは話し合っていましたよね。そこへきて佐藤館長が、作品の根っこに関わる質問をしてきて、でも誰も答えられなくて……。強いて言えばフル芸術監督しか答えられない。このプロジェクトが何なのかっていうのは、ハイブも僕たちも、いわば「仕事を受けた側」なので。あの瞬間に辻さんが「建築」したんですよね、そのコンセプトを。

辻 建築させられたっていうか。

村上 あの瞬間にプロジェクトが始まった感じがしますね。

辻 確かに。あそこで覚悟が決まったような感じだよな。

## 「作品」というより「プロジェクト」

辻 芸術祭全体のなかでの愛知県陶磁美術館の使い方とか、アーティストの入り方とかが決まってきて、最初は、凹があった場所に「舞台」をつくらうと考えていた。だけどいろんな事情から中庭の方がいいんじゃないかっていう話が出てきて、とはいえず土を掘る場所は欲しいから、もともと舞台を作ろうとしていた場所で掘った土を「つくるとこ!陶芸館」の中庭に持って行って、何か版築しようという流れになった。

村上 この頃の話合いの中で、中庭は陶芸室から見たときに、いわば「裏側」みたいな位置づけなんだけど、逆に中庭から見える景色を作品にできないかっていう話をした。そういう話になったのも、制作主体がすごく曖昧だったので、愛知県陶磁美術館という場所が持っている文脈に、作品の成立を助けてもらう必要があったというか。僕たちに「やりたいこと」なんて別にないから。

辻 場所は「どこでもいいんですよ」って言うたぐらい。愛

知県陶磁美術館になにかとっかかりがないか、みたいなどころから導き出された場所だった。中庭が自分たちにとって身近な場所だったというのも大きい。テストピースをつくるのもだいたい中庭をお借りしてたし。中庭がどういう場所かちゃんと理解できていた。

**村上** 全然違う場所でやってたら、全然違うプロジェクトになってたと思います。終わってみればだけど、凸と凹が離れてたから面白いプロジェクトになった。

**辻** 本館を挟むような配置になって、位置づけもより明確になった。そこから制作がバンバン始まって、テストピースを作ってはクワメに画像を送って、水分率をどうするかとかやりとりしたり。最初は「キラ（粘土が作られる過程で生まれる産業副産物）を使う、使わない」って話もあったんだけど、脆いことがわかってきて、利用を諦めることになり、石灰を混ぜることになった。その時に佐藤館長と打ち合わせをして、土壌に影響がない石灰の混合比率を探そうという話になった。それをクワメに伝えたら、「石灰を使うのは凸の四隅だけでいいんじゃないの」っていうアイデアをくれて、それでうまく進んでいった。

要所要所で、愛知県陶磁美術館の佐藤館長や陶芸館の岩渕さんからも、このプロジェクトの方針に影響するクリティークがなされていった。

**村上** みんなで粘土をこねるみたいにプロジェクトが進みましたね。

**辻** 石灰どうするのっていう話のなかで、これは「作品」というよりはラーニングの「プロジェクト」と考えたらいいんじゃないかっていうか、それだったら失敗してもいいんじゃないかという気づきがあったのが大きかった。最低限の安定性を担保して、多少崩れてもいいんじゃないか、とか。作品を美しく維持させる強度を持たせるっていう条件は外れて、ひとつのプロジェクトとして、どういう経緯で育っていったのかをちゃんと見せようっていうことで、アーカイブが重要になってきた。合宿前のひとつの山場だった。

**村上** 会期中に凸から草が生えてきましたが、石灰で表面すべてを覆ってたら多分生えてこなかったですよ。石灰の使用を四隅だけに限定したから、土だけの表面ができて、草が生えてきた。みんなの手がちょっとずつ作品の形を変えさせた。

### プロジェクトがゾーンに入った瞬間

**辻** 「版築合宿」は大変だったね。お盆のど真ん中で、暑かった。クワメがこの時期しか来れなかったから…。それでも愛知県陶磁美術館の協力もあって、なんとか工夫して、開始時間を9時じゃなくて、14時スタートの20時終わりにさせてもらった。実制作もプリミティブな流れ作業っていうか、自分の役割をちゃんと一人ずつ受けて、土に向きあえばクワメがなんとかしてくれる感じだった。コンパクション（突き固めること）は作

業的には目玉なんだけど、その前の準備の方がよほど重要だった。型枠をミリ単位で動かないようにするための補強とか、ポリケースに水をためて重しにしようとか、アイデアをみんなを出し合って。

**村上** 陶芸館が持っている設備で、できる範囲の工夫をしましたね。テントも。

**辻** そうそう。中庭には排水溝があって水は流せるし、蛇口もあるからすぐ水が出てくるとか、コンセントもたくさんあるとか。土を扱う施設ならではの設備と人材が揃ってて、「こういうのありますか」って聞いたらすぐ出してくれるっていうのは、本当に助かった。普通的美術館ではできないことだった。

**村上** 普段から粘土を扱ってるから、土という素材に適したいろんな道具や人間が揃ってましたね。コミュニケーターの松村さんも途中からプロジェクトに加わってくれて、学生制作スタッフのケアを全部やってくれたから、僕と辻さんは制作の準備だけ考えればよかった。いろいろな歯車がうまく噛み合っただけ進んだ感じ。

**辻** 凸をつくるために組んだ型枠も凹の階段部分に転用できたり。最後まで余った型枠すらも、残土を囲う枠として使うことができた。しかも、残りの型枠材を全部使い切るかたちでぴったり収まった。

**村上** それも本当にたまたまでしたね。なんだか、プロジェクト全体がゾーンに入っていました（笑）

### 作者は芸術祭だった

**辻** 設計は大事なんだけど、これだけ大きな芸術祭の中で、決めすぎてないプロジェクトがあったのはよかったんじゃないかと思います。版築という手法だけ決まればどうでも転べるっていう。いろんな文脈とかコンテキスト条件を吸収して、臨機応変に変えられて、それが結果的に「ハマった」みたいに見えるだけっていうか、ギリギリまで遊ばせておくプロジェクトを準備するっていう重要性は、逆にあるのかもね。全部がガチガチに決まって動かせないプロジェクトばかりだと限界がある。だけど僕らは別にやりたい敷地とかなかったし、全体の要望がこうだったら、こっちも全然動きますよみたいな感じで、芸術祭全体をサポートした感じは結果的に出るかもね。

**村上** すごく純粋な芸術祭の作品ができたなと思います。芸術祭というものがつくった物体ができた。

**辻** いろんな人の意図と手が入ったプロジェクトでした。

**村上** ボールは最初から転がってたんですよ。フル芸術監督がハイブ・アースとラーニングチームをコラボレーションさせるって決めた瞬間から転がり始めて、その進路をみんなでちょっとずつ動かして、足したり引いたりして。なぜボールが転



がっているのかはわからないけど、転がってしまっているものは仕方がない。僕たちができることは、こっちに行くともずいからここを変えよう、みたいな調整をみんなで一生懸命考えてた。芸術祭っていうイベントによって転がされたボールの進路をみんなで一生懸命修正して、着地させた。転がってる球にずっと並走しているイメージでした。

### オアシスのようなプロジェクト

**辻** ラーニングとしていろいろやったけど、これは実体のあるものづくりで、自分にとっては建築プロジェクトに近い。そういうものがラーニング・プログラムの中にひとつあって、すごく良かった。モノがちゃんとある感じ。人と向き合いすぎると疲れるじゃないですか。ラーニング全体だと、もう人としか向き合っていないから、気を張っていくつもプログラムを進めていく中で、このプロジェクトだけは「土が固まればいい」みたいな感じで、土だけと向き合ってもらえる。僕にとってはオアシスみたいなプロジェクトだった。クワメや村上さんとちゃんとコラボレーションできたっていう意味でも良かったです。共同設計みたいな感触があった。

**村上** 僕は肉体的には大変だった記憶が全然なくて……

**辻** 鉄人だな（笑）

**村上** 人とのやりとりの方がすごく気を遣うし、体力も削られる。それに比べたら……。たしかに暑かったけど、大人数で、休憩も取りながらみんなでコンコン土を叩くっていう時間は、肉体的にはさほど辛くなかった。明るいキャラクターのクワメもいるし。みんなで笑いながらやってた。作業していると、たまに一体感が生まれるんですよ。だんだん目で合図ができるようになってたし。

**辻** すごかったですよね。一心不乱だったなあ本当に。

**村上** 気がつけば終わってた感じですね、版築合宿は。だから、きつといい時間だったんですよ。このプロジェクトがラーニングの中にあってよかった。

**辻** あってよかったね。芸術祭にラーニングとしてずっと関

わってやってきたけど、「凸と凹」の制作の時間だけは本当に唯一、身体を使うこと自体がプロジェクトみたいなどころがあるから。

### 「Everything is possible」—— 招聘と制作のねじれ

**村上** この芸術祭には「灰と薔薇のあいまいに」っていうテーマがあって、フル芸術監督がコンセプト文を書いて、それを元にキュレーションがなされてるじゃないですか。アーティストからしたら、「こういうテーマで展覧会やります」「ここにあなたを呼びたいです」と声をかけられた側なのに、そのなかで「好きなことをやってください」って、よく考えたら難しいんじゃないかと思いました。テーマ決めてるのはそっちじゃないっていうか。だからクワメが「Everything is possible」と言ったのは、反応としては案外素直で正しいのかも。テーマを決めてるのも、呼んでるのも君たちなんだから、俺たちにやってほしいことをそっちから言ってくれよ、みたいな。これは結構理にかなった真つ当な反応だったんじゃないかなと思いました。

**辻** 僕らラーニングは運営側っていう意識で、アーティストとしての立場とは区別してた。でも結果的に出ちゃってる部分がある。僕の建築設計のスタンスとか。

**村上** 僕はどうだろう……。場所を中庭に移したらどうかっていう提案をしたぐらいで、アーティストとしての自分とは割り切って取り組んでました。ハイブ・アースの版築技術を勉強するつもりで参加してました。自分にとってもラーニングになりました。

### 透明な作品

**辻** 「凸と凹」を現地で見ただけで妻が教えてくれたんだけど、作品って気づかずに通っていく人がすごく多かったらしい。キャプションを見て「どれが作品なの」って探しはじめるんだって。それは、ある特定の個が出した主張が形になったものではないから、というか。意図はあるんだけど、純粋な「もの」としての存在が生まれたからなのかな。

**村上** 透明な作品ですよ。作品が発する何かはあるんだけど、そこに「意志」みたいなものがないから、透明に感じられる。

**辻** 環境の変化に対する違和感と共に、その場所に当たり前にあるみたいな状況がすごくいい。いいプロジェクトになりました。

2025年12月8日（Zoomにて）

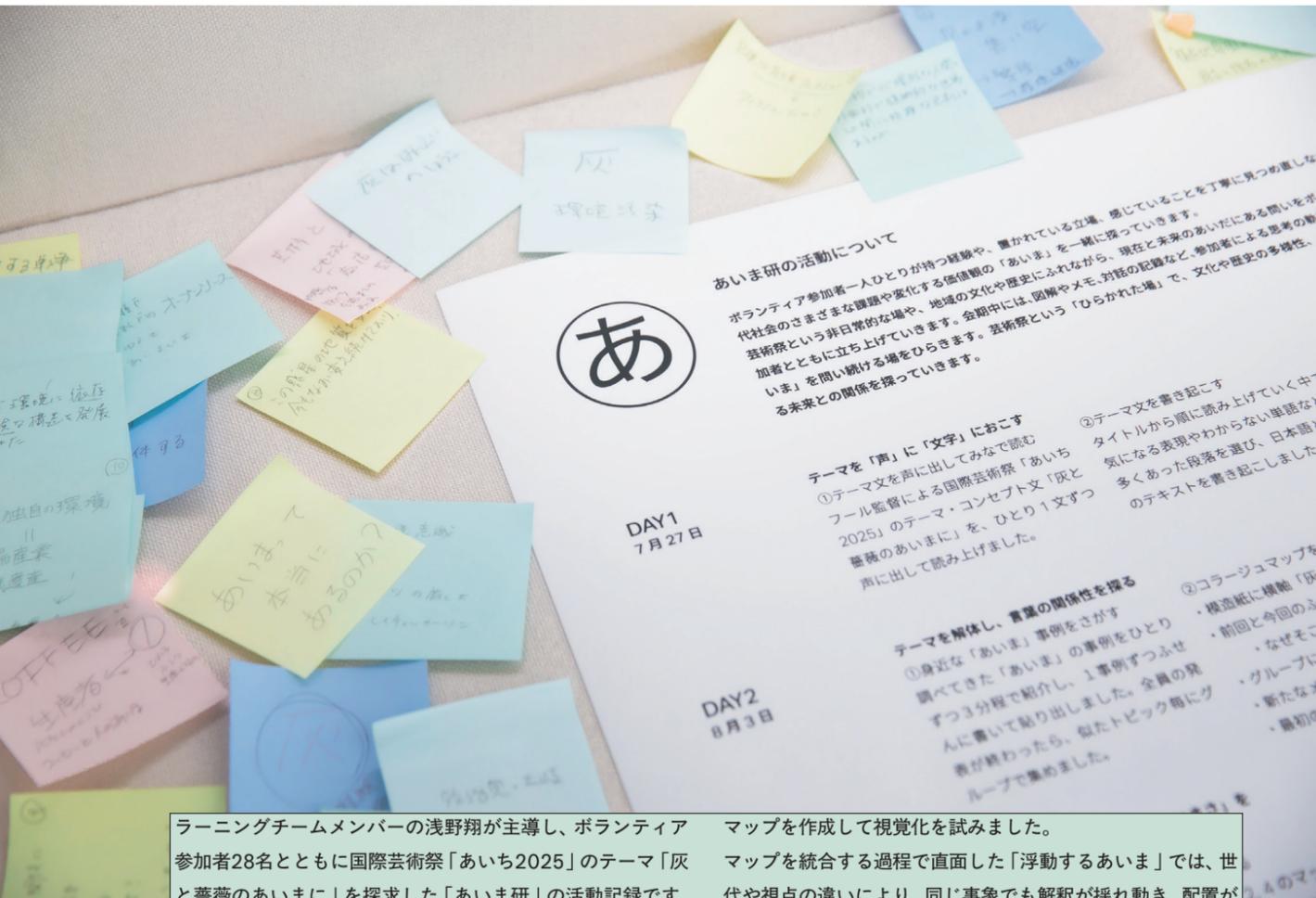
瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」の制作プロセスはウェブサイトからご覧いただけます。



<https://aichitriennale.jp/2025/magazine/cat-report/rammed-earth-01.html>

# ラーニング専門研修「あいま研」

浅野翔 ラーニングチームメンバー



ラーニングチームメンバーの浅野翔が主導し、ボランティア参加者28名とともに国際芸術祭「あいち2025」のテーマ「灰と薔薇のあいまに」を探求した「あいま研」の活動記録です。参加者は20代から70代まで幅広く、男女比はおおよそ2:3。愛知県内外から多様なバックグラウンドを持つ人々が集いました。本専門研修では、ボランティア参加者一人ひとりが持つ経験や置かれている立場を見つめ直し、現代社会の課題や変化する価値観の「あいま」を探求しました。活動のプロセスは、国際芸術祭「あいち2025」のテーマ/コンセプトを声に出して読み、手で書き写す身体的なアプローチから始まりました。言葉の解像度を高めた後、日常の中で採集した「あいま」な事例を持ち寄り、「灰-薔薇」「公-私」の軸を用いたコラージュ

マップを作成して視覚化を試みました。マップを統合する過程で直面した「浮動するあいま」では、世代や視点の違いにより、同件事象でも解釈が揺れ動き、配置が定まらない場面が多々ありました。しかし、あえて結論を急がず、対話を重ねることによってその複雑さと向き合い続ける姿勢を重視しました。最終成果として、議論の末に抽出されたキーワードを参照し、テーマ/コンセプトの全文を参加者たちの手でラーニングセンターへたちの壁面に書き出し、思考の軌跡として空間に刻み込みました。その後の活動では、ラーニングセンターへたち・せとの両会場にて、自らがファシリテーターとなって「あいま」を問う、来場者向けワークショップを実施しました。

Photo: 三浦知也

担当 浅野翔(ラーニングチームメンバー)、小出一葉(ファシリテーター)  
 ボランティア Ando Tamaki, miyaki hisako, おおの、さくもとひな、ゆーみん、犬塚裕美子、内笹井七美、岡谷久美子、奥村寿浩、加藤あつこ、加藤啓史、木田めぐみ、多喜田まゆみ、立原まな、田中光城、谷口直、塚田いず美、中曾根葵、難波朔矢、朴志桓、平岡靖教、水野椋太、三好新二、村瀬実希、八木淳子、山本愛子 ほか(全28名)

活動

## テーマを「声」に「文字」におこす

7月27日(日)13:30-16:30

フル・アル・カシミ芸術監督によるテーマ/コンセプト「灰と薔薇のあいまに」に向き合うことから活動が始まりました。まずは参加者全員で、ひとり一文字ずつ声を出し、バトンを渡すように文章を読み上げました。読み進める中で、気になった表現や難解な単語が含まれる段落を選び出し、日本語と英語のテキストを自らの手で書き起こす作業を行いました。目で追い、声に出し、手で書くという身体的なプロセスを経ることで、単なる読書以上に深く言葉と向き合いました。最後に、この体験を通して心に残った表現や理解しづらかった点を共有し、テーマへの理解を互いに深める第一歩としました。



## テーマを解体し、言葉の関係性を探る

8月3日(日)13:30-16:30

参加者が日常の中で見つけてきた「あいま」な事例を持ち寄ることから始まりました。ひとりずつ事例を紹介してふせんに書き出し、似たトピックごとに分類していきました。続いて、模造紙に「灰-薔薇(横軸)」「私-公(縦軸)」を描き、それらのふせんを配置する「コラージュマップ」の作成に取り組みました。なぜその位置になるのか、近い事例は何かを議論しながら配置します。途中、グループメンバーを入れ替えることで、異なるテーブルの議論や視点を持ち帰り、新たなメンバーとともにふせんの整理を繰り返しました。多角的な視点を取り入れることで、言葉と言葉の関係性を探る時間となりました。

## テーマの「あいまいなあいまさ」を再解釈して表現する

8月17日(日)13:30-16:30

これまで各グループで作成してきたコラージュマップの統合を行いました。まずはグループ1,3,5とグループ2,4それぞれ統合し、最終的には全員の思考が詰まったひとつの大きなマップへと集約させました。この巨大なマップを前に、「難解さ(あいまいなあいまさ)と向き合う」ことをテーマに全体で振り返りを行いました。「灰と薔薇のあいま」をどう捉えたか、日常の中でどのように「あいま」に気づき、自分ごととして落とし込むことができるか。統合されたマップから見えてきた新たな視点についてコメントし合い、複雑なものを複雑なまま受け止める姿勢や発見を共有しました。

## 統合過程

8月17日(日)

### グループ1,3,5の統合

3グループを統合すると、瀬戸に関するふせんが多く見られました。置かれた位置はグループによって異なります。コンセプト文に「陶磁製品の生産によって作り出された灰のような黒い空は、環境の汚染や破壊よりも、むしろ繁栄を意味していました」とあるように、伝統工芸や地場産業は自然環境の破壊につながる一方で、陶磁製品は地域の繁栄を象徴する側面もあります。同じキーワードではあるものの、グループによっては「薔薇」にも「灰」にも捉えられていました。同じように、SNSでのコミュニケーションや、近年影響を増す生成AIなどの技術も、あるグループでは「灰-私」、別のグループでは「薔薇-公」に位置づけられていました。共通する内容でも、視点の違いによって配置が分かれていました。

### グループ2,4の統合

両グループを統合するなかで、4つの領域に特徴が現れました。右上の「薔薇-私」には、「晴れと雨のあいま」や「卒業式」など、期待と不安が入り交じる場面が集まりました。左下の「灰-公」には、人間の営みと自然環境の関係を描いたふせんが多く見られます。一方、左上の「灰-私」では、デジタル技術との関わりに対する不安が目立ちました。右下の「薔薇-公」では、「芸術祭と地域性」といった新しい公共活動への期待が示されています。それぞれの位置づけは単なる分類ではなく、境界ごとに異なる視点や感情の表れを示していることが分かります。



Photo: 三浦知也

## テーマ/コンセプトを壁面に書く

9月6-7日

これまでの活動の集大成として、ラーニングセンターへたちの壁面へドローイングを行いました。3回にわたる読解や対話とマッピングを経て抽出された重要なキーワードを太さや形などを変えて、日本語と英語で壁に書き出していきました。これは単なる装飾ではなく、参加者たちが悩み、対話を重ねてきた思考の痕跡を空間に刻む行為です。議論を踏まえた言葉たちが壁面に並ぶことで、「あいま研」という場が積み重ねてきた時間が可視化され、へたちを訪れる人々にも「あいま」への問いを投げかける空間を作り上げました。この経験を踏まえ、参加者たちはラーニング・ボランティア・ウィークに向けた準備へと進めていきました。

### 担当者によるコメント

3日間に渡った研修最終日、巨大なホワイトボードいっぱいにコラージュマップが形作られていくと同時に、ボランティアのみなさんからは「今日こそ、長い対話の答えが出るであろう」という期待感を私はどこことなく感じていました。しかし、マップは完成したものの、「あいま」についての明確な答えは出ず、みなさんの顔にはほんのりと疑問の色が浮かんだまま研修が終了しました。一見後味の悪い終わりに見えるかもしれませんが、その未完成さがむしろ芸術祭のスタートダッシュになったのかもしれない。それが確信に近づいたのは、後に生み出されるラーニング・ボランティア・ウィークの自主企画やあいま研の活動実施を伴走し、やりきった後のみ

さんの顔を見たり、漏れ出した感想を聞いたときです。研修、準備期間、会期を通して生まれた自主企画が、モヤモヤした心を晴らすよう、来場者とともに答えを探るように生まれていったことが印象的でした。その企画を来場者が体験し、対話を広げ、芸術祭の会期にとどまらず、その体験が広がっていけば良いと素直に感じました。企画の終了後、「研修の意味・明確な答えのない対話の意義をやっと理解することができた」とスッキリした顔で語っていたあの表情は、きっとこれからも忘れられないと思います。

小出一葉 ファシリテーター

### 全体の統合

テーマ/コンセプトの読解過程を経て、参加者はそれぞれが見出した「あいま」を持ち寄り、議論を進めました。個々の「あいま」を「灰-薔薇」「公-私」の軸で相対化していく過程では、一枚一枚、どのような文脈から得られたのかを丁寧に確認しながら統合を進めました。

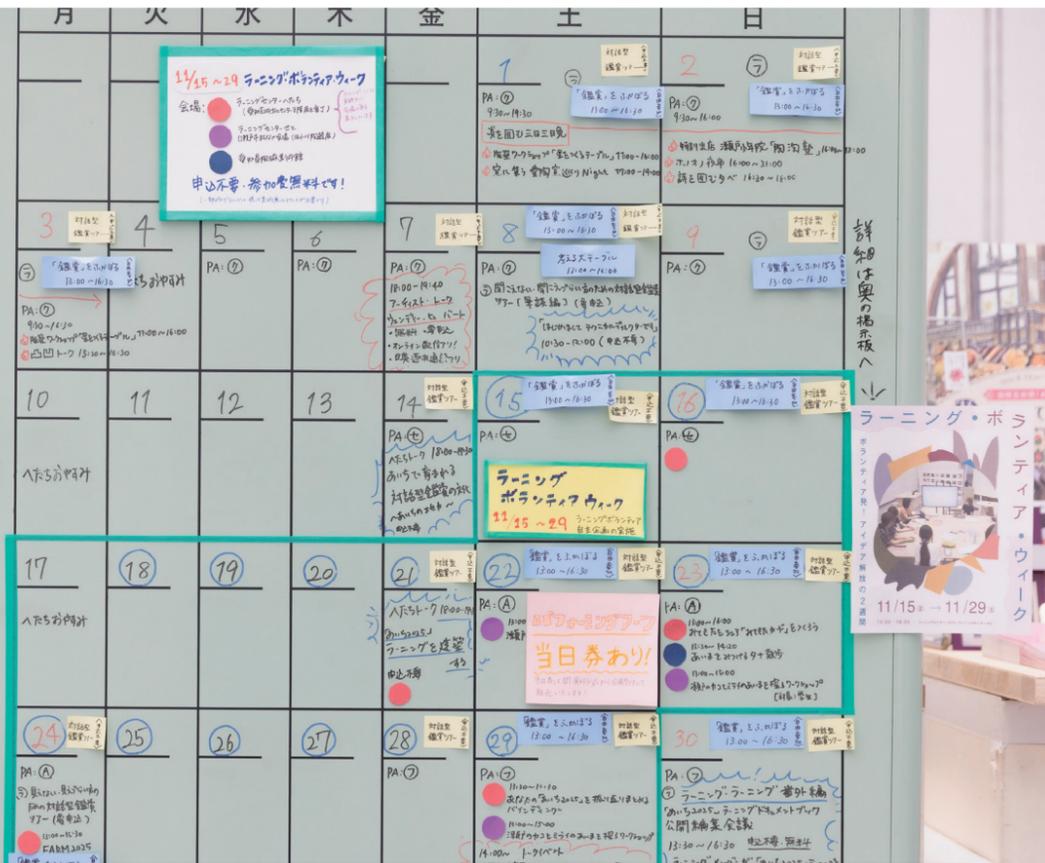
メンバーを変えて議論を重ねても位置が変わらない「あいま」が大半でしたが、対話のたびに移動し続けたふせんや、配置場所を見失ったふせんもありました。例えば、「できることとできないことのあいま」という記述に対して、自身の身体的

な能力の問題と捉える人もいれば、社会的に置かれた立場による制限と捉える人もおり、配置が定まりませんでした。また、「戦争」や「環境」といったキーワードや自身の経験については、倫理的な視点から「灰」の領域からは動かせないものの、「公」か「私」のどちらかに寄せるべきか判断に悩み、揺れ動く場面も見られました。

世代・所属・地域などの異なる参加者が集まり、「対話に複雑さを重ねること」を繰り返したことで、こうした価値観の揺らぎが「浮動するあいま」として可視化されました。

# ラーニング・ボランティア・ウィーク

野田智子 ラーニングチームメンバー



国際芸術祭「あいち2025」では、ボランティアがより主体的に芸術祭に関わることを目指す新たな活動として「ラーニング」区分を立ち上げました。会期前には、「鑑賞」をふかぼる」「インタビューの練習」「あいま研」という三つのテーマを軸に、複数回の研修を重ね、会期中も、各テーマをもとにした活動を継続的に展開しながら、ボランティアメンバー自身が関心や問いを持ち寄り、自主企画の立案に取り組みました。ボランティアメンバーは、ラーニングセンターへたちを拠点に、ファシリテーターやコミュニケーターによるサポートのもと、「育てるシート」を用いて企画のアイデアを整理し、動機や考えを言語化しながら企画を育てていきました。企画が具体化した段階で企画書フォーマットに記入し、ラーニングチームに提出しました。

Photo: 三浦知也

## 来場者向けプログラム

### ふたつのあいまを遊ぶ

2種類の言葉が書かれたカード束から1枚ずつをランダムに選び、カードに書かれた言葉の「あいま」について考え、参加者同士で対話しました。また、来場者が自由にいつでも楽しめるよう、遊び方を記した説明書とカードを展示しました。

会期中には、企画をブラッシュアップする場として「考えるテーブル」を設け、ボランティアメンバー同士で企画を共有・発表したり、ラーニングチームメンバーが壁打ち相手となって対話を重ねたりしながら、企画を推し進めていきました。こうしたプロセスを経て、会期終盤の2025年11月15日から29日までの約2週間にわたり、ボランティアメンバーが企画・運営を担う「ラーニング・ボランティア・ウィーク」を開催しました。期間中は、愛知芸術文化センター内のラーニングセンターへたちや、瀬戸市のまちなかに設けたラーニングセンターせとを拠点に、多様な自主企画が実施され、来場者が気軽に参加できる場が生まれました。ラーニング・ボランティアの活動は、芸術祭を「支える」役割を超え、学びと対話を通じて芸術祭を共につくる実践として展開されました。

### 視点を変えてパーシム・アル・シャーケルを鑑賞してみよう

パーシム・アル・シャーケルの作品を正面から見るだけでなく、寝転がるなどいろいろな視点で鑑賞したあと、参加者同士で感想をシェアしました。

## 瀬戸のカコとミライのあいまを探るワークショップ

国際芸術祭「あいち2025」のテーマ/コンセプトを輪読し、気になった言葉をカードに書いて正20面体に貼り可視化しました。その後、参加者の経験をもとに、過去と未来、公と私、薔薇と灰の「あいま」について意見交換を行いました。

## みてきたをシェア「みてきたカード」をつくらう

ラーニングセンターへたちで貸し出す「みたくなるカード」を使って鑑賞し、作品への気づきや考えを深めた後、感想を1枚にまとめた「みてきたカード」を制作しました。

## もっと楽しむ! 「みたくなるカード」

作品を鑑賞するためのヒントが書かれたカード「みたくなるカード」を、来場者が自由に使えるよう貸し出しを行いました。

## あいまを見つけるタナ散歩

「あいま」に着目し、愛知県陶磁美術館を建築の側面から、ボランティアメンバーのタナちゃんがみつけたさまざまな「あいま」を紹介するツアーを行いました。

## FARM2025「あいち2025」の作品を通して世界をcultivateする!!

作品を見て気になったことや感想を書き込み、糸で結ぶことで、作品同士のつながりを可視化し、畑に見立てた大きな世界地図を参加者とともに育てていきました。ワークショップ終了後には、そのプロセスも含めて展示を行いました。

## あなたの「あいち2025」を振り返りまとめるバインディング

芸術祭での思い出を振り返りながら、芸術祭のチラシや公演のパンフレット、資料、チケットなどをバインディング(製本)しました。

## 凸撃! インタビュー!! ひとこと!! ログ@あいち2025

来場者に芸術祭の印象や作品の感想などリアルな声を丁寧に聞き取り、1人につき1ページに書き留めました。3人で実施した本プログラムでは、三者三様の手書きのインタビューブックとしてまとめ、展示を行いました。

## 詩とあいち2025のあいまに

作品にまつわる詩を詠み、展示を行いました。あわせて、展示された詩を来場者が自由に持ち帰れる形で配布しました。また、会期中にはラーニング・ボランティア向けに詩のワークショップを実施し、参加者全員で一篇の詩を制作しました。

## こんにちは、ボランティアさん

「あいち2025」のボランティアとして活動している方々に、活動への思いやこれまでの経験についてインタビューを行い、記事にまとめ展示しました。

## 図書だより

ラーニング・ボランティアメンバーの有志により、ラーニングセンターへ

たちの「ライブラリー」を充実させるため「ライブラリーチーム」を結成しました。メンバーが選書と設置を行い、書籍を丁寧に紹介する『図書だより』を創刊し、会期中に発行・掲示しました。

## 名鉄瀬戸線のフリーペーパーをつくって乗ってる人に読んで欲しい(エピソード集めノートの設置)

「あいち2025」を通じて、名鉄瀬戸線(通称、せとでん)に乗る人に、魅力を伝えるフリーペーパー作成のためにエピソードを集めました。

## ラーニング・ボランティア向け

ラーニング・ボランティア・ウィークにおいて、日頃の活動を深める機会として、一部の企画をラーニング・ボランティア向けの内部プログラムとして実施しました。

## いろいろのあいま 灰と薔薇の「色」でひらく対話 A Color Experiment for Dialog

「灰と薔薇」のグラデーションを表す36色のカードを用い、色を通して感じた違いや重なりを共有しながら、参加者それぞれの感覚やイメージを言葉にしました。

## 芸術祭を「カレー」のようにかんがえ、ワークショップを実施するための企画からかんがえてみる

芸術祭を「カレー」に見立て、会場や作品をカレーの種類に喩え、意見交換しました。またそれらを企画者が、1冊のZINEにまとめました。

## ムルヤナで遊んじゃえ!!

海に住む生物の気分になってムルヤナ作品の周辺で過ごし、鑑賞後に感じたことや気づきをキーワードカードを使って共有し、まとめました。

## へたち deアートウルフ

展示作品を題材にしたワードウルフ形式のゲームを行いました。作品カードを引いて対話しながら、感じ方や見え方の違いを共有しました。

## 定点観測 PJ

会期の初めと終わりに作品を写真で記録し、時間の経過による変化を比較したレポートを作成しました。参加者と共有することで、作品の感想を相互に分ち合いました。

## 瀬戸と芸文をほめまろう! ~誰かに伝えたい、心に残るエピソードを教えてください

参加者に用紙を配布し、瀬戸市のまちなか会場から見た愛知芸術文化センター、愛知芸術文化センターから見た瀬戸市のまちなか会場のおすすめエピソードを書いてもらいました。会期中は来場者が閲覧できるよう、まとめて展示しました。

## 一緒にバラを編んでみませんか

編み物経験者のボランティアが中心に、「あいち2025」の感想を語りながら、薔薇を編む企画を実施しました。

## 手を動かして考える

浅野翔 ラーニングチームメンバー

「いいですね～!じゃあ小さく実験して、やってみましょう」  
ラーニング・ボランティア・ウィーク開催に向けた、2週に一度開かれる企画会議「考える大テーブル」で何度も繰り返されたこのフレーズ。私たちは紙とペンとハサミ（ラーニングセンターへたちは、なんでも手に入る!）を取り出し、切って貼って書いて、数人で即興の実験を始める。

頭の中では良いと思っていたアイデアも、実際に手を動かすと「不都合な部分」がぼろぼろとこぼれ落ちてくる。言葉にしなくても「うーん、ちょっとうまくいかなかったかな」という表情をしていたら、「この瞬間がおもしろかったです。何が気になりました?」「参加者にどんな思いを持って帰ってもらいたいですか?」などと声をかけてみる。「そこをもっと磨いて、次は内部向け（ボランティア同士）でやってみましょう」と次のステップを定め、「考える小テーブル」でコミュニケーターと話し合い、印刷したり、道具をさらにつくり込んだりする。真剣に楽しみ、悩み、作業するボランティアたちの姿は、会期中盤には「へたち」の当たり前の風景となり、来場者と作業する人々がゆるやかに共存する空間へとつながっていった。その熱気が少しずつ立ち上がっていくのを感じながら、私は思いを巡らせた。

しかし、手でつくるという行為はなぜこどもも他者に開かれているのだろうか。

ここには、近代的なテクノロジーが求める「効率」や「唯一の正解」とは違う時間が流れているからかもしれない。私が活動する有松で、ある職人さんが「手仕事だからこそ、熟練者でなくても参加できる余地がある」と話していたことを思い出す。危険な工作機械やブラックボックス化された電子機器ではなく、ハサミや紙といった原初的な道具は、私たちを「上手い・下手」のヒエラルキーから解放し、誰もが参加できる空気を生み出す。そこでは、失敗さえもひとつの手応えとして残る。

さらに、アイデアをモノとして定着させることは、作品としての「終わり」ではなく、次の創造への「誘い」でもある。ラーニング専門研修「あいま研」で、フール・アル・カシミ芸術監督のテーマ/コンセプトを扱った時もそうだった。3日間かけて読み書きした後、壁面に言葉を書きつけていくとき、私たちの思考は個人の頭脳だけで完結していなかった。ペンのインクの滲み、壁の質感、隣の人が書いた文字の勢いやかたち——そうした「人間以外のモノたち」もまた、私たちの次の思考を引き出していく。これはある種、人間がすべてをコントロールするのではなく、環境やモノと協力して状況を生み出す「灰と薔薇のあいまに」をまさに体現した瞬間と言えるかもしれな

い。詳細は辻さんと村上さんの対談に譲るが、瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」でも同様だろう。

哲学者のカレン・バラッド (Karen Barad) は、モノとヒトとが絡まり合い、その関係の中で初めて互いの意味が決まることを「イントラアクション (内部作用 /intra-action)」と呼んだ。私たちが版築で土を突き固めるとき、私が道具を使っているようである、実は土の硬さや道具の重さなどが「私」の思考を決定づけている。こうした「つくりながら考える」時間を言葉にしようとする、人とモノの関係を固定しない視点が必要になり、そしてそれは、日本の文脈でも腑に落ちる話だ。哲学者の和辻哲郎もまた、「風土」という概念を通して、人間と自然環境は別々の存在が混ざり合うのではなく、ひとつの現象として分かちがたく存在し、その「あいま」から私たちの思考も身体も形作られていくのだと論じているからだ。

そう思うと、芸術祭におけるラーニングの役割も、「手を動かして考える」ことも、少し違って見えてくる。ここは、単に美術の知識を教わったり、何かを上手に作ったりするための場所ではないのかもしれない。私たちが土を突き固め、紙の繊維に導かれるようにペンやハサミを動かすとき、そこに「人間が主、モノは従」という関係はない。あるのは、互いに影響し合い、形を変え合うパートナーのような関係だ。このテーブルの上では、私たちは全能な作り手であることをやめざるを得ない。異なる背景を持つ人たちが（あるいは人間以外のモノたちさえも）、互いを排除することなく、それぞれの弱さや「わからなさ」を抱えたまま共存できる体験を、私たちは手を動かすことで学んでいる気がする。国際芸術祭「あいち2025」のラーニングの現場で、私たちは未完成のまま手を動かし、まだ誰も見たことのない世界を、ここからつくり始めていたのだろう。

# 安心して楽しめる 環境を支える

ラーニングが目指した「安心」とは、ただ物理的な危険や不便を取り除くことではなく、迷ったり立ち止まったりしながらも、自分のペースで作品と出会い、誰かことばを交わし続けられる環境を整えることでした。ラーニングチームは、知識を教える立場ではなく「ともに学ぶ側」に立ち、誰もが自分のペースで芸術祭を楽しめる環境づくりに取り組んできました。

本特集「安心して楽しめる環境を支える」では、その実践を多層的に記録します。「あいち2025」プロジェクトマネージャー副田一穂によるエッセイ「ぬかるみのラーニング」では、学ぶ意欲や方法がわからない人も含め、誰にとっても開かれたプログラムを実現するための「下ごしらえ」の過程を綴っています。教育普及の豊富な経験を持つ水戸芸術館・森山純子さんを交えた座談会「安心して「学び」が動き出す場をつくる」では、現場で起きた葛藤や判断のプロセスを共有します。「ツアープログラム」の記録からは、対話型鑑賞と作品解説の2つのツアーを軸に、多様な来場者との鑑賞体験を紹介します。さらに、「会場運営サポート」では、79日間にわたり来場者を支えたボランティアの活動と、その基盤となった研修の取り組みを振り返ります。辻琢磨による「ラーニングセンターへたち/せと」の2拠点の整備では、休憩や交流、情報提供の場としてどのように構想されたかを記しています。「やさしい日本語チラシ」では、多様な人々へ情報を届けるためのデザインの工夫をラーニングチームメンバー野田智子が紹介します。

野田智子によるコラム「安心して楽しめる環境を支える」では、前身の「あいちトリエンナーレ2010」から続くボランティアの蓄積を手がかりに、「自分が楽しいと感じたことを他者と分け合う」という活動の原点を描いています。

## 学びの手前で

美術館で学芸員として長く働いてきたわたしにとって、ミュージアムにおける学びへのアプローチとは、展示されている作品になんらかの感興を覚えた鑑賞者に対して、その感興を支えている技術や文脈といった知識を、根拠を持って分かりやすく伝えることだった。「あいち2025」でも難解な用語を避けて読みやすい展示解説を心がけ、音声読み上げ機能を実装したり、アーティストが自作について語る機会を積極的に設けたりしたのは、社会教育法のもとに設置されたミュージアムとして、「文化的教養を高め得るような環境」を醸成し、「学習の機会の提供及びその奨励」を行う（いずれも法第三条）という、古典的な社会教育観に裏付けられた実践だ。だがその一方で、「あいち2025」のラーニングチームによる数々の取り組みを通じて、わたしはそのようなアプローチの手前の部分を強く意識するようになった。

象徴的だったのは、黒田菜月が主導したラーニングボランティアのためのプログラム「インタビューの練習」だ。一見したところ、成果物としての映像自体は参加アーティストやスタッフが作品や芸術祭への姿勢、取り組みなどを語る、ごくありふれたものに映る。けれども、そこで目指されていたのは鑑賞者に向けた知識の効果的な提供ではない。身近な家族や友人たちと真面目なテーマの話をしてみたいのに、茶化されるんじゃないか、場の空気が読めてないんじゃないか、と二の足を踏んでしまうボランティアスタッフとともに、インタビューのメソッドやtipsを開発すること、それこそがプログラムの目的だった。ボランティアの練習にアーティストを付き合わせるという、普段は自身もアーティストとして活動する黒田ならではの発想は、わたしにとっては衝撃的でした。

「インタビューの練習」の問題意識の核にあるのは、他人とコミュニケーションすることの困難さだ。作品の鑑賞もまた、情報の伝達という点でコミュニケーションのひとつのあり方だが、ある作品を見て、自分が持ち合わせている知識と新たに得た断片的な情報を練り合わせながら自分なりの解釈を作りあげていくというのは、多分そんなに簡単なことじゃない。そもそも誰もが何かを学びたいと思ってミュージアムに来ているわけではないし、ただなんとなく人に連れられて、あるいは日常から離れてぼんやりしたくてここにいる人たちには、能動的に学ぶための心構えも準備もない。「あいち2025」のラーニングチームは、膨大な数のミーティングと議論を重ねるなかで、「学ぶ」という行為が決して誰にとっても所与の透明な営みなのではなく、むしろぬかるんだ泥のなかを歩くようにとてつもなく難しいことなんだという、強い信

念を編み上げていった。

この信念は、ラーニングプログラムの全体にすみずみまで浸透している。どの芸術祭やミュージアムでも見られるレクチャー形式のイベントひとつとっても、知識の提供よりも参加者と手を動かしてともに考えることに思い切って重心を傾けるがゆえに、「ラーニング・ラーニング」、すなわち学ぶことを学ぶという迂遠な名を冠している。会期中のトークイベント（へたちトーク）もまた、作品解釈の直接的な手助けとなるような内容というよりは、この芸術祭のために集うさまざまな職能を持ったスタッフたちが現場で一体何をやっているのかという、内省と言語化に意識を向けている。ともすればそれは、限られた数のボランティアやスタッフだけが学びを享受する、クローズドなプログラムとも捉えられかねない。だが、パッと見は外に開かれたプログラムをつくるずっと手前の、そもそも何をどうしたら学ぶことができるのかという下ごしらえの部分に膨大な時間と熱量とを費やしたからこそ、結果的に「あいち2025」のラーニングプログラムは、学ぶつもりがない、学び方が分からない人も含めて誰にとっても開かれたものになった。

## ともに学ぶ

こうした姿勢は、教育分野に限らない多様なバックグラウンドを持ったメンバーによる混成チームが、それぞれの専門家としての職能を最大限に活かしつつも、ボランティアや鑑賞者に対して自らを教える側——何を伝えるべきかを分かっている、あるいは分かっているよう振る舞う立場——にではなく、徹底してともに学ぶ側に身をおこうとしたこととも繋がっている。このチームは参加アーティストとしてアサインされているわけではないため、自ら何かを表現したり発信したりすることはもちろん、芸術祭の作品と鑑賞者との橋渡し役になることさえも周到に避けて、驚くほど純粋に「ラーニング」であることに踏みとどまりつづけた。これまでも「あいち」で複数回ラーニングの経験を持つアートマネージャーの野田智子は、今回はチームのバックオフィス・マネジメントに徹し、愛知を中心に豊かな地縁を持つデザインリサーチャーの浅野翔は、チームやボランティア間のコミュニケーションの円滑化にその力を注いだ。展示室と商店を改装した二つのラーニング拠点「ラーニングセンターへたち」と「ラーニングセンターせと」の設計を担った建築家の辻琢磨は、それぞれのスペースにあった既設・既存の什器を、最小限のアタッチメントでボランティアや鑑賞者が活動するためのテーブルや椅子へと上書きし、大袈裟な什器を新たに持ち込むことも、既存の什器本来の用途——展示や教育普及、陶磁器の販売といった——から意味を発生させ

ることもしなかった。技術者集団のハイブ・アースとの協働による瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」でも、自らも版築の経験を持つアーティストの村上慧や辻は設計者の立場に身を置くことを避け、いったい誰がこのプロジェクトを主導しているのかというまどいに正面から最後まで根気強く向き合った。

会期も終了した今になって思えば、芸術祭の準備期間中にこのチームが提案するさまざまなアイデアと、冒頭に述べた古典的な社会教育観とのギャップに、わたしはプロジェクトマネージャーとしてずっと頭を悩ませていた。鑑賞の対象となる作品のプランは徐々に固まってきているのに、チームはその鑑賞を支える具体的なプログラム立案のずいぶん手前でずっと逡巡しているように見えたからだ。そのため、とりわけキュレーターの辻とは何度も（ときには激しく）議論を交わしたが、チームはその都度わたしの要求や提案に対して慎重に耳を傾け、取り入れられる部分は採用しながらも、決して中途半端に折れることなくそのスタンスを貫いた。そうして芸術祭が開幕し、ラーニングのそれぞれの活動が具体的なかたちを伴って見えてきたとき、ようやくわたしはそれまで点に見えていたプログラムが豊かな広がりを持っていたことに気づかされたのだった。

## 泥のなかで

参加者にもスタッフにも精神的な負荷をかけることを避けて、学ぶことへのハードルになっているものを取り除いていくチームの丁寧なプログラムの作り方には、会期終盤に実施したイベント〈国際芸術祭「あいち2025」のステートメントを知る・学ぶ・そしてこれから〉の感想シェア会においても、大いに助けられた。植民地主義や優生思想に苦しむ当事者としてのアーティストを交え、正面からこれらの問題に向き合ったうえで参加者が互いに率直な感想をシェアするこの試みは、ファシリテートするスタッフにとっても緊張感のあるものだった。不用意な発言で誰かを傷つけるんじゃないか？自分の振る舞いが気づかぬうちに差別を肯定してしまっているんじゃないか？言葉を発するのを躊躇してしまうようなこうした場面でも、誰もが安心してコミュニケーションできるよう、ラーニングチームはさまざまなワークショップの経験を持つアーティストのマユンキキにも助言を仰ぎながら、事前のアンケートや緊張をほぐすフィジエット・トイの用意、呼ばれたい名前を自分で決められるニックネームの表示、安心して発言できるようにするためのグルーピングの調整など、細やかな工夫を施した。何かを代表したり誰かの代弁をしたりすることなく、自分の気持ちや意見を語れる場づくりの難しさと面白さを、わたしもスタッフの

一人として学んだ。

表立っては見えないフラットなチームメイクや負荷のピークシフトなど、わたしがこれまで取りこぼしてきたもの、初めから難しいと諦めてきたものに対しても、「あいち2025」のラーニングチームは初めから全力で取り組んできた。こうして揺るがない足腰を築くからこそ、その上に誰もが安心して学べる場所を作ることができる。誰にとっても開かれた芸術祭を目指すなら、まず自分の足下から見直さなければならない。ぬかるんだ泥のなかを、ともにかき分けて進んでゆくために。

## 安心して「学び」が動き出す場をつくる

文・杉原環樹 [ライター・編集]



新設されたボランティアの活動区分「ラーニング」などを通じ、ボランティアが主体となって学びを行える環境づくりに取り組んだ、今回のラーニングチーム。人が自主的に動き始める場とはどのように生まれるのか？ そもそも、芸術祭や美術館にとってボランティアとはどのような存在なのか？ 今回はそんな問いを深めるため、美術館の教育普及事業の先駆者として知られる水戸芸術館の森山純子さんを訪ねました。長年、ボランティアや地域住民と協働し、人々の居場所となる「ライフラインとしての美術館」を耕してきた森山さんとの対話を通して、考えるヒントを探ります。

Photo：山野井咲里

ボランティアとは、芸術祭をつないでくれる存在

**辻** 今回、ボランティア活動に新設したボランティアの活動区分「ラーニング」では、50人のメンバーが3テーマに分かれて研修を行い、芸術祭の会期末に拠点の「へたち」で展示を行いました。

**野田** それぞれが自主企画を提案できる仕組みで、20個ほどの企画が実現。お互いに「手伝うよ」という声掛けが自然発生するなど、濃密な時間が流れていましたね。

**浅野** 森山さんには現場も見ていただきましたが、どんなことを感じられましたか？

**森山** 「あいち」のラーニング・プログラムの展示は前々回、前回と見ていますが、以前はやや成果展示的だったのが、今回は現場がすごく動いている様子が見えたのが印象的でした。モノがあるだけではなく、人やその関係性があちこちで動いていて、前回とはまた違う空気を感じました。「作る側・見せる側」と「見る側」は分かれがちですが、そこに市民の方々が「中間者」として入ることで、異なる領域が生まれていたのではないのでしょうか。

**野田** 嬉しいです。とくに村上慧さん担当の「鑑賞をふかぼる」のグループは、毎週末ブースでお客さんと感想をシェア

したり、延々と作品について話したり。こうしてボランティアさんが自主運営してお客さんと対話する光景は、過去のラーニング・プログラムにはないものでした。

**森山** 辻さんによる自由度が高い空間のしつらえ含め、自分たちの「場」を持てたことも大きいんでしょうね。広い意味での鑑賞が同時多発的に行われていて、お客さんも「そういう見方もあるのか」と気付けたり。それは作る側の刺激にもなりますよね。

私たちの美術館でもそうですが、ボランティアさんの方が美術スタッフより深く調べたり、作家ゆかりの地にわざわざ出かけたりする。そうやって、スタッフには手が出せない領域まで広がることで、展示が終わらずに日常に「延長」していく。それを実感されたんじゃないですか？

**黒田** すごく感じました。学芸員の方が「芸術祭はここで終わるけど」と言ったとき、あるボランティアさんが「私たちは終わると思っていない」と反発されたことがあって。芸術祭は3年に1度ですが、みなさんはその間もずっと自分なりの探求を続けている。

**森山** それぞれに次の3年を過ごし、経験したものをまた持ち寄る。企画は変わるけど、その人たちが地域にいて、経験がつながっていく。

**黒田** そうやって芸術祭をつないでくれているんですね。芸術祭に先立ちボランティアのヒアリング会を行ったんですが、そこでみなさんの思いを聞き、今回はボランティアの活動を信じて、この方たちが中心となる場をつくらうとトライした感覚があります。

**森山** 以前、主婦のボランティアさんが、「現代美術を見るようになって、無関係に思っていた世界のニュースと自分のつながりを感じるようになった」と言っていました。今回の「あいち」でも、一人ひとりにそうした変化が起きていたはず。その変化の背景には、みなさんのチームと、ボランティアの方々の信頼の積み重ねがあったんじゃないかしら。

**黒田** 安心して自分を表明できる場所というのは、そうした「変化」にとって重要ですよ。

**森山** 安心して何でも言える場所って子どもの頃からなかなかないですからね。「間違ってるかも」と前置きしないでいい、むしろそれが面白いと思える場所があるのは全然違う。それがあると、人の内からいろいろ湧き上がります。

**黒田** 浅野さんが担当した「あいま研」も議論がすごかった。

**浅野** 最初はボランティアという名のお客さん状態で、「何したらいいですか？」と答えを求めてくる人もいました。でも何度集まるうち、「話しながら考えることを楽しめばいいんだ」とモードが変わってきた。その後は毎回3時間くらい議論してましたね(笑)。

それぞれの居方、さまざまな参加の動機を受け入れる

**浅野** 子どもも大人も誰もが自由に語り、安心して変わることができる——「へたち」で目指したそうした瞬間に、水戸芸術館(以下、水戸芸)ではどのように出会っていますか？

**森山** 1990年の開館以来、地域の方々に現代美術の楽しみ方を伝えようというろんな企画を展開してきました。赤ちゃんとの美術館散歩、親子やシニア向けのワークショップ、視覚障がいのある方との鑑賞ツアー……などなど。1993年から続く「高校生ウィーク」は、最初は高校生のための企画でしたが、現在は幅広い年齢層が交流カフェを利用し、ワークショップや部活動を行う場になっています。

「親子」や「高校生」と冠して入り口は別々に作っていますが、「中身は混浴」と言っていて、インターンの高校生が幼稚園児

のツアーをサポートするなど、なるべく属性を交ぜるようにしています。さまざまな人がフラットでいられる場を作れるのが美術のいいところ。私たちは「番台」から見ている感覚で、基本は手は出しません。整理しすぎないなかで、有機的なつながりがポコポコ生まれるといいなと思っています。

**浅野** あくまで集まった人の「やりたい」に任せているんですね。

**森山** そうなんです。企画の素は来館者がもたらすことが多く、2003年に「高校生ウィーク」がカフェ化したのも、高校生たちが他校の子や学芸員と話す場が楽しいという意見からでした。知り合ったホームレスのおじさんを美術館に招いて、インタビューした高校生もいました。

**野田** カフェも、展覧会の途中の、人が迷い込んでしまうような場所にありますね。

**森山** それが大事で、お客さんがふらっと入ってきて、過ごせる場所でもあります。居方を自分で決められるのが大きな特徴です。3人集まれば部活動もできるので、ディープに活動する人もいれば、話すのが得意じゃないからスタッフとしてずっと掃除や本の整理をしている人もいる。役割があれば居づらくないものです。

**野田** 関わりしろがいっぱいあるんですね。

**森山** そうですね。無理に意見を言わなくてもいい。一見するとわかりませんが、不登校や引きこもり経験者、障害のある方もスタッフとして何となく一緒に居られます。

**浅野** 部活動にはどんなものがあるんですか？

**森山** 高校生発案で始まった「写真部」や、茨城大学から持ち込まれた「サステナ部」などさまざまです。アーティストの呉夏枝さんにボランティアさんが「うちに織り機が眠っている」と相談したことで始まった「織り部」のメンバーは、テキスタイル展の展示ボランティアも経験。みなさんの現場と同様、自然発生が多いです。

**黒田** ただ、それを続けているのがすごいです。

**森山** でも、無理はしないです。いつやめても、再開しても OK なんです。

**黒田** 部活動の発表などはどう判断していますか？ 「あい

ち2025」では最後に何かを発表するという一種の型があるけど、水戸芸ではそれを前提にしていなくても感じました。

**森山** 決まった型はありません。「写真部」「聞く。部」など、「高校生ウィーク」の時期にワークショップ+成果展示をする部活もあります。「ほんでたいわ部」は、ケアをテーマとした展覧会の際に会場で配る鑑賞ガイドを作るのが目的で集まったワークショップの参加者が作った部活ですが、今は一般の方も随時参加できる読書会活動をメインにしています。

**黒田** いいですね。今回、ボランティアさんの横断的な活動に手応えを感じました。ただ個人的には、もっとビジュアルアーツ部門との協働もできたらよかったなと思っていて。キュレーターの方から依頼があっても、あくまで「サポート」としての内容が多くなってしまうので……。その点、水戸では無理なく自然に主体的な活動が生まれているな、と。

**森山** イメージが大きいと思うんです。ボランティア=パッケージされた仕事=奉仕という先入観もまだまだある。「あいち」の関連トークでも、そんな発言がありましたよね。

**野田** ありました。質問で、「奉仕をしたいと思って入ったのに……」って。一方、その後にあるボランティアさんが私のところにやって来て、「私は一切、奉仕だと思ってない。自分を高めるためにやっているだけ。その面白さをお裾分けしているんだ」とおっしゃっていて。

**森山** その質問がすごく印象的でした。だからこそ、今回プロジェクト名にもされていましたが、「ラーニング・ラーニング（ラーニングについての学び）」が重要なんですよね。奉仕で参加するのもいいと思うんです。ボランティア観を統一する必要はないし、参加頻度も貢献度もみんな違っていい。ただ、認め合うことが大切ですよ。水戸芸のボランティアも以前からその議論をよくしていて、92年の発足後ほどなくして「マイブレッジャー（私の喜び）」というキーワードが出ていました。それぞれの喜びがある、その多様な在り方にお互いが気付くことが大事だと思います。

### 困り事をヒントにする。 人のなかに表現の種を見つける

**辻** 水戸芸の教育普及チームとボランティアの方はそれぞれ何人ぐらいでしょうか？

**森山** 担当は私を含めて2人です。ボランティアの方は週末にギャラリートークをする登録者が30人前後。ほかのプログラムや展覧会のボランティアもいて、多いときは総勢150人くらいです。

**辻** 先ほど無理しないというお話もありましたが、長く続けるうえで、息切れしないための工夫はありますか？ 今回のラーニングでも、なるべく運営の負荷を下げることを意識していました。

**森山** 唯一気をつけているのはボランティアのなかに派閥や上下関係を作らないことです。誰と誰が知り合いか線引きが分からないくらいの状態がいい。いつも手伝ってくれるけどボランティアではない人や、5年かけてゆっくり近づいてくる人なども含め、各々のキャラクターが見えていと安心です。

**野田** 5年かけて！

**森山** 関わりにはすごいグラデーションがあって、それぞれをなるべく尊重しています。

**辻** 水戸芸という確固たる場所があるから、そのような日常的な関わりしろが生まれるんですね。

**黒田** 他方で、今回のもうひとつの拠点である「せと」は、開かれた場所にあったこともあり、Wi-Fiを求める人がきたり、花火大会の休憩場所に使われていたりしていたのが印象的でした。

**森山** 場をひらくと、そうやって「使いこなす」人も出てきますよね。でも、「困り事」を見つめるのも運営側にはヒントになります。場の設定を工夫するきっかけになる。

**野田** ルールの見直しが図れますよね。

**辻** 「あいち」では問題が起きた際、最終的なジャッジは主催者である組織委員会や、その実務機関である事務局によって行われていました。そこでは公平性やリスクヘッジが重視されるので、学べたこともたくさんありましたが、悩ましく感じることも……。水戸芸は指定管理者によって運営されていますが、活動への理解はいかがですか？

**森山** 本当は問題があったときによりどころとなる「美術館はどんな場所であるべきか？」というベースになる話ができたらいいのですが、難しいところです。どうしても入場料収入や来場者数などの分かりやすい指針で判断されがちです。ここで話しているような「ゴニョゴニョ」が一番伝えにくいですよ。

**辻** でも、その「ゴニョゴニョ」こそがレガシーであり、文化の土台だとも思うんです。ボランティア活動の定性的な部分をもっと評価してもらえるようにしないと。

**森山** 「あいち」では毎回チームも新しくなりますからね。参加者の声を丁寧に聞いて価値化すること、県という大きな組織のなかで誰が方針を決めるのか、確認し続けることが重要ですね。

**浅野** もうひとつ、僕たちは異なる専門性を持つ5人のチームでやってきましたが、森山さんのような専門職の方がやられる場合とで、違いはあると思いますか？

**森山** あまり違いを感じません。美術館はいろんな市民の考えが集積され、シェアされる場所であってほしい。そのなかで私

の専門性はあくまでファシリテーター的なもので、どこに誰がいて何ができるか、何をしたいかをよく知っているだけなんです。水戸は近隣市町村に原子力研究所もあるので、ボランティアに理系の人もいて、その視点を聞くのも面白い。それで言えば、今回みなさんのようなそれぞれ専門性を持つ人がラーニングに関わることの面白さもあったのでは？

**浅野** 確かに。個人的には、とくに今回、ラーニングにアーティストである黒田さんと村上さんをアサインした辻さんの判断が面白かったなと思っています。

**黒田** 私にできるのは、ボランティアメンバーの言動に「表現」を見つけることかなと思っています。研修を通ることで、一人ひとりが自信を持って自分自身や社会と関わることを目指しました。芸術祭のなかにおける成果物よりも、目的はあくまで個人にとっての社会との新鮮な接続でした。

**野田** 実際に参加者はどんどん変わっていききましたよね。みんなベールがめくれて、素になっていった。「自分自身に気付くプロセスだった」と言っていた人もいました。

**森山** それは創造的ですね。芸術祭にはアート作品はあっても、生身のアーティストと出会う機会は少ない。アーティストが何気なく発する言葉や、共にいる時間は、ボランティアさんにとって貴重ですよ。

### アートを通じてフラットに集まり、 日常に還っていくこと

——今回のラーニングチームには、些細なことでもクリエイティブに面白がれる「良い空気」ができていますよね。森山さんも同様に、誰のどんなアイデアも受け入れる姿勢を持っている。この、何が起きても創造的に受け止める空気や関係性は、どのように作れると感じますか？

**森山** みなさん5人のトップダウンではない関係性が、ボランティアさんにも伝播したんだと思います。その関係を作るのは、やはり共にいる時間なのかなと。例えばボランティア活動で、最初は社会的地位や財産を話題にする人がいても、「ここではその比較は通用しない」「もっと大事なことがある」と気づくと、みんなで新しい価値を作り始める。そばにること。一緒にお茶を飲んだり、ただ共にいる時間の効能は大きいと思います。

**浅野** 時間の共有は大きいですよ。やはり、何回も深く対話した人は心の距離が違う。「なぜこれをやりたいのか」を問いかかけたり、「僕はこう思う」とフラットにやり取りできたことが重要だった。僕は普段、アウトプットではなく、リサーチというプロセスの専門家だと思っているので、それをみなさんと共有できたのが良かったのかなと思います。

**野田** たしかに5人がお互いを受け入れられたのが大きかったね。「あいち」では毎回ゼロからチームを作るけど、意見を言いつづらいトップダウンのチームがつくられがちだったように

思います。今回はみんながどんな仕事をしていて、どのくらいの懐を持っているのかを早い段階で探り合えた。私たちがまず信頼関係を築くプロセスを踏めたから、ボランティアさんとも歩み寄れたのかなと思う。

**森山** その姿勢や空気が、今後も継承されるといいですね。

**野田** そうですね。一つのやり方として。

**黒田** 私は普段けっこう気を使うタイプなのですが、このメンバーだとリミッターを外して剛速球を投げられるんです。村上さんと帰るときによく話すんですが、彼が何となく投げたボールを、私が全力で掴んで投げ返して戸惑わせていたようで（笑）。辻さんにもいろいろ突っ込んだけど、そういう私を認めてくれる空間だったのがありがたかったです。

**辻** 立場やステータスへの先入観をとりあえずなしにして、個と個でフラットに向き合えるかが、一個デカいのかなと。そして、何を言われても自分なりに受け身を取れること。

**浅野** 辻さんはサンドバッグ感が強い（笑）。グッと受け止めてくれる安心感がある。

**辻** ちゃんと食らうときは食らってるんすけどね（笑）。大事なのは、そのとき自分の弱みや専門分野の限界をさらけ出すことだと思うんです。僕なら建築が専門ですけど、建築やアートができることの限界値をお互いなんとなく把握しているからこそ、その外側から、例えばボランティアさんから違う意見が来ても「面白いね」と素直に言える。その感覚が5人のなかで共有できていたのかなって思います。

——森山さんのなかにも、確固たるアート観があると感じます。「アートにはこれができる」という信念があるからこそ、何が来ても引き受けられるのでは？

**森山** アートは、アーティストやキュレーターだけのものだけではなく、それぞれの人のなかに種があると思っています。さっきの「奉仕」の人のなかにも、小さい子のなかにも、表現のかたちは違って必ず、ある。

**野田** だから面白いし、そこを面白がれるか、ですよ。

**森山** まだ評価されていない価値を引き出して、共有していくのが私たちの役割だと思っています。芸術祭や美術館を通じて、アートが街にあることで、多様な人がフラットに集まり、対話し、また日常に戻っていく。そういう運動体の仕組みを支えるのが、ラーニングや教育普及だと思います。これは市民の力によるすごく民主的で自治的な活動、レッスンなんですよ。油断するとすぐに吹き飛ばされてしまう脆いものではありますが、多くの人が関わることで少しずつ、将来の社会が変わっていくと信じています。

（2025年12月17日、水戸芸術館にて収録。）



Photo: 岡松愛子

参加者同士で作品を前に気づいたことや感じたことを共有して鑑賞を深める「対話型鑑賞」や、作品制作に携わったスタッフによる「作品解説」など、さまざまな視点から作品を楽しむツアープログラムを行いました。

## 対話型鑑賞

専門の研修を受けたボランティアがツアーのガイド役となり、参加者同士が作品について感じた意見を交わしながら鑑賞し、ひとりでは気づかない視点に出会える「対話型鑑賞」の手法で味わうツアー。

### [実施プログラム]

対話型鑑賞ツアー

子ども向け対話型鑑賞ツアー

聞こえない・聞こえづらい方のための対話型鑑賞ツアー【筆談編】

見えない・見えづらい方のための対話型鑑賞ツアー

日本語以外が母語の方のための対話型鑑賞ツアー

## 作品解説

芸術祭の作品制作に携わったキュレーターやコーディネーターをはじめとしたスタッフとともに、作品をめぐるツアー。制作の背景や作品に込められた意図などを紹介し、作品への理解を深めました。

### [実施プログラム]

作品解説ツアー

作品解説ツアー【小さな子ども連れ向け】

作品解説ツアー【中高生向け】

作品解説ツアー【聞こえない・聞こえづらい方向け】

## 対話型鑑賞

### 対話型鑑賞ツアー

(各回60分程度、最大15名、予約不要)

※9月26日(金)から定期開催

— 金 18:30— (8階・10階ごとに実施)  
土日祝 10:30—、15:30— (8階・10階ごとに実施)  
愛知芸術文化センター / 1,037名

— 土日祝 10:30—  
愛知陶磁美術館 / 219名

— 土日祝 15:30—  
瀬戸市のまちなか / 194名



Photo(上・右): あい撮りカメラ部 竹内久生

### 聞こえない・聞こえづらい方のための対話型鑑賞ツアー【筆談編】

聴覚障がいのある方向けに筆談で案内する対話型鑑賞ツアー。ツアーは対話型鑑賞ツアーボランティアが組み立てた。(定員:15名、対象:聴覚障がいのある方)

— 11月8日(土)  
10:30—12:00 / 3名  
14:00—15:30 / 8名  
愛知芸術文化センター  
協力: NPO法人愛知県難聴・中途失聴者協会



Photo(上): あい撮りカメラ部 竹内久生  
Photo(下): あい撮りカメラ部 H.KUMAMOTO



Photo(上): あい撮りカメラ部 H.KUMAMOTO

### 見えない・見えづらい方のための対話型鑑賞ツアー

視覚障がいのある方向けにことばで案内する対話型鑑賞ツアー。ツアーは対話型鑑賞ツアーボランティアが組み立てた。(定員:15名、対象:視覚障がいのある方)

— 11月24日(月・振休)  
10:30—12:00 / 7名  
14:00—15:30 / 7名  
愛知芸術文化センター  
協力: 社会福祉法人名古屋ライトハウス 情報文化センター



Photo(上・下): 三浦知也

### 子ども向け対話型鑑賞ツアー

小学生とその保護者を対象として対話型鑑賞ツアーボランティアが行うツアー  
(定員:20名、対象:小学生とその保護者)

— 10月18日(土) 10:30—11:30 / 20名  
愛知芸術文化センター

— 11月23日(日・祝) 10:30—11:30 / 11名  
愛知陶磁美術館



Photo: あい撮りカメラ部 竹内久生

### 日本語以外が母語の方のための対話型鑑賞ツアー

日本語が母語ではない方向けに、研修を受けたボランティアが英語等で案内する対話型鑑賞ツアー(定員:15名、対象:日本語以外を母語とする方)

— 英語編  
10月19日(日) 14:00—15:00 / 3名  
愛知芸術文化センター

— やさしい日本語編  
11月16日(日) 10:30—11:30 / 4名  
瀬戸市のまちなか



Photo(上): あい撮りカメラ部 minachom  
Photo(下): 岡松愛子

# 作品解説

## 作品解説ツアー

(各回定員20名程度)

- 9月27日(土) 14:00-15:00 / 25名  
ガイド: 副田一穂(「あいち2025」プロジェクトマネージャー)  
愛知芸術文化センター
- 10月4日(土) 10:30-11:30 / 25名  
ガイド: 北澤ひろみ(「あいち2025」プロジェクトオフィサー)  
愛知芸術文化センター



- 10月5日(日) 13:30-14:30 / 25名  
ガイド: 入澤聖明(「あいち2025」キュレーター(現代美術))  
愛知県陶磁美術館
- 11月9日(日) 10:30-11:30 / 25名  
ガイド: 片岡麻美(「あいち2025」コーディネーター(現代美術))  
瀬戸市のまちなか



Photo: あい撮りカメラ部 ヨシダヒロシ

- 11月22日(土) 13:30-14:30 / 25名  
ガイド: 芹澤なみき(「あいち2025」プロジェクトマネージャー)、本多康紀(「あいち2025」コーディネーター(現代美術))  
瀬戸市のまちなか



Photo: あい撮りカメラ部 H.KUMAMOTO

## 作品解説ツアー

### 【小さな子ども連れ向け】

芸術祭のスタッフによる、ベビーカーや抱っこひもをご利用の方など、小さなお子さま連れの保護者も参加しやすい作品解説ツアー(定員: 5組程度、対象: 18か月までの子と保護者(概ね3歳までのお子さんまで参加可))

- 10月13日(月・祝) 10:30-11:30 / 4組10名  
ガイド: 飯田志保子(「あいち2025」学芸統括)  
愛知芸術文化センター
- 11月15日(土) 10:30-11:30 / 4組13名  
ガイド: 入澤聖明(「あいち2025」キュレーター(現代美術))  
愛知県陶磁美術館



## 作品解説ツアー

### 【中高生向け】

中学生・高校生向けの作品解説ツアー。作品の制作に関わったスタッフと一緒に作品をめぐり、制作の背景や作品に込められた思いを紹介。(定員: 20名程度、対象: 中学生・高校生)

- 10月13日(月・祝) 13:30-14:30 / 8名  
ガイド: 北澤ひろみ(「あいち2025」プロジェクトオフィサー、大野高輝(「あいち2025」コーディネーター(現代美術))  
愛知芸術文化センター
- 11月16日(日) 13:30-14:30 / 2名  
ガイド: 本多康紀(「あいち2025」コーディネーター(現代美術))  
瀬戸市のまちなか



Photo(下): 岡松愛子

## 作品解説ツアー【聞こえない・聞こえづらい方向け】

聴覚障がいのある方にも安心して参加いただけるよう、手話通訳付きの作品解説ツアーを実施。加えて、ボランティアによる筆談でのサポートも行った。(定員: 15名程度、対象: 聴覚障がいのある方)

- 10月25日(土) 13:30-15:00 / 5組7名  
ガイド: 鈴木一絵(「あいち2025」コーディネーター(現代美術))  
愛知芸術文化センター  
協力: NPO法人愛知県難聴・中途失聴者協会、あいち聴覚障害者センター



Photo: あい撮りカメラ部 H.KUMAMOTO

プログラム

ボランティアプログラム

## 会場運営サポート

3 安心して楽しめる環境を支える



ボランティア活動区分「会場運営サポート」(「あいち2022」では「会場運営」)は、内覧会を含め80日間、愛知芸術文化センター／愛知県陶磁美術館／瀬戸市のまちなかの各会場にて、会場運営のサポートを行いました。主な役割は、展示作品の看視、受付、会場案内・誘導の補助。展示作品の見守りや、来場者が会場を迷わず回れるよう、会場内外の導線や施設利用についての案内、迷いやすいポイントでの誘導、質問対応、ときには多言語や筆談などでの対応も行いました。また、作品解説ツアーやパフォーマンス・アーツ公演の受付や誘導の補助を担いました。活動前には全体研修を6月から8月末までに

計3回実施。第1回で開催概要と役割を共有し、以降はキュレーター等による作家・作品解説を通じて理解を深めるとともに、現場での来場者との接し方の心得やアクセシビリティ対応について学びました。会期中は日々の小さな気づきを共有し、誰もが安心して楽しめる鑑賞体験を支えました。(登録者数:1,099名)

[主な活動]

- 展示作品の看視
- 受付業務
- 会場案内・誘導の補助

Photo: 岡松愛子

拠点整備

## ラーニングセンターへたち

辻琢磨 キュレーター（ラーニング）

3 安心して楽しめる環境を支える



### 誰もが安心して芸術祭を楽しめる環境を支える拠点づくり

ラーニングセンターへたちの会場構成では、誰もが安心して訪れることのできるパブリックな休憩スペース、ボランティアの拠点、芸術祭についての情報に触れることができる環境、という3つの使い方を想定しソフト面を計画しました。ハード面は、愛知芸術文化センターに馴染むことを軸に、同センターに親しみのある什器を転用し、多様な居場所ができるようにラーニングチームで計画しました。案内ポップやライブラリー、ボランティア活動のための文房具などの細かな備品は、コミュニケーターとファシリテーター、アルバイトスタッフ、そしてラーニングボランティアの方々によって設えられ、運用に合わせて日々刻々と表情を変えました。特に会期終盤のラーニング・ボランティア・ウィークでは、ベンチや荷物置きとして使用されていた箱型什器を、展示台に再転用し、用途の変化に

柔軟に 대응する構成となりました。あらかじめすべてを想定していたわけではなく、シンプルなディテールだからこそ対応できた、とも言えます。展示室内にはラーニング専門研修の成果も展開し、「インタビューの練習」は映像作品を投影、「あいま研」は壁面全体にフル監督による「あいち2025」のテーマ/コンセプトを手書きで設え、「鑑賞」をふかぼる」は入口付近の大きな掲示板の裏に来場者の作品への感想を掲示する「ふかぼるボード」を設置しました。いずれも研修の成果であり、また同時に異なる角度から芸術祭の有り様を伝える展示でもあり、人の手や声を介した空気感がへたち全体の居心地の良さに寄与しています。情報掲示の背骨となるサインは、一角の壁面に大きく「ラーニングセンターへたち」を掲げ、3つのラーニング専門研修の展示を中心に場所の特性を整理しました。こうした丁寧な意図の積み重ねにより、誰もが安心して芸術祭を楽しめる環境を支える拠点を目指しました。

Photo(左)：2025年9月12日の様子(ToLoLoStudio) / Photo(右)：11月30日の様子

### 柔軟な什器の計画

愛知県美術館の備品である箱型の什器は、上に合板を載せるだけでテーブルやベンチに転用できるシンプルな構成です。元々の箱のサイズに合わせて天板の寸法と形状を決め、大きなテーブル、低いテーブル兼ベンチ、丸テーブルが配されています。ラーニング・ボランティア・ウィークでは、天板を立て、方杖を仕込んで固定し、仮設の展示壁としても活用しました。

### 美術館の「行灯」と「のぞき」

今回流用した展示什器の中でひととき重厚な存在感を放っていたのが、柱型のガラスケース「行灯」と、台形断面で覗き込むように展示品を見る「のぞき」（いずれも通称）です。1992年に開館した愛知県美術館の竣工当時の雰囲気を感じさせるこの二つの什器は、合板や手作業の痕跡が広がる展示室内の中で、空間の「重し」となることを期待して利用しました。

### 曲面を活かしたライブラリーコーナー

緩やかにカーブした壁面には、高さ400mm、奥行き600mmの連続したベンチ兼ローテーブルを設置し、主にライブラリーコーナーとして利用されました。この基礎には、愛知県美術館の備品の、本来は展示作品のための柵として使われる鉄塊（通称「境界石」）を転用しました。この境界石は地下2階の久保寛子さんの作品前では本来の用途で使用され、用途と場所を変えながら、芸術祭の会場内でモノ同士が緩やかに連携しました。

### 落ち着きがあり、リラックスできる空間

チームメンバーの黒田菜月によるラーニング専門研修の成果映像「芸術祭をつくる人々へのインタビュー」を主に鑑賞するスペース。隣には絨毯を敷いたリラックススペースも設け、その背後には「のぞき」を配してプライベートで囲まれた雰囲気をつくっています。また、このエリアを含む展示室の半分は照明の明るさを落とし、落ち着ける環境となるよう照明計画も繊細に行いました。



Photo：ToLoLoStudio



Photo：ToLoLoStudio

拠点整備

## ラーニングセンターせと

辻琢磨 キュレーター（ラーニング）

3 安心して楽しめる環境を支える



### 瀬戸のまちなかの玄関として

ラーニングセンターせとは、空き店舗であった旧小川陶器店を利用して整備しました。起点となったのは、開幕から一年前に開催された「2024年度 地域展開事業『底に触れる 現代美術 in 瀬戸』」（以下 地域展開事業）のボランティア活動「ボランティアと深める」（運営：アートプログラムユニット・フジマツ）の拠点にもなった「交流センター」に遡ります。建物所有者のご厚意により、会期後も交流センターの会場構成を残置させてもらえることになり、会場構成の設計業務負担を調整する意図も重なり、「あいち2025」では「交流センター」から「ラーニングセンター」へとマイナーチェンジを行いました。主な変更は、パブリックな休憩スペースとボランティア活動の拠点からなるラーニングセンター機能に加え、芸術祭のインフォメーションセンター機能（バックヤード、ショップスペース）が同居するため、入口付近のサイン計画と連動して什

Photo：2025年9月16日のラーニングセンターせと(城戸保)

器を再構成しました。柿色が特徴的な逆T字断面の陳列棚の棚板を取り外し、背もたれと座面用にスタイロフォームを敷いてベンチとして転用しました。ベンチ什器の間には新たなテーブルを配置し、全体としてファミレスのようなボックス席と、川沿いを眺められるカウンター席を設えました。ここでは飲食も可能で、席には電源とフリーWi-Fiを備え、来場者が気軽に滞在できる場を目指しました。外周のガラス面には芸術祭のメインビジュアルが貼られ、什器の背もたれを利用したサインが来場者を迎え入れます。陶器店時代の柔らかな雰囲気を残しつつ、芸術祭の瀬戸会場の玄関ともいえる豊かな立地を活かして、誰もが安心して芸術祭を楽しめる環境を支える瀬戸の拠点を目指しました。

### ファミレス席のような設え

チームメンバーの黒田菜月によるラーニング専門研修の成果映像「芸術祭をつくる人々へのインタビュー」を主に鑑賞するスペース。隣には絨毯を敷いたリラックススペースも設け、その背後には「のぞき」を配してプライベートで囲まれた雰囲気をつくっています。また、このエリアを含む展示室の半分は照明の明るさを落とし、落ち着ける環境となるよう照明計画も繊細に行いました。

### 拠点の特色を出す仕掛けと丁寧なサイン計画

ラーニングセンター機能と併存するインフォメーションセンターのために、ショップスペースを設けました。柱にはチケットカウンターやインフォメーションのためのサインも用意しています。またカウンターに置かれた「ふかぼるテレフォン」はチームメンバーの村上慧が発案した遠隔議論ツールで、2つのラーニングセンター、せとへたちをつなぎました。

### ローカルな話題からグローバルな視点まで

テーブルに広げられた大きな瀬戸の地図とライブラリーコーナーは、前年度の地域展開事業から継続して設置しました。地図はボランティアや来場者の手で日々更新され、ライブラリーでは芸術祭関連書籍を閲覧できます。瀬戸のローカルなまちなかの話題から国際芸術祭としてのグローバルな視点まで、来場者が多様な情報に気軽にアクセスできる場を整備しました。

### 居場所をつくる小さな仕掛け

瀬戸川沿いのカウンター席には、ファミレス席同様に電源コンセントを設け、ちょっとした作業や打ち合わせのような利用も想定しました。既存什器のベンチの座面が少し高いため、新設テーブルの足元にステップを追加し、垂木材と合板で簡素に組み立てています。合板とスタイロフォームの小口には、柿色の映えるスカイブルーを差し色として施しました。



Photo：城戸保



Photo：城戸保



Photo：城戸保







Photo: 三浦知也

## 4

# 誰かの体験に参加する

芸術祭の体験は、作品の前に立った瞬間に完結するものではありません。誰かの問いかけに耳を澄まし、別の見方を受け取り、自分の言葉を返してみる——それがラーニングが実践してきた「誰かの体験に参加する」ということなのかもしれません。

本特集「誰かの体験に参加する」では、対話を通じて鑑賞を深めるさまざまな実践を記録しています。対話型鑑賞ツアーを監修する会田大也によるエッセイ「対話の紡がれる地、あいち」は、2019年から蓄積されてきた対話型鑑賞の実践が地域に根づき、ガイド役のボランティアの学びと質を深めてきた歩みを描きます。「対話型鑑賞ツアー」では、問いかけと言い換えの技術を駆使しながら、鑑賞者同士の対話から世界の多様さを分かち合うための取り組みを紹介します。会田とともに監修した大場美葵によるコラムでは、研修やツアーを提供するなかで得た気づきが語られています。学校向け団体鑑賞やアーティスト派遣は、子どもたちが現代アートに触れ、感性や創造性を育てる入口を開きました。さらに、ラーニングチームメンバー村上慧によるラーニング専門研修「鑑賞」をふかぼる」は、さまざまな活動の実施記録とともに、来場者との対話から思いがけない発見が生まれた過程を振り返ります。プログラム「炎を囲む三日三晩」では、瀬戸の土や詩を通じて、参加者が共に手を動かし、声を交わした特別な時間を紹介しています。「ラーニング・ラーニング」では、専門家を招いたトークとディスカッションを組み合わせ、参加者と共に「考える」ための時間をつくった全8回のプログラムを記録しています。

村上慧によるコラム「アートというテーブルに集まる」では、年齢や価値観の異なる人々がアート作品という共通の話題を囲むことで、他者の問題を自分の問題として引き受ける練習になるという、活動を通じた実感を綴っています。

## 対話の紡がれる地、あいち

会田大也 ミュージアム・エドゥケーター／国際芸術祭「あいち2025」対話型鑑賞ツアーボランティア監修

私は、国際芸術祭「あいち」の前身である「あいちトリエンナーレ2019」および国際芸術祭「あいち2022」において、ラーニングのキュレーターとして関わり、ボランティア育成、とりわけ対話型鑑賞を用いたガイドツアーの導入と研修に携わってきた。

国際芸術祭「あいち2025」は、9月13日から11月30日までの79日間にわたり、「灰と薔薇のあいまに」というテーマのもとで開催された。芸術監督のフル・アル・カシミのもと、世界22の国と地域から62組のアーティストが参加し、愛知芸術文化センター、愛知県陶磁美術館、瀬戸市のまちなかを会場に、現代美術展、パフォーミングアーツ、そしてラーニング・プログラムが展開された。このテーマは、破壊と再生、戦争と記憶、自然と人間の関係といった重層的な問いを投げかけるものであった。

2025年の芸術祭では、辻琢磨氏がラーニングのキュレーターを務める体制のもと、私は対話型鑑賞ツアーボランティアの研修講師および監修として関与する立場となった。ボランティアとしては、ラーニング・プログラムを企画運営するボランティア、会場運営サポートとして展示会場などの看視業務にあたるボランティアと、私が担当する「対話型鑑賞ツアー」のガイドを務めるボランティアが存在し、全体で1,000名以上の登録者規模を誇る。

対話型鑑賞ツアーは、1980年代後半よりニューヨーク近代美術館（MoMA）で開発されたVTC（Visual Thinking Curriculum）／VTS（Visual Thinking Strategies）という鑑賞手法を基盤とし、京都芸術大学のACOP（Art COmmunication Project）というガイド養成のプログラムなども参照しながら、研修プログラムを実施した。作品に関する知識をガイドから鑑賞者へと一方的に伝えるのではなく、鑑賞者自身が作品を見て感じたこと、思いついた言葉を尊重し、それらを手がかりに対話を重ねながら作品理解を深めていく形式である。

ガイドは事前に作品や作家の情報を調べるが、そうした情報を提示する存在ではない。参加者同士の異なる意見や解釈を受け止め、ときに対立する考えが現れた場合にも、それを排除するのではなく、「どのような観点の違いがあるのか」「他に考えられる視点はないか」と問いを投げかけながら、議論の抽象度や論点を整理していく役割を担う。この進行には、即興性と同時に高度なファシリテーション技術が求められ、実際十分なトレーニングなしに担うことは難しい。

今回の対話型鑑賞ツアーボランティアは、会期中、主に週末に実施されるツアー回数の上限という運営上の制約から、やむを得ず定員を設け選抜制を採用した。可能であれば全員を受け入れたいという思いはあったが、人数を増やしすぎればボランティア一人あたりの実践機会が極端に少なくなってしまうというジレンマがあったためだ。選抜試験では、基本的な美術

史の知識を問う試験と、今回の芸術祭に招聘される作家の過去作品の図像を用い、実際にガイドをロールプレイする試験を採用した。

選抜試験を通して、私は受験者のガイドの質が2022年と比べて明らかに向上していることを知ることになった。背景を探ると、名古屋市美術館、豊田市美術館、岐阜県美術館などで対話型鑑賞を取り入れたボランティア活動が継続的に行われてきたこと。さらに「鑑賞ゲリラ」という任意団体の活動や、地元の企業の中で部活動として対話型鑑賞の経験を積み重ねてきたという話を聞いた。つまり、今回の芸術祭の研修以前から、対話型鑑賞の実践経験を積んだ人々が、この土地にすでに厚く存在することがわかったのだ。

この地域的な蓄積は、2019年に対話型鑑賞ツアーのガイドを初めて導入した当時には想像し得なかったものである。それがさまざまな実践を通じて、着実に層として厚みを増してきたことを今回あらためて実感した。対話型鑑賞を芸術祭の文脈に結びつけようとした初期の試みは、2019年当時の私自身の意図も確かに含まれている。しかし、現在見えている状況は、個人の影響だけで説明できるものではない。2019年の研修に参加した人々、その後の各美術館での取り組みや任意団体による自主的な実践が、時間差で呼応し合い、大きなうねりとして立ち上がってきたものだと言えるだろう。

トリエンナーレ／芸術祭だけがこうした状況をもたらしたと言い切るのは、単純すぎる認識だろう。一方で、芸術祭という場がさまざまな立場の人が交差し、接続されるための土壌として機能した可能性は確かにある。また、私自身は各回ごとの契約という立場で芸術祭に関わってきたが、結果として2019、2022、2025と三度にわたりこの芸術祭に携わることができ、対話型鑑賞という形式を継続的に実施してきたことの影響は多少なりともあるだろう。

ここで、ボランティア活動終了後のアンケートの中から、ガイド担当者自身が「印象に残った」と記述した、ツアー参加者のコメントを紹介してみたい。

・「一人ではつまらないと思っていた作品に、こんな魅力があると気づきました。ありがとう。」ツアー終了後、参加者がそう言って握手を求めてきた場面が、強く印象に残りました。

・無愛想で発言の少なかった参加者が、同じガイドツアーに何度も参加するうちに、少しずつ表情がかわらざ、笑顔を見せるようになった。

・子どもが率直に語った感想に対して、大人の参加者が真剣に耳を傾け、自分の見方を問い直していた場面が印象的でした。

・「正解を言わなくていいのが楽しかった」「自分の言葉で話していいたと思えた」という声があった。これは、対話型鑑賞ならではの安心感を象徴しているように感じました。

・ツアー終了後に、「同じ作品でも、別の人とまた参加してみたい」「家に帰ってからも考え続けそうだ」と語っていた参加者の言葉から、鑑賞体験がその場限りのものにとどまっていないことが想像でき嬉しかった。

これらのコメントからは、対話型鑑賞ツアーの中で、参加者の感想を同じような方向へ誘導したというより、作品を鑑賞しながら多様な立場や経験の差などを尊重しあい、作品に対する解釈を共有・交換した様子が見える。

アンケートの中には、ボランティア参加前後で対話型鑑賞のイメージの変化を問う質問や、ガイドに際して感じた不安とその対処についての質問も含まれた。その回答からは対話型鑑賞ツアーが参加者に与えた影響を多角的に読み取ることがができる。自由記述の内容を見ていくと、ボランティア経験の多寡によって、語られる内容の性質が異なっていることがわかった。

芸術祭や鑑賞活動への参加経験が比較的浅いボランティアは、個別の鑑賞者とのやり取りや、自身の感情の変化を丁寧に記述する傾向があり、「対話を通じて作品との距離が縮まった」「鑑賞への構えが変わった」といった体験が具体的に語られていた。一方で、複数回の芸術祭を経験してきたボランティアは、対話の進行や場の空気、鑑賞者同士の関係性といったメタ的・構造的な面に言及する傾向が見られ、端的に実践の要点を捉えた記述が多かった。

また、ガイドを担うにあたって感じていた不安とその対処に関する記述からは、対話型鑑賞の研修と実践が、単なるスキル習得にとどまらず、「正解を示さなくてもよい」「場を参加者とともに作っていく」という態度の形成に寄与していることがうかがえる。不安は経験の有無にかかわらず存在していたが、それをどのように引き受け、向き合うかという姿勢は、実践を重ねる中で変化していった。

これらの結果から、対話型鑑賞ツアーは、経験値の異なるボランティアがそれぞれの立場から意味を見出し、異なる質の学びを得られる実践であったと言える。経験の差異が上下関係を生むのではなく、多様な視点として場に還元されていた点は、今回の活動の特徴である。

アート鑑賞に際して、知識を与えられなくても、目の前の作品と向き合えば、または視点を共有しながら他者と話すことで、アートを十分に楽しめるという経験が、ボランティアを介して地域の鑑賞者へと広がっていることは、確かな意義があると感じている。

「美術は難解だ」という暗黙の共通理解は依然として根強く、

現在の美術館や芸術祭を取り巻く環境では話題性を優先されがちである。その結果、SNSに映えるような派手さや、作家や作品の知名度が重視され、逆に若手作家の発表機会や、人間の内面の暗部や深刻さに向き合うタイプの、シリアスな作品が紹介されにくくなる状況も生まれかねない。さまざまな芸術作品には、それぞれ作家が向き合ってきた切実なテーマがあり、人間の内面の奥深さや、社会状況への眼差しといったコンセプトの多様性も魅力の一部である。しかし、来場者数を重視した評価指標が強すぎると、観客数獲得のための方策として、選択される作品にバイアスがかかってしまうことも起こり得るのだ。

こうした中で、対話型鑑賞は特に今回のテーマ「灰と薔薇のあいまに」と親和性が高かった。破壊の「灰」から希望の「薔薇」が生まれる過程を、参加者自身が自らの言葉を発し、傾聴する対話を通じて想像し、感じ取る——それは、芸術祭が目指した多様な視点の交差そのものであった。

対話型鑑賞は、目の前の作品に見える要素を丁寧に掘り下げることで、鑑賞者自身の力で作品世界に入り込む道筋を拓く。「対話型が万能」とは言わないまでも、かなり幅広いテーマの作品に対して有効なアプローチでもあり、「美術は難しい」という感覚に対する具体的な処方になり得ると考えている。

芸術祭が終了した後も、対話型鑑賞ツアーボランティアの人々はこの地域で暮らし、鑑賞を続けていく。たとえ将来の芸術祭で対話型鑑賞ツアーが公式に実施されなかったとしても、これまで活躍してきたボランティア経験者の皆さんが、各々の立場で独自の活動を展開し、対話を紡いでいくことで、芸術祭を基盤として多種多様な鑑賞実践が展開されていく可能性は十分にある。

ラーニング・プログラム全体としても、「誰もが安心して楽しめる環境づくり」を目指した今回の取り組みは、ボランティアの活動を通じて多くの来場者に届いた。来場者数50万人超という成果の裏側に、こうした地道なボランティアの皆さんによる鑑賞体験支援があったことを忘れてはならない。さまざまな事業や取り組みを通じて、愛知の地から豊かな美術鑑賞の輪が波紋のように広がっていくことを、私は大いに期待している。

# 対話型鑑賞ツアー



対話型鑑賞ツアーは、会田大也と大場美葵の監修のもと、59名のボランティアとともに実施しました。「あいちトリエンナーレ2019」で初導入され、「あいち2022」を経て今回で3回目の実施となる本プログラムは、ガイド経験者から初めてチャレンジする人まで、そしてさまざまなバックグラウンドを持つ人々が集いました。

対話型鑑賞とは、作品鑑賞の一つの手法です。「作者の意図を当てる」ことではなく、作品を通じて「感じたことや疑問」を言葉にし、他者と共有すること。他者の意見を聞いて作品の見え方が変わること。ひとりでは気づけなかった視点に出会うことが、その醍醐味です。

会期中は愛知芸術文化センター、愛知県陶磁美術館、瀬戸市のまちなかで定期開催しました。2名のボランティアが1組となり、約60分のツアーを行い、「何が見えますか?」「どこか

らそう思いますか?」という問いかけを通じて、参加者と「みる・考える・話す・聴く」を繰り返します。ボランティアは作品を解説するのではなく、鑑賞者の反応や表情を観察し、一人ひとりの解釈に向き合います。ある作品の前で「希望を感じる」と語る人がいれば、「むしろ寂しさを感じる」と応じる人もいました。自分と異なる意見に出会っても、対立や議論に持ち込むのではなく、相反する二つの視点が存在すること自体を共に考えます。対人ではぶつかりがちな意見の相違も、作品を介することで「相手はなぜそう感じたのか」を想像することができます。

作品鑑賞を通じて、個人の違いや、自分の住んでいる国から遠い国や地域の文化、情勢やアイデンティティに触れることは、自分たちの生活や振る舞いを振り返ることにもつながりました。

## 対話型鑑賞ツアー専門研修

専門研修は、会田大也によるレクチャーと、グループごとのロールプレイの二部構成で行いました。5人1組になり、15分のガイドとフィードバックを全員が担当します。「やってみて難しかったポイント」や、ツアー参加者役としての感想を共有し合い、経験のある人もない人も一緒になって、みんなでやり方を考えていく時間になりました。「研修＝講義を聞く」という形にせず、どんどん実践する時間を増やしたのは、初めて対話型鑑賞に触れる方が多かったからです。レクチャーを聞くだけではイメージしづらい部分も、実際に動いてみることで少しずつ感覚を掴んでもらえたのではないかと思います。

## 練習会

専門研修の翌日には、希望者による自主練習会を行いました。研修内のロールプレイは時間の都合上、一人一回に限られてしまうため、「もっと回数を重ねたい」という声に応える形で設けた場です。また、身内同士で練習を続けていると、つい共通言語に頼ってしまい、新鮮な視点を忘れがちになります。そこで今回は、「あいち2025」のボランティア全体に声をかけ、ツアー参加者役として協力してもらいました。過去の芸術祭での経験者や、近隣の美術館で活動されている方も参加してください、「どうすればより良い鑑賞体験をお届けできるか」を、ボランティアの活動区分の枠をこえて考える貴重な時間となりました。



## 茶話会 (フォローアップ)

芸術祭が開幕した会期中には、フォローアップを目的とした「茶話会」を開催しました。研修という形ではありませんが、実際に対話型鑑賞ツアーを行っての感想や悩みを、ボランティア同士で語り合う時間です。ツアーが始まると、どうしても同じペア以外とは顔を合わせる機会が少なくなってしまいます。そのため、リラックスしてお菓子やお茶を楽しみながら、ボランティア同士のコミュニケーションが深まる場になりたいと考えました。連絡ツール上で悩みや疑問についても、直接みんなで話すことで、解決のヒントを見つける機会となりました。



	開催日	時間	場所
専門研修①	7月26日(土)	11:00-16:30	愛知県図書館(大会議室)
練習会①	7月27日(日)	13:00-16:00	愛知県図書館(大会議室)
専門研修②	8月9日(土)	11:00-16:30	愛知県図書館(大会議室)
練習会②	8月10日(日)	13:00-16:00	愛知県図書館(大会議室)
専門研修③	9月6日(土)	11:00-16:30	愛知県図書館(大会議室)
練習会③	9月7日(日)	13:00-16:00	愛知県図書館(大会議室)
下見研修(愛知芸術文化センター)	9月20日(土)	14:00-17:00	愛知芸術文化センター(アートスペースA)
下見研修(愛知県陶磁美術館)	9月21日(日)	10:00-12:30	愛知県陶磁美術館(会議室)
下見研修(瀬戸市のまちなか)	9月21日(日)	14:00-16:00	パルティセと(マルチメディアールーム)
専門研修④ 実践をふまえた質疑応答会	9月28日(日)	14:00-16:30	愛知芸術文化センター(アートスペースEF)



## 会期のあいだ、そして終わってから

対話型鑑賞ツアーボランティアへ会期終了後にアンケートを行いました。  
ツアーのなかでボランティア自身が考えていたことや、  
参加者から受け取った感想などの声を集めています。

- アートに限らず何を見ても「どういう印象があるか」「そこからどう思うか」と考える癖がついてしまい、日常生活でも対話型鑑賞の視点から離れられなくなりました。
- 国際芸術祭のあらゆる面で豊かな作品を対話型鑑賞したファシリテーター人材に活躍の場がほしいと以前より強く思っている。
- 長く対話型鑑賞のやり方がつかめずに悩んできましたが、今は少しわかったような気がしています。根底に参加者への信頼、作品、作者があることが重要だと感じました。
- やはり上手く対話ができるか、一方的な発言にならないか心配しましたが、お客様を信じて、絶対面白い、興味深い意見を言ってくれると確信して臨みました。
- 対話型鑑賞に参加した経験がないまま、いきなりファシリテーターをするボランティアに応募してしまったので、数回の研修だけでお客様の前に立っていいのか不安でした。  
他のボランティアさんのツアーに何度か参加して、進め方の形は何となくつかめたものの、自分のツアーは「楽しい」だけで終わってしまった気がしています。実際にお客さんに「楽しかった」と言っていただけですが、作品をどの方向へ導いていけばよかったのか、最後まで自分の中で明確な答えが見つかりませんでした。「誘導してはいけない」という意識が強く、話が無難で浅いところで終わってしまい、まとめの場面でも何を伝えればよいのか分からず、結果的に楽しくお話しただけの時間になってしまった気がします。
- ただの美術鑑賞の方法という認識から、美術を通して「本当の対話をする練習」という認識に変わりました。  
というのも、美術を私がとても狭い範囲で捉えていた、という気づきがあったのがキッカケです。対話から作品鑑賞が進んでいきますが、鑑賞している作品のみならず、この対話自体も美術であり、その対話は他の物事にも応用されていきます。つまり、対話が美術の幅を広げ、いろいろな人を取り込み、循環させているという認識になったということです。
- 芸文10階、パーシム・アル・シャーケルの鑑賞において、イラク出身という情報から話を展開させていた際、「絶望と同時に希望も見える」という意見が出てきました。そこから希望や復興についての意見が多く聞かれるようになったのですが、別の方が「やっぱり自分はどうしてもそうは捉えられない。作家は希望を含めて描いているかもしれないが、戦争という行為を無視して勝手にそう捉えても良いのか」という感情から生まれた自身の葛藤を見せてくださいました。会話の流れが一つの方向にまとまりかけたとき、こういう意見が出てきたことが、対話の本当の形だと思いました。他の方の意見を責めているわけではない、でも自分の思考を顧みて、この折り合いのつかない気持ちはどうしようかと作品を見ながら思考しているようで、その姿がとても印象的でした。
- うちの母は、美術館と一緒にいく友達がいないとぼやいていたので、友達を探しに行こうと説得し今回会場運営サポートボランティアに申し込みました。初めはいいや、研修や私がガイドを担当する対話型鑑賞ツアーに来ただけですが、そのうちに、行けば誰かがいることを認識し1人で出かけるようになりました。
- エレベーターから出てきた若い女性2人にいきなり「今日も意見交換会（対話型鑑賞ツアーのこと）ありますか？」と聞かれた。前回参加したのが楽しかったようで、そんな気軽なイメージで世間に広まっていくのもアリだと思う。

コラム

## 対話の場を、共に紡いでいく

4 誰かの体験に参加する

大場美葵 国際芸術祭「あいち2025」対話型鑑賞ツアーボランティア監修

このテキストは国際芸術祭「あいち2025」で対話型鑑賞ボランティアに参加してくれた方や対話型鑑賞へ関心を持ってくれた方、次回の芸術祭で対話型鑑賞ボランティアへの参加を考えている方に向けて書きました。全てを書き切ることはできなかったのですが、今回の芸術祭で感じたことを伝えたいと思います。

「対話型鑑賞ツアーボランティア募集」と書かれたチラシを見ても、どのような活動か想像しきれない部分もあると思います。なので、少しでも活動の実態を知っていただけると嬉しいです。

対話型鑑賞をはじめたのは、「あいちトリエンナーレ2019」からです。そこから6年が経ち、愛知において対話型鑑賞の場が広がっていることや、鑑賞自体の深まり方に今回衝撃を受けました。同時に、対話型鑑賞の場が愛知でもっと広がればいいなとも思います。

さらに言えば、対話型鑑賞の場だけでなく、美術館で作品を鑑賞しながらお話ししている人が増えたり、キャプションだけでなく、作品をじっくりみて、じっくり考えて、じっくり話す鑑賞方法が増えていくといいなと願っています。

### 選考について

対話型鑑賞ボランティアは、毎回「選考」という形を取っています。そのファシリテーションを評価することが本当にできるのだろうか、と考えることもあります。できることなら「対話型鑑賞」に関心を持ってくれる方達全員と話したり、一緒に考えたりしたいと思っています。しかし、スタッフが関わる人数や、実施できるツアーの回数を考慮し、今回も定員を設ける形となりました。一次選考では、基本的な美術史の知識を問うオンライン試験を実施しました。二次選考では、対話型鑑賞のロールプレイをおこない、合否を判断しました。二次選考では、前回参加された方も多くいらっしゃいました。そこで強く感じたのは、この3年間、みなさんが対話型鑑賞を続けているということです。「久しぶりにやった」という感じではなく、日々積み重ねてきたものがみえました。

### 研修での出来事

「あいち2022」で実施した対話型鑑賞の研修（前回は対話型鑑賞ボランティアでない方も参加できる研修）に毎回参加してくれていた方と再会しました。「今年も参加できる研修はありますか？」と声をかけてくれたのですが、今回は日程の都合上、対話型鑑賞ツアーボランティアのみを対象とした研修となりました。

会田さんと相談し、練習会の日に、ツアー参加者役として参加してくれる方を募集し、実施することになりました。結果と

して、対話型鑑賞を初めて知った方や、すでに実践している方が参加してくださり、ボランティアのみなさんと一緒に「こうするといいかも」「参加してみようと思った」と話し合う時間が生まれていたように思います。

### さまざまな場所から集まること

対話型鑑賞ツアーボランティアのみなさんの中には、さまざまな場所で対話型鑑賞を実践されている方がいます。日々研修や自主的な実践を重ねているみなさんが、芸術祭のために集まってくださいました。この時期だけは、芸術祭を優先してくれる方もいました。対話型鑑賞ツアーボランティア、対話型鑑賞を取り入れている美術館のみなさんが守ってくれた土壌があったからこそ、79日間という短い期間の中でさまざまな鑑賞体験が生まれました。芸術祭自体は瞬く間にその場が閉じてしまいます。みなさんはまたそれぞれの活動の場へと戻ってきます。しかし、対話型鑑賞の場は途切れることなく紡がれていくことを実感しました。

### これから

国際芸術祭「あいち2022」から、会田さんは対話型鑑賞ツアーボランティアの活動は途切れることなく、継続していきたくと話していました。そして、継続して活動できる場をつくることも、わたしたちの仕事なのではないかと考えていました。しかし、芸術祭が閉幕して終わりではなく、これからどのように続けていくのかについて話しているみなさんをみたことで、対話型鑑賞の営みを支えている人たちの存在を強く感じ、わたしたちが場を用意するのではなく、対話型鑑賞ツアーボランティアのみなさん、そしてこれまで関わってきた方々と一緒につくっていくものなのだと、今は思っています。



児童・生徒が国際色豊かな現代アートに触れ、楽しんでもらう機会とするため、教育機関と連携し、学校向け団体鑑賞プログラムやアーティスト派遣事業を実施しました。

### 学校向け団体鑑賞プログラム

授業や校外学習など学校行事を活用して、児童・生徒が現代美術に触れる機会となるように、引率教員含めて参加者の観覧料が無料となる事前申込制のプログラム。映像を用いたガイダンスの実施と共に、ボランティアのガイドによる対話型鑑賞ツアー及び自由鑑賞の2種類のプログラムを実施。対話型鑑賞ツアーでは参加者同士で語り合い、考えを拡げていく機会となるように、少人数制による対話型鑑賞を行いました。また、愛知県陶磁美術館では陶芸館の協力により体験型プログラム「土のアートプログラム」を実施しました。

実施会場：愛知芸術文化センター、愛知県陶磁美術館  
 実施日：2025年9月19日（金）-11月28日（金）  
 参加校数：24校  
 参加者数：1,106名



教員の声（実施アンケートより）

- ・生徒からは「面白かった」という声が一番多く届きました。また生徒の意外な一面を見ることができ、とても有意義な時間となりました。
- ・ボランティアの方がグループ2人ずつついて下さり、とても丁寧に館内を回ったり、作品を鑑賞しながら対話したりできて、普段の美術鑑賞とは違う経験ができてよかったです。
- ・対話型鑑賞は今回参加できたので、自由鑑賞も選択肢に入れて検討したいと思いました。

### 学校向け団体鑑賞プログラム in 瀬戸

瀬戸市のまちなか会場にて実施した瀬戸市内の小中学校を対象とした団体鑑賞プログラム。映像を用いたガイダンスの後、スタッフの先導により会場をまわり、ワークシートを用いて作品鑑賞を行いました。

実施会場：瀬戸市のまちなか  
 実施日：2025年10月1日（水）-11月28日（金）  
 参加校数：9校  
 参加者数：632名

### アーティスト派遣事業

アートとの出会いを通じて、より多くの子どもの感性や創造性の成長に働きかけるため、アーティストを県内の教育施設等に派遣しました。

### アイヌ伝統歌・影絵ワークショップ及び公演

アイヌの伝統歌を歌うマウンキキと、影絵ユニット「hoshifune」による影絵のワークショップと公演を実施。授業や休み時間を利用して児童たちとアーティストで影絵に用いるパペットの一部を制作するとともに、公演前には、アイヌの歌の輪唱や振り付けを練習し、公演を鑑賞するだけでなく、児童たちも参加できるようなプログラムを行いました。

参加アーティスト：マウンキキ+ [マウンキキ、hoshifune（小谷野哲郎、わたなべなおか）]  
 派遣：瀬戸市立長根小学校  
 開催日：6月4日（水）[制作]145名、6月5日（木）[制作]141名、6月6日（金）[制作]74名 [鑑賞]176名

### [実施プログラム]

アイヌ伝統歌・影絵ワークショップ及び公演  
 壁画制作ワークショップ  
 版築制作ワークショップ



### 壁画制作ワークショップ

ネイティブ・ハワイアの画家ソロモン・イノスによる壁画制作のワークショップを実施。ワークショップで制作したドローイングは、イノスが繋ぎ合わせ、会期中に一つの大きな壁画《たくさんの手/協働》として愛知芸術文化センターにて展示しました。

参加アーティスト：ソロモン・イノス  
 派遣先：古瀬戸保育園（瀬戸市）8月4日（月）22名、東保育園（瀬戸市）8月5日（火）22名、品野西保育園（瀬戸市）8月6日（水）37名、愛知県児童総合センター8月7日（木）-13日（水）946名  
 参加者数：1,027名



### 版築制作ワークショップ

ガーナのスタジオ「ハイブ・アース」のメンバーの指導のもと、土を叩いて固める「版築」という技法を用いて、土のブロックを制作するワークショップを実施しました。制作したブロックは、会期中、愛知県陶磁美術館に設置する作品の一部として使用しました。

参加アーティスト：ハイブ・アース（クワメ・ディヘル）  
 派遣先：瀬戸少年院  
 開催日：8月20日（水）[レクチャー・版築作業]、9月3日（水）[脱型]  
 参加者数：4名



Photo：三浦知也

## ラーニング専門研修「鑑賞をふかぼる」

村上慧 ラーニングチームメンバー



展覧会や映画、演劇などを鑑賞したあとに誰かと感想を話し合うことで、作品の印象が大きく変わったり、ひとりでは気づけなかった重要な細部が立ち上がってくる場合があります。そうした時間を通して、鑑賞はより強く、忘れがたい経験へと深まっていきます。「鑑賞をふかぼる」では、このような時間を多くの人に体験してもらうことを目的としました。

まず15人のボランティアメンバーとともに、芸術祭の会期前からオープン直後にかけて5回の研修を行いました。愛知県美術館や愛知県陶磁美術館で開催中の展覧会を鑑賞したあと、グループに分かれて感想を話し合う、という内容です。ほとんどが初対面同士だったため当初はぎこちなさもありましたが、「鑑賞する/語り合う」を重ねるうちに、自然と関係性が育っていきました。

芸術祭の開幕後はメンバーでシフトを組み、週末(土日祝)を

中心に「ラーニングセンターへたち」「ラーニングセンターせと」に滞在。来場者とメンバーが自由に話をする場を設けました。「ラーニングセンターへたち」では、会場内の全作品の写真を貼った大きな掲示板(通称「ふかぼるボード」)を用意し、ふせんで誰でもコメントを残せる仕組みを導入しました。「ラーニングセンターせと」では、まちなかの地図を使い、同様にコメントを残せる場をつくりました。

会期を通して多くの来場者がメンバーとの対話に参加し、数多くのコメントを残してくれました。個々の作品についての感想にとどまらず、鑑賞をきっかけに思い出された個人的な記憶や芸術祭全体の印象、さらには街でおすすめのラーメン屋まで、内容は実にさまざまでした。こうしたやりとりは、来場者とメンバーの双方に思いがけない発見をもたらしてくれました。

Photo: 稲田匡孝

担当 村上慧(ラーニングチームメンバー)、松村淳子(コミュニケーター)

ボランティア Yuko Uemura、いぬかいあきら、オオノユキコ、なかのちぐさ、まえざわ、まつ、宮崎知良子、熊谷彩知世、清水玲子、竹内千暁、土屋奈津子、藤井ゆか子、尹ジョンホ ほか(全15名)

## 研修

## 第1回「鑑賞」をこねくる

場所: 愛知県陶磁美術館  
(愛陶コレクション展「世界はやきものでできている」)  
日時: 7月27日(日) 13:30-17:00  
参加者数: 15名

最初の研修ではまず、「作品とは、作者のメッセージを伝達するためのものではない。鑑賞とは、メッセージを読み取る作業ではなく、作品の価値を創造する作業である」という前提を共有しました。「的外れなことを言ってしまうかも」という不安から、発言を控えてしまうような事態を防ぐためです。

その後はメモ用紙を持って展示室へ。現代陶芸のエリアを中心に、およそ1時間各自でじっくりと鑑賞しました。紙がメモでびっしり埋まった頃、会議室へ再集合し、3つのグループに分かれて後半の活動をスタート。鑑賞した経験を振り返り、印象的だった作品や、みんなに聞いてみたいことなどをカードに書き出していきます。

それからカードに書いたことを手がかりに、各グループでどんな鑑賞体験だったかを話し合います。メンバーのみなさんが自由に話す雰囲気身をまかせ、あっという間に時間が過ぎていきました。ひとつの作品についてみんなで言葉を重ねていくうちに、決して一人では辿り着けない、面白い発見をしてし



まうようなことがたくさんありました。一見とるにたらないものに見える違和感や、くだらなすぎて声に出すのはばかられるような発見でも、話しているうちに重要な話につながっていくものだと実感しました。

## 第2回「鑑賞」をもみほぐす

場所: 愛知県美術館(第2期コレクション展)  
日時: 8月3日(日) 13:30-17:00  
参加者数: 15名

1回目と同様に展覧会を鑑賞し、グループに分かれて話し合います。今回は話し合いパートの前に、「鑑賞をふかぼる」で目指したいことを確認しました。この活動の目的は、作品についての解釈を一致させることではなく、話し合うための「場所」を作ることです。そのために「お互いが安心して話せる雰囲気を作ることをみんなで心がけました。個別の作品の話題に限らず、この展覧会が掲げていた「テキスタイル」というテーマについてとくに議論が広がっていたのが印象的でした。たとえば、ルーチョ・フォンターナ《空間概念》について、「キャンバスが切られている作品だということは前から知っていたけど、テーマを意識した状態で見たら、ああ、これもテキスタイルじゃんって気づいた」といった話が出ました。



### 第3回「鑑賞」をふかぼる」の運用を考える

場所：アートラボあいち2階会議室  
日時：8月17日(日) 14:00-17:30  
参加者数：13名

2回の研修を踏まえて、芸術祭の会期中にラーニングセンターを訪れた来場者と「ふかぼる」のメンバーとが自然に会話できる環境にするためにはどうすればよいか、また来場者の感想をどういう形で残せるとよいかといった、運用のアイデアを出し合いました。ふせんを使ってカジュアルにコメントを残せるようにするなどの方針が決まりました。



### 第4回「鑑賞」をつつきまわす

場所：ラーニングセンターへたち  
日時：9月13日(土) 14:00-17:30  
参加者数：15名

開幕初日、これまでの研修と同じように芸術祭の作品を実際に鑑賞し、「ラーニングセンターへたち」にて感想を共有しつつ、来場者へ向けた「鑑賞」をふかぼる」の運用も検討しました。フル芸術監督のテーマ/コンセプトとも呼応する、戦争や平和、植民地、生命や死についてなど、さまざまな言葉がふせんに書き出され、「ふかぼるボード」に貼られました。ふせんの粘着が弱いことから、剥がれないようにするための工夫を検討したり、来場者への振る舞いをシミュレーションするなど、具体的な想定を行いました。



### 第5回「鑑賞」をねりあげる

場所：ラーニングセンターせと  
日時：9月15日(月・祝) 14:00-17:00  
参加者数：15名

最後の研修では、瀬戸市のまちなか会場で実際に芸術祭の作品を見たあと、「ラーニングセンターせと」で感想を話し合いました。時間が限られていたため、特に旧瀬戸市立深川小学校のアドリアン・ビシャル・ロハスを中心に、北側エリアの作品を鑑賞。来場者への振る舞いについても検討しながら、用意したマップにふせんでコメントを残しました。



Photo(下)：稲田匡孝



活動

Photo：三浦知也

### 週末の「鑑賞」をふかぼる

毎週末、「ラーニングセンターへたち」と「ラーニングセンターせと」にメンバーが滞在し、来場者にむけた活動を行いました。

#### メンバーによる日報(抜粋)

##### ○清水玲子さん

日付と場所：9月20日(土) /ラーニングセンターせと  
参加者：13名程度

・インフォメーションセンターに芸術祭のチラシを取りにこられた中学校の先生→生徒にとっては栄は遠いので、地元瀬戸で世界の作家のすばらしい作品を観ることができる機会をめぐったにないこと、ぜひ生徒達に観て欲しいとチラシを取りにきたとのこと。旧日本鉱泉は仕事帰りに「ひとつ風呂浴びる」場所だった(そこが作品に!)。瀬戸川はかつては水が真っ白に濁っていたこと、seto coffee等、瀬戸の地域についてお話をしました。  
・年配の女性の方、はじめは作品は(観ても)よくわからないと言葉少なかったですが、旧日本鉱泉はよく通っていて、常連さんが座る位置が決まっていたこと、今回、初めて男湯に入ったこと、シャワーがライトになっていて、銭湯跡がきれいになっていたことを話していただきました。→(地元)に愛されていた銭湯だったんですね)

##### ○まえざわさん

日付と場所：9月21日(日) /ラーニングセンターへたち  
参加者：40名程度

どこの作品が何階にあるか?という話よくなりました。廊下を通った人に挨拶したら逃げられることも多く、パネルの前に来たら声をかけるくらいがちょうど良いかも。ムルヤナの作

品について、作るのにどのくらいかかったのか等、深く質問され少し困りました。鑑賞をふかぼるという名前のため、作品について詳しく質問できるスペースだと思っていたみたいです。松村さんにフォローいただき事なきを得ました。最初は要領をつかめず、盛り下がってしまうこともありましたが、最終的には来場者さんと盛り上がるのができ楽しく終わられました!

印象に残ったこと：双子の姉妹が違う時間にきて感想を聞いてくれた。白鯨という本をおすすめしてくれました。55歳の女性が、瀬戸は遠いから行くのをやめようと思ってたけど、ラーニングボランティアの話が決め手で、行くといってくれた!その方が、いつシフトに入ってるか質問してくれて嬉しかった!

##### ○Nさん

日付と場所：10月11日(土) /ラーニングセンターへたち  
参加者：25~30名程度

三連休の初日だからお客様が多い印象。先週行った時よりコメントを残す方が多いように感じました。家族連れの方も多く、意外にもふかぼるテレフォンに興味を示していたのは親御さんの方でした。作品についての新視点をコメントして書いてくださった方がいてそれについて言及して聞いてみたら作品のビジュアルやキャプションからも逸脱した純粋なその人の考えや感じ方の尊さに気づけました。

○熊谷彩知世さん

日付と場所:10月19日(日) /ラーニングセンターせと  
 参加者:35名程度 (うち半数程度お声がけ8お話ししました)  
 ・加仙釜山へ行く前に立ち寄られた方。「ぜひ感想をお聞きたい!」とお伝えしたら、戻ってきていろいろお話ししてくださいました。刻々と変化の様子が面白いと。  
 ・まちなかのpanpanyaの作品を16枚見つけた2人組。あと2枚がどうしても見つけられない!と立ち寄られました。でもとても楽しそうで「最初からもう一度探してきます!」と元気を出ていかれました。  
 ・お子さんとご自身が作った卒業陶板が旧深川小学校に残っているとおっしゃった方。美味しいコーヒーが飲めるお店の話から、作品を残すべきか、瀬戸のこれからなど20分ほどお話ししました。  
 ・小学校のアドリアン、旧日本釜泉の佐々木類さん、ポップアップショップの富安さん、沖潤子さんの縫い物についてのお話をされる方が多かったです。

○土屋奈津子さん

日付と場所:11月9日(日) /ラーニングセンターせと  
 参加者:15名程度  
 ・ふかぼって感じていく鑑賞と、作品と出会った瞬間の感覚について…最初の印象は見るほどに失われたり、言葉にできたとしても単純な言葉だったりで価値を伝えづらい…というような話などを(同じくシフトに入っていた)熊谷さんとしました。個人的な鑑賞体験と、ふかぼるための場で言葉として紡がれた鑑賞体験と…それぞれあるんだろうな、と、お客さんとふかぼっていても、ふかぼるボードを見ても感じるがあります。

・また、自分が作品を見て感じたこととキャプションの説明が全然違ったりするという話も出ました。私は初対面の方とふかぼる時に、つい「ムルヤなって男の方なんですよ」とか正しい情報の提供に走ってしまうので、もっと「感じたこと」をやりとりしたい、その練習をしたと思いました。

○オオノユキコさん

日付と場所:11月8日(土) /ラーニングセンターへたち  
 ふせん記入者:20名ぐらい  
 ・来訪者が途切れなかった。  
 ・ふかぼるボードの評判がよく、面白がって見てくれる人が多かった。  
 ・瀬戸つながりで見てる人がいて、川辺ナホさんの作品の碍りの話とか楽しかった。  
 ・大学の先生と学生10数名(入れ替わり立ち替わり)が積極的に付箋書きや話に参加してくれた。あいち2025の作品から何を得たかみたいな内容を課題としてらしく話が弾んだ。鑑賞後に誰かと話したいという人が結構いると実感できました。

○いぬかいあきらさん

日付と場所:11月16日(日) /ラーニングセンターへたち  
 参加者:25名程度  
 ・お子さんが多く、積極的に感想を残していってくれました。  
 ・あるお子さんがガラ・ナセルの空間を、おもいの部屋といっていて興味深かったです。  
 ・ふかぼるテレフォンは午後、4回利用されました。これまたお子さんがこちらにかけたり、こちらからかけてくれたりしました。

ふかぼるテレフォン

「ラーニングセンターへたち」と「ラーニングセンターせと」に、誰でも電話をかけられるスマートフォンを設置し、同時刻にそれぞれの場所に居合わせた見知らぬ人どうしが通話できる仕組みを用意しました。「相手のプライバシーに関わることは、聞かないようにしましょう」「ここでの会話がお互いにとって良い思い出になるように、気をくばろう。相手の話をさげぎったり、否定したり、大声を出さないようにしましょう」「一定の時間が経つと、自動的に通話が切れます」といったルールのもとで、多くの人が電話を手に取り、その場限りの会話を楽しみました。「かける?」「どうする?」と、電話の前でそわそわする来場者の姿や、ある作品に感動した来場者が、誰かに話したくてたまらない様子で電話を手に取り、感想を熱心に話す風景などが見られました。



ふかぼる新聞

気になる作品をメンバーがピックアップし、ふせんに書かれたコメントなどを紹介する新聞を発行し、ラーニングセンターに掲示しました。



ライブラリーチーム

有志のメンバーが中心になり、ライブラリーチームも結成されました。ラーニングセンターへたちのライブラリーコーナーの一角を使い、「私の"あいま"を照らした本」というテーマで各自が本を持ち寄り、来場者は自由に読むことができました。また会期を通して第七号まで発行された「図書だより」では、おすすめの本を紹介していました。

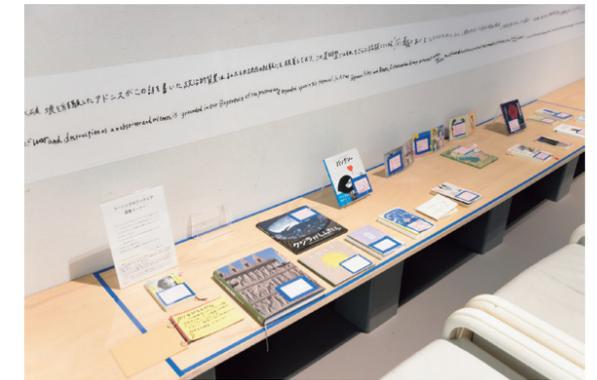
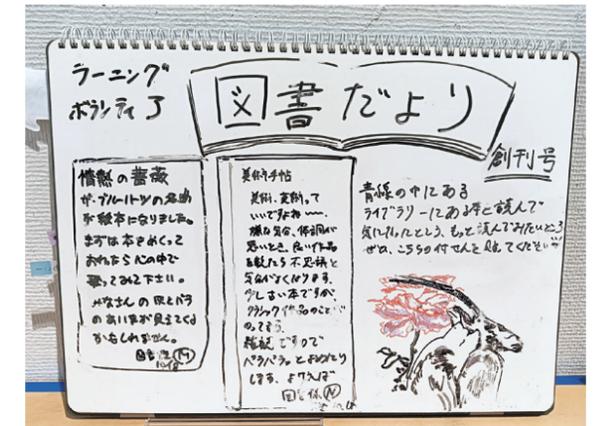


Photo: 三浦知也





2025年11月1日(土)から3日(月・祝)に「炎を囲む三日三晩——「瀬戸」に触れる特別な時間」と題して、国際芸術祭「あいち2025」が掲げるテーマ「灰と薔薇のあいまに」の視点から瀬戸のやきものと風景、その歴史に触れることのできる、三日間の特別なイベントが愛知県陶磁美術館で開催されました。ラーニングでは3つのプログラムを行いました。



Photo: 三浦知也

### 星をつくるテーブル

「星をつくるテーブル」は、手のひらサイズの版築ブロックを制作するワークショップです。イベント「炎を囲む三日三晩」開催期間中、11月1日(土)と3日(月・祝)の11時から16時まで、「つくとこ！陶芸館」第一実習室で開催し、のべ61名が参加しました。

参加者はまず、テーブルに並べられた大きな木片から好きな組み合わせを選び、型枠をつくります。そこに、「瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」」の制作にも使われている土(愛知県陶磁美術館の敷地内で採取したもの)に消石灰を混ぜた材料を入れ、小さな木片を当てながらハンマーで締め固めていきます。30分ほどのワークショップでしたが、型を考える楽しさや、土が徐々に沈んで固まっていく感触を味わいながら、みなさん作業に没頭していました。

陶芸館のご厚意で譲っていただいた粘土を水に溶かして3色の絵の具も用意し、参加者はまた一味違う土に触れながら、ブロックへの絵付けを楽しみ、嬉しそうに作品を持ち帰っていました。

「土なんて普段触ってない」「こんなに集中したのは久しぶり」という声が多かったことが印象的です。ここでの体験が、生活の中の小さな光として残ってくれたらうれしいです。

(文: 村上慧)

### 凸凹トーク

ハイブ・アースと国際芸術祭「あいち2025」ラーニングチームがタッグを組んで実現した《瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」》。その制作の舞台裏を、作品を参加者とともに見て周りながら担当したメンバー(辻琢磨、村上慧、松村淳子)が、11月3日(月・祝)の15:30から1時間程度の解説を行いました。

### 詩を囲む夕べ

「炎を囲む三日三晩」の一環として11月2日(日)に行われた「詩を囲む夕べ」は、愛知県陶磁美術館の中庭で、夕暮れから日没までのあいだ、瀬戸にまつわる詩を参加者と朗読する企画です。あらかじめ用意された詩は、事前にボランティアさんたちと共に準備しました。

午後4時、「凹」の周辺に人が集まり始めます。「凹」の周りには色画用紙に手書きされた詩が散らばっており、誰ともなく、皆が一つ一つの詩を読み始めていました。

企画者の黒田から主旨が説明されると、参加者は自分が朗読したい1枚を選び、思い思いの場所で詩を読み、散らばります。その後水辺の近くに再び集まると、マイクを回しながら詩を朗読します。気がつくと、日が沈んで空は青みがかったり、手元は明かりが必要なほどに暗くなっていました。

マイクに声を吹きかけるように読む人、肉声を響かせる人、歌うように演出する人もいました。誰が朗読しているのかわからなくても、それぞれの詩が、誰かの声によって存在している様子がとても美しく思えました。そんな光景に、通りすがりの人も足を止めて聴き入っているようでした。

朗読した詩は、事前にラーニングのボランティアさんたちと準備したものです。数十年前に瀬戸の小学生の詩や校歌、瀬戸出身の作家による短歌、瀬戸にまつわる民話など、一見するとバラバラの詩(や物語)たち。準備段階で校歌を合唱したり、詩に出てきた碑を訪ねたり、誰かの思い出話に耳を傾けながら選び取られ、そして手で書き写されたものです。こうしたプロセスはささやかな営みでしたが、詩は何度も蘇り、私にとって瀬戸の時間を今につないでくれる体験となりました。

(文: 黒田菜月)



「ラーニング・ラーニング」とは、「ラーニングを学ぶ」ということをコンセプトとし、国際芸術祭「あいち2025」に通じるテーマについて、参加者がそれぞれの考えを深めるためのプロジェクトとして芸術祭会期前の2025年1月からスタートし、会期中も含めて全8回開催しました。

「ラーニング・ラーニング」は、いわゆるトークイベントではなく、参加者の皆さんと一緒に学び、気づきを共有すること、対話することを重視することを目的としました。

各回では、専門家を招いたトークイベントに加えて、ディスカッションやワークショップなどのアクティビティを通じ、

一人ひとりがテーマについて、より身近に感じられることを目指しました。そのため、プログラムは3時間という長丁場での開催となり、各回毎のワークを用意するために、ゲストとともに事前の打ち合わせや準備にも時間をかけました。

この背景には、プログラムを通して参加者の皆さんと一緒に「考える」ための時間を作りたいという思いがありました。結果的に、会場からは毎回たくさんの感想や質問、話し声が聞こえてくるが多かったです。

(文・黒田菜月)

Photo: 三浦知也



Vol. 01から07のレポートはウェブサイトからご覧いただけます  
<https://aichitriennale.jp/2025/magazine/cat-report.html>

### Vol.01 多文化を認め合う交流拠点を目指して

ゲスト：阿部航太・児玉美香

[わくせいプロジェクト]

日時：2025年1月11日(土) 17:00-20:00 会場：アートラボあいち

参加者数：44名

### Vol.02 「灰と薔薇のあいまに」の解釈

ゲスト：石倉敏明

[国際芸術祭「あいち2025」キュレトリアルアドバイザー / 人類学者 / 秋田公立美術大学アーツ&ルーツ専攻准教授]

日時：2025年1月18日(土) 17:00-20:00 会場：古民家レンタルスペース梅村商店

参加者数：61名

### Vol.03 アクセシブルな表現の未来

ゲスト：中村茜

[国際芸術祭「あいち2025」キュレーター(パフォーミングアーツ) / 株式会社 precog 代表取締役]

日時：2025年2月1日(土) 17:00-20:00 会場：アートラボあいち

参加者数：31名

### Vol.04 愛知県陶磁美術館から見つけるものづくりと自然

ゲスト：佐藤一信

[愛知県陶磁美術館館長]

日時：2025年3月22日(土) 13:30-16:30 会場：愛知県陶磁美術館1階レストラン

参加者数：43名

### Vol.05 灰から生まれる時間

協力：愛知県陶磁美術館

日時：2025年5月25日(日) 13:30-16:30 会場：愛知県陶磁美術館 つくるとこ! 陶芸館

参加者数：26名

### Vol.06 道具を作る道具

ゲスト：七沢智樹

[Technel 合同会社代表 / 山梨県立大学特任教授]

日時：2025年8月10日(日) 13:30-16:30 会場：瀬戸くらし研究所

参加者数：20名

### Vol.07 映画とともに読み解く、イスラーム文化圏と人々

ゲスト：藤本高之

[イスラーム映画祭主宰]

日時：2025年10月4日(土) 13:30-16:30 会場：愛知芸術文化センター12階 アートスペース A 室

参加者数：84名

### 番外編「あいち2025」ラーニングドキュメントブック公開編集会議

日時：2025年11月30日(日) 13:30-16:30 会場：ラーニングセンターへたち

参加者数：88名

村上慧 ラーニングチームメンバー

私は普段アーティストとして活動している。なので、芸術祭のような場では、自分の作品を展示する側の立場にいた。その際、「ラーニング」や「教育普及」と呼ばれる部門のスタッフと一緒にワークショップを考えて実施する機会があったけれど、その意義について真剣に考えたことはなかった。

今回「あいち2025」にラーニングチームメンバーとして関わらせてもらったことで、約2年間、ラーニングの役割について考えることができた。そして自分なりの仮説に辿り着いた。

まず、「集まることが重要だ」という暗黙の前提がある。なぜ重要なのか。私たちが暮らしている社会は、ともすると仕事や日々の生活にまつわるものごとの「必要さ」によって、私たちのあいだにパーテーションを立てようとする。日々の忙しさは、「会う必要のないひとには、会う必要はない」と考えるのに十分な理由になる。

ただし実際は、年齢も価値観も何もかも異なる人間のほうがはるかに多く、そのバリエーションは、ひとりの人間が頭のなかで「世の中にはいろんな人がいる」と想像できる範囲では収まりようもないほど豊富であり、そんな人たちの動きや生活のすべてが連動して営まれているのが私たちの社会である。

そういった「想像の外」を、それでも想像するためには、やっぱり集まる必要がある。ラーニング部門はそのためにアートを使う。年代や価値観の異なる人が集まるためには「共通の話題」が必要で、芸術作品はその役割を自然に担ってくれる。なぜなら芸術家は、私たちがふだん見過ごしてしまいがちな世の中の問題を、作品を通して提示する専門家であり、その作品は常に「問い」のかたちをとるからである。重要なのは、その問いに正解がないことだ。正解がないおかげで、誰も間違えることがない。だからこそ、「自分はここが面白いと思った」と意見を述べるにはもってこいなのだ。ちょうど、人と人のあいだにテーブルを挟み込むようなイメージが近い。テーブルがあることで人は人と向き合うことができる。人によっては使いにくかったり、大きすぎると感じるものはあるかもしれないけれど、それでもそれはテーブルであることには変わらない。

そこでの対話や体験は、「作る」という魅力的な営みをアーティストの専売特許にしないための実践であり、人はみな平等になにかを作る能力を持っている、ということを出発点とするための場所でもある。

なによりも他の人が作った作品について考えたり話したりすることは、他者の問題を自分の言葉で考え、自分自身の問題として引き受けるための練習になる。その積み重ねが、やがては自分が住む街の出来事を、他人事ではなく自分自身の生活の延長として考える力につながっていくはずだ。ラーニングに携わっているひとたちは、そのことを信じている。

他者とのちいさな触れ合いの連続が、いつのまにか私たちのまわりを囲んでいたパーテーションを取り払い、世界の広がりを感じさせてくれる。それは言い換えれば「誰かの体験に参加すること」だと言える。誰かの体験を通して世界に触れなおすことと言ってもよい。

そのことをもっとも実感できたのが、15人のラーニング・ボランティアメンバーと一緒にいった「鑑賞をふかぼる」という活動だった。ラーニングセンターという拠点で、作品や芸術祭について、来場者や他のボランティアメンバーとざっくばらんに話をするというシンプルな立て付けだったけれど、会期終了後の振り返り会で、ボランティアメンバーが共有してくれたさまざまな感想はどれも予想外でうれしいものばかりだった。

「自分がまだ見ていない作品の話に来場者がするので、こっちもそれを見にいきたくなり、結果的にすべての作品を見ることができた。誰かと喋るだけでこんなにモチベーションが上がるんだという発見があった」

「休日に予定を入れない人間だったのですごくハードだった。来場者もボランティアからもパワーをいっぱいもらった。日々彩りがついた。ものの見え方が変わった。明るい気持ちになった気がする」

「自分のなかから知らないものが出てくる感じが新鮮だったし、人によって全く違う作品の印象を持って帰れるんだ、という衝撃があった。鑑賞の面白さを使って、なにか違うことができるんじゃないかという気がして今わくわくしている」

『「なにかを思う」ことは、自分の頭の中を過ぎ去るだけのものだと思っていたけれど、『思った』ことは誰かに投げかけられるということだし、投げかけられるということは、なにかが動き出すことだとわかった。ラーニングボランティアは、『なにかを思う』という許可を自分に与えられる場所だった」

一見ささいなことでも、人が人と関わることで自分がエネルギーを生みだし、それには人を変える力がある。そんなことを、作品を発表する側ではなく、芸術祭を支える側から実感できた2年間だった。

## データベース

本章「データベース」では、国際芸術祭「あいち2025」ラーニングの取り組みを参照しやすい形で整理しました。プログラム別にたどれる逆引き、2023年のラーニングチーム結成以後からの動きを追えるタイムライン、ラーニングセンターに配架したライブラリーのブックリストを収録しています。

# 逆引き目次

「ラーニング」概要	フォトアーカイブ	02
	コンセプト	14
	チーム紹介	15
	エッセイ 副田一穂「ぬかるみのラーニング」	50
	座談会 森山純子×ラーニングチーム	
	「安心して「学び」が動き出す場をつくる」	52
	タイムライン	88
各プログラム紹介		
ボランティアプログラム	会場運営サポート	
	作品看視、会場案内、ツアーやPA補助など	59
	対話型鑑賞ツアー	
	専門研修	68
	エッセイ 会田大也「対話の紡がれる地、あいち」	66
	コラム 大場美葵「対話の場を、共に紡いでいく」	71
	ラーニング	
	専門研修	
	-「鑑賞」をふかぼる	74
	-インタビューの練習	30
	-あいま研	42
	ラーニング・ボランティア・ウィーク	46
	コラム	
	-浅野翔「手を動かして考える」	48
	-黒田菜月「芸術祭を遠くに飛ばしたい」	36
	-野田智子「安心を支えるボランティアの人々」	63
	-村上慧「アートというテーブルに集まる」	84
アクセシビリティプログラム	ツアープログラム	56
	やさしい日本語チラシ	62
学校向けプログラム	学校向け団体鑑賞プログラム	72
	アーティスト派遣事業	73

プログラム	ラーニング・ラーニング	82
	へたちトーク	34
	炎を囲む三日三晩——「瀬戸」に触れる特別な時間	80
	-星をつくるテーブル	
	-詩を囲む夕べ	
	-凸凹トーク	
拠点	ラーニングセンターへたち	60
	ラーニングセンターせと	61
	-エッセイ 辻琢磨「そこにある力を引き出す」	22
	瀬戸リソースバンク	19
	ライブラリーのブックリスト	92
作品	瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」	
	-瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」	19
	-論考 大岩雄典「workとworkshopのあいまに——《瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」》について」	24
	-対談 辻琢磨×村上慧	
	「《瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」》を振り返る」	38

- 26日 国際芸術祭「あいち 2025」ラーニングチーム初顔合わせ
- 9日 ボランティア交流会

地域展開事業 底に触れる 現代美術 in 瀬戸

- 9月6日～11月4日 交流センター環境整備 (会期:10月12日～11月4日)
- 13日 ボランティア向け研修プログラム① 「鑑賞ディスカッション」 (企画:国際芸術祭「あいち 2025」ラーニングチーム (村上慧))
- 14日 ボランティア向け研修プログラム② 「遠隔鑑賞会」 (企画:国際芸術祭「あいち 2025」ラーニングチーム (黒田菜月))

1 持っているものの力を引き出す

SOCIAL TOWER MARKET 出店

- 9日～10日 ワークショップ「星をつくるテーブル」 (企画:国際芸術祭「あいち 2025」ラーニングチーム (村上慧))
- 10日 愛知芸術文化センターツアー「ここにグッときた。芸文のおもしろポイントを巡るツアー」 (企画:国際芸術祭「あいち 2025」ラーニングチーム)

2 手を動かして考える

瀬戸の版築プロジェクト「凸と凹」

- 27日 ハイブ・アース来日、テストピース (1) 制作
- 19日 テストピース (2) 制作

4 誰かの体験に参加する

ラーニング・ラーニング

- 11日 Vol.01 | 多文化を認め合う交流拠点を目指して (阿部航太・児玉美香)
- 18日 Vol.02 | 「灰と薔薇のあいまに」の解釈 (石倉敏明)
- 1日 Vol.03 | アクセシブルな表現の未来 (中村茜)
- 22日 Vol.04 | 愛知県陶磁美術館から見つけるものづくりと自然 (佐藤一信)

ラーニング専門研修

- 27日 インタビューの練習① アイスブレイク回 (お互いを知ろう)
- 3日 インタビューの練習② 準備の会 (インタビュー対象を検討する)
- 17日 インタビューの練習③ 実践の会1 (インタビューの受け取り手について考える)

ラーニング専門研修

- 27日 あいま研① テーマを「声」に「文字」におこす
- 3日 あいま研② テーマを解体し、言葉の関係性を探る
- 17日 あいま研③ テーマの「あいまいなあいま」を再解釈して表現する

ラーニング専門研修

- 26日 テストピース (3) 制作
- 9日 テストピース (4) 制作
- 2日 テストピース (5) 制作
- 22日 凹掘削
- 13日 ハイブ・アース来日
- 14～16日 制作ワークショップ
- 18～19日 制作ワークショップ
- 20日 少年院ワークショップ

3 安心して楽しめる環境を支える

ボランティア全体研修

- 20・21・22日 第1回 全体研修
- 18・19・20日 第2回 全体研修
- 29・30・31日 第3回 全体研修

Vol.05 灰から生まれる時間 (協力:愛知県陶磁美術館)

アーティスト派遣事業

- 4～6日 アイヌ伝統歌・影絵ワークショップ及び公演 (マユンキキ\*)
- 4～13日 壁画制作ワークショップ (ソロモン・イノス)
- 20日 版築制作ワークショップ (ハイブ・アース)

対話型鑑賞ツアー専門研修

- 26日 対話型鑑賞ツアー専門研修①
- 27日 対話型鑑賞ツアー練習会①
- 9日 対話型鑑賞ツアー専門研修②
- 10日 対話型鑑賞ツアー練習会②

ラーニング専門研修

- 27日 「鑑賞」をふかぼる①「鑑賞」をこねくる
- 3日 「鑑賞」をふかぼる②「鑑賞」をもみほぐす
- 17日 「鑑賞」をふかぼる③「鑑賞」をふかぼるの運用を考える

- 7日 インタビューの練習④ 実践の会2 (実際にカメラを構えてやってみる)
- 15日 インタビューの練習⑤ 実践の会3 (公開イベントとしてやってみる)

へたちトーク

- 17日 Vol.01 | 見えないアーキテクトの仕事
- 24日 Vol.02 | サインデザインから国際芸術祭「あいち2025」をみてみよう

- 8日 Vol.03 | はじめまして、テクニカルディレクターです
- 14日 Vol.04 | あいちで育まれる対話型鑑賞の文化～あいちの地力～
- 21日 Vol.05 | 「あいち 2025」ラーニングを建築する

ラーニング・ボランティア・ウィーク 準備期間

- 21日 名鉄瀬戸線のフリーペーパーをつくって乗ってる人に読んで欲しい (エピソード集めノートの設置)
- 27日 考える大テーブル
- 28日 一緒にバラを編んでみませんか

- 11・25日 考える大テーブル
- 18日 図書だより
- 19日 瀬戸と芸文をほめまろう! ~誰かに伝えたい、心に残るエピソードを教えてください(実験1)

- 6・7日 あいま研④ テーマ/コンセプトを書く

- 4・18日 来場者向けワークショップ

- 1日 あいまを見つけるタナ散歩 (実験 ver)
- 3・15日 こんにちは、ボランティアさん
- 8日 考える大テーブル
- 8日 瀬戸と芸文をほめまろう! ~誰かに伝えたい、心に残るエピソードを教えてください(実験2)
- 12日 芸術祭を「カレー」のようにかんがえ、ワークショップを実施するための企画からかんがえてみる(1回目)

ラーニング・ボランティア・ウィーク

- 15日~29日 ラーニング・ボランティア・ウィーク
- 15日 いろいろのあいま/ムルヤナで遊んじゃえ!! / 詩とあいち 2025 のあいまに (詩のワークショップ)
- 16日 ふたつのあいまをあそぶ (1回目) / 芸術祭を「カレー」のようにかんがえ、ワークショップを実施するための企画からかんがえてみる (最終回)
- 18日 もっと楽しむ! 「みたくなるカード」
- 21日 凸撃! インタビュー!! ひとつ!! ログ@あいち 2025 (1回目) / ふたつのあいまをあそぶ (2回目) / 視点を変えてパーシム・アル・シャーケルを鑑賞してみよう
- 22日 瀬戸のカコとミライのあいまを探るワークショップ (一般向け)
- 23日 凸撃! インタビュー!! ひとつ!! ログ@あいち 2025 (2回目) / 瀬戸のカコとミライのあいまを探るワークショップ (学生向け) / みてきたをシェア「みてきたカード」をつくろう / あいまを見つけるタナ散歩
- 24日 FARM2025「あいち 2025」の作品を通して世界を cultivate する!! / 瀬戸のカコとミライのあいまを探るワークショップ
- 26日 へたち de アートウルフ
- 29日 あなたの「あいち 2025」を振り返りまとめるバインディング / 瀬戸のカコとミライのあいまを探るワークショップ (振り返り) / 定点観測 PJ

- 1日 凹埋め戻し

対話型鑑賞ツアー(定期)

- 26日~11月30日の毎週金土日祝 愛知芸術文化センター
- 27日~11月30日の毎週土日祝 愛知県陶磁美術館・瀬戸市のまちなか

- 18日 子ども向け対話型鑑賞ツアー
- 19日 日本語以外が母語の方のための対話型鑑賞ツアー【英語編】

作品解説ツアー

- 27日 作品解説ツアー

- 4・5日 作品解説ツアー
- 13日 作品解説ツアー【小さな子ども連れ向け】
- 13日 作品解説ツアー【中学生向け】
- 25日 作品解説ツアー【聞こえない・聞こえづらい方向け】

- 8日 聞こえない・聞こえづらい方のための対話型鑑賞ツアー【筆談編】
- 16日 日本語以外が母語の方のための対話型鑑賞ツアー【やさしい日本語編】
- 23日 子ども向け対話型鑑賞ツアー
- 24日 見えない・見えづらい方のための対話型鑑賞ツアー

- 9・22日 作品解説ツアー
- 15日 作品解説ツアー【小さな子ども連れ向け】
- 16日 作品解説ツアー【中学生向け】

- 14日 国際芸術祭「あいち 2025」ボランティア等交流会

- 3日 版築制作ワークショップ (ハイブ・アース)

- 4日 Vol.07 | 映画とともに読み解く、イスラム文化圏と人々 (藤本高之)

- 30日 番外編 | 「あいち 2025」ラーニングドキュメントブック公開編集会議

学校向け団体鑑賞プログラム

- 19・30日 愛知芸術文化センター
- 6日 対話型鑑賞ツアー専門研修③
- 7日 対話型鑑賞ツアー練習会③
- 20・21日 対話型鑑賞ツアー下見研修(3会場)
- 28日 対話型鑑賞ツアー専門研修④実践をふまえた質疑応答会

- 2・7・11・15・18・24・25・30日 愛知芸術文化センター
- 8・29日 愛知県陶磁美術館
- 1・9・24日 瀬戸市のまちなか

炎を囲む三日三晩——「瀬戸」にふれる特別な時間

- 1・3日 版築ワークショップ「星をつくるテーブル」
- 2日 詩を囲むタベ
- 3日 凸凹トーク
- 5・8・14・19・26・27・28日 愛知芸術文化センター
- 9日 愛知県陶磁美術館
- 7・10・12・14・22・28日 瀬戸市のまちなか

その他トークイベント@ラーニングセンターへたち

- 13日 「鑑賞」をふかぼる④「鑑賞」をつきまわす
- 15日 「鑑賞」をふかぼる⑤「鑑賞」をねりあげる
- 20日~11月30日 週末の「鑑賞」をふかぼる

- 11日 『ありふれたくじら』(是恒さくら・著 / ELVIS PRESS・刊) 刊行記念トークイベント

- 7日 アボリジナルの芸術、物語、文化【アーティスト・トーク ウェンディー・ヒュバート】



## 執筆者プロフィール

### 会田大也

あいだ・だいや

1976年生。東京造形大学、情報科学芸術大学院大学 [IAMAS] 修了。2003年の開館時より11年間、山口情報芸術センター [YCAM] にて教育プログラムの開発運営を行う。ミュージアムにおけるメディアリテラシーや美術教育、企業との協働による教育プログラムの企画立案、地域での各種プロジェクト、また企業における人材開発といった分野で、ワークショップやファシリテーションの手法を用いて「学校の外の教育」を実践してきた。一連のオリジナルメディアワークショップにてキッズデザイン大賞、担当した企画展示「コログル公園シリーズ」で、文化庁メディア芸術祭、グッドデザイン賞などを受賞。

2014年 -2019年東京大学大学院 GCL 特任助教。あいちトリエンナーレ 2019／国際芸術祭「あいち2022」キュレーター（ラーニング）。2019年より山口情報芸術センター [YCAM] 学芸普及課長。

### 大岩雄典

美術家。1993年生まれ。「インスタレーション」を、人間を拘束し上演している現実の装置＝法にたいする再現・分析・介入の技術として捉えて美術作品を制作し、その助けとして批評や理論研究やワークショップも行なう。法律、感染症、漫才、カードゲーム、お化け屋敷、ウェブサイト、雀荘など、同時代性と普遍性の両方の射程を基準に、モチーフや形式を縦横に探究する。最新作《killing》（2024）は、日本の刑法とくに決闘罪の規定をもとにした参加型インスタレーションで、統治と近代性、所有と賭博を主題とした。主な展覧会に「渦中のP」(個展／十和田市現代美術館)「Encounters in Parallel」(グループ展／ANB Tokyo) など。直近の寄稿に美術誌「だえん2024」、「ユリイカ」お笑いと批評特集、『現代思想』カフカ特集など。

### 大場美葵

愛知県生まれ。2023年より山口情報芸術センター [YCAM] で教育普及を担当。京都造形芸術大学（現：京都芸術大学）にて対話型鑑賞を学び、国際芸術祭「あいち2022」「あいち2025」では、対話型鑑賞ボランティアのコーディネートや研修設計を担当を担当。作品を介した対話によって、自分の中に新しい視点が生まれたり、他者の表情や言葉が変化したりすることに関心を持つ。

### 杉原環樹

ライター、編集。1984年、東京都生まれ。武蔵野美術大学大学院造形理論・美術史コース修了。『美術手帖』『Tokyo Art Beat』『地域創造』『アーツカウンシル東京』などで取材執筆を行う。『artscape』で連載中の「もしもし、キュレーター？」の聞き手を担当。2021年より『美術手帖』本誌の外部編集も務める。関わった書籍に、卯城竜太（Chim ↑ Pom）+松田修『公の時代』（朝日出版社、2019）など。

### 副田一穂

国際芸術祭「あいち2025」プロジェクトマネージャー、愛知県美術館主任学芸員。1982年、福岡県生まれ。専門は西洋近現代美術で、国際芸術祭「あいち」では2010年から2022年までアシスタントキュレーターを務める。主な企画展に「芸術植物園」（2015年）、「アイチアートクロニクル1919-2019」（2019年）、「ミロ展——日本を夢みて」（2022年）、「幻の愛知県博物館」（2023年）。

### 森山純子

1965年水戸市生まれ。1990年水戸芸術館開館時からアシスタントとして展覧会、教育普及事業に関わる。1997年より現職。「高校生ウィーク」（1993-）、「赤ちゃんと一緒に美術館散歩」（2005-）「視覚に障害がある人との鑑賞ツアー session!」（2008-）等、乳幼児からシニアまでの多様な年齢層、コミュニティに向けた教育プログラムを市民、地域との協働により実践している。

## ラーニングチーム・プロフィール

### 辻琢磨

静岡県生まれ。静岡県拠点。建築家。2008年横浜国立大学建設学科建築学コース卒業。2010年横浜国立大学大学院建築都市スクール Y-GSA 修了。2011年403architecture [dajiba] 設立。2017年辻琢磨建築企画事務所設立。2022年合同会社辻琢磨建築企画事務所に改称。現在、渡辺隆建築設計事務所特別顧問。2014年「富塚の天井」にて第30回吉岡賞受賞\*。2016年ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館にて審査員特別表彰\*。\*共に403architecture [dajiba] として受賞。

### 浅野翔

兵庫県生まれ。愛知県拠点。デザインリサーチャー。2014年京都工芸繊維大学大学院デザイン経営工学専攻修了。同年から、名古屋を拠点に活動を始める。「デザインリサーチによる社会包摂の実現」を理念に掲げ、調査設計、ブランド・商品開発、経営戦略の立案まで、幅広いジャンルで一貫したデザイン活動を行っている。「未知の課題と可能性を拓く、デザインリサーチ手法」を掲げ、文脈の理解〈コンテクスト〉と物語の構築〈ヴィジョン〉を通した、一貫性のある提案を行う。合同会社ありまつ中心家守会社共同代表。

### 黒田菜月

神奈川県生まれ。東京都拠点。写真家。2013年第8回 写真「1\_WALL」にてグランプリを受賞。人と人との間に写真をおくことで起こるやりとりに関心を持つ。近年は、フィールドワーク、ワークショップなどを交えた映像作品も手がける。また、公立動物園の周年企画に携わるなど幅広い活動を行う。主なグループ展に2023年東京ビエンナーレ「動物園の避難訓練」。主な個展に『『約束の凝集』vol.3 黒田菜月 写真が始まる』gallery α M (2021、東京)、「つくりかけラボ13 野鳥観察日和」千葉市美術館 (2023) などがある。

### 野田智子

岐阜県生まれ。京都府拠点。アートマネージャー。2020年よりアートマネジメントとメディアプロデュースを軸にしたアーツプロダクション「Twelve Inc.」を共同設立し、芸術文化の環境創造とアーティストとの協働を行う。アーティスト・コレクティブ「Nadegata Instant Party」メンバー。主な仕事に「あいちトリエンナーレ2019」ラーニングセクションマネジメント (2018-19)、国際芸術祭「あいち」ラーニングコーディネーター (2021-2022、2024-2025)、名古屋城を舞台にしたアートプロジェクト「アートサイト名古屋城」プロデューサー (2023-) がある。

### 村上慧

東京都生まれ。長野県、東京都、千葉県拠点。アーティスト。武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。近年は千葉県山武市に購入した土地で、自然現象を利用した冷暖房を開発する《村上勉強堂》計画を進めている。主な展覧会に「村上慧 移住を生活する」金沢21世紀美術館 (2020、石川)、「TERRADAART AWARD 2023 ファイナリスト展」寺田倉庫 (2024、東京)、著書に『家をせおって歩く』（福音館書店、2016）などがある。

### 蛭間友里恵

ひるま・ゆりえ | コーディネーター

松村淳子　まつむら・あつこ | コミュニケーター

小出一葉　こいで・かずは | ファシリテーター

小林玲衣奈　こばやし・れいな | ファシリテーター

### 会田大也

あいだ・だいや | 対話型鑑賞ツアーボランティア監修

大場美葵　おおば・はるき | 対話型鑑賞ツアーボランティア監修

国際芸術祭「あいち2025」ラーニングドキュメントブック  
Aichi Triennale 2025 Learning Documentation Book

編集ディレクション 浅野翔

編集・執筆 辻琢磨、浅野翔、黒田菜月、野田智子、村上慧

写真 怡土鉄夫、稲田匡孝、岡松愛子、城戸保、黒田菜月、ToLoLo スタジオ、三浦知也  
あい撮りカメラ部：竹内久生、H. KUMAMOTO、minachom、ヨシダヒロシ

デザイン 阿部航太、伊藤健太

印刷 株式会社アイワット

発行 国際芸術祭「あいち」組織委員会

Printed in Japan  
2026年3月発行

著作権などの知的財産権について  
本の内容の一部または全部を、無断で複写（コピー）、複製、および磁気または光記録媒体等へ入力することを禁じます。  
本書に掲載されている作品および文章、画像、情報のコンテンツに関する著作権およびその他一切の知的財産権は、  
特別の記載のない限り、国際芸術祭「あいち」組織委員会に帰属しています。  
無断転載、無断使用などは固くお断りいたします。  
ご使用に当たっては triennale@pref.aichi.lg.jp までご一報をお願いいたします。

Copyright  
All rights reserved. No part of this book may be reproduced or utilized in any form or by any information storage or  
retrieval systems, without prior permission in writing from the copyright holders.  
The copyright of all contents in this yearbook including work, text, images, information and any other related  
intellectual property rights belong to the Aichi Triennale Organizing Committee unless otherwise specified.  
Unauthorized replication and use of the contents is strictly prohibited.  
Please e-mail triennale@pref.aichi.lg.jp you wish to use any of the contents on this book

特集

① 持っているものの力を引き出す

② 手を動かして考える

③ 安心して楽しめる環境を支える

④ 誰かの体験に参加する

